みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

２．研究および共同利用

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009836

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は「特別研究」「共同研究」「各個研究」という３種類の研究を柱としている。

「特別研究」は、2016年度から始まった第３期中期計画・中期目標期間の６年間を通じて、「現代文明と人類の未来――環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の１つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。

特別研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。

すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、採択される。共同研究会（一般）には、文化人類学・民族学及び関連諸分野を含む幅広いテーマを対象とし、挑戦的で、新領域開拓につながる研究である「新領域開拓型」と、本館の所蔵する資料（標本資料、文献資料、映像音響資料等）に関する研究である「学術資料共同利用型」の２つのカテゴリーがある。また、若手研究者の育成・支援を目的として、39歳以下の若手研究者を代表者とする共同研究（若手）も同様に公募している。

「各個研究」は、教員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

館の研究活動である「特別研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者には「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、特別研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、特別研究プロジェクト、26件の共同研究、約70件の各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。研究に客観性を担保していくためにも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体等による奨学寄附金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2020年度には『国立民族学博物館研究報告』45巻１号～４号が刊行されるとともに、SES（Senri Ethnological Studies）No. 103,104,105,106、SER（『国立民族学博物館調査報告』またはSenri Ethnological Reports）No.151,152、TRAJECTORIA Vol. 2、『民博通信 Online』No.2,3が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を開催している。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有しかつ後世に伝えるため、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。特に2014年度より、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の蓄積、発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度の2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する４件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。2015年度は、台湾原住民や北米北方先住民に関する２件のプロジェクトが加わり、合わせて６件のプロジェクトを実施するとともに、パイロット版のデータベースを作成した。３年目となる2016年度から人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクトとして位置づけられ、３件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト４件、強化型プロジェクト７件、合計11件のプロジェクトを実施した。2018年度は、４件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト

４件、強化型プロジェクト５件、合計９件のプロジェクトを実施した。2019年度は、３件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト４件、強化型プロジェクト６件、合計10件のプロジェクトを実施した。2020年度は、３件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト３件、強化型プロジェクト８件、合計11件のプロジェクトを実施した。各プロジェクトが本館の収蔵資料のソースコミュニティなどと協働してデジタル博物館の構築を促進する取り組みを実施したことにより、本事業によって構築されたデータベース・コンテンツの格納件数が、93,763件（1,912,693レコード）となった。研究成果の公開促進を目的として、2018年度より新設した国際発信プログラムにより、『国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム資料集』を１冊刊行した。開発型プロジェクトでは、国際ワークショップ「Fishing and Material Culture in Maritime Asia」をオンラインで開催した。また、構築した４つのデータベースの公開を進め、プロジェクト全体の成果の国際発信と一般社会への発信に尽力した。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく４分類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は海外直接収集資料としてカナダのトーテムポール、国内購入資料として日本の伝統芸能衣装、アイヌの工芸品資料を収蔵した。また、日本の友禅振袖、モンゴルの生活関連資料、アイヌの木彫資料等を寄贈受入した。

本館は、民族資料や文化財、博物館資料を対象に、一時的な非破壊分析や材質分析がおこなえる非破壊分析・材質分析装置システムを所有している。このシステムを文化人類学やその周辺領域の学問分野において、さまざまな組織や研究者がより積極的に活用でき、科学的研究に基づいた共同利用の促進に資することを目的として、共同利用科学分析室を運用している。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2020年度は、マイクロ資料2,687件（図書2,562件、新聞雑誌４タイトル125件）を登録した。遡及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internetを介して広く公開・利用されており、2020年度は、図書館間相互利用での現物貸借受付が542件、文献複写受付は3,714件と、大学間の共同利用に貢献している。また、一般利用者への貸出冊数は1,076冊であった。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、民族学資料（標本資料、文献図書資料、オリジナル映像・音響資料、研究アーカイブズ資料）の利用に関する問合せを１つの窓口で対応することで、サービス向上を図っている。2020年度には156件の問合せに対応した。

また、蔵書点検３カ年計画の３年度目として、約22万冊の蔵書の点検を行った。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2020年度は引き続き資料の整理作業を行い「杉浦健一アーカイブ」、「菊沢季生アーカイブ」、「岩本公夫アーカイブ」の資料追加寄贈を受入れた。

また、アーカイブズ文書資料の特殊性に鑑み、複写にあたっては申請者の研究内容との関連性等を総合的に判断した上で許可することや、複写の申請は原則として来館時に限ること等を明記することとして、規程の改正を行った。さらに、近年国外からの来館者の利用申請が増加傾向にあることを踏まえ、利用申請書及び同意書の英語版を作成した。加えて、本館が大学共同利用機関として資料を適切に利用させるために、資料の利用方法について著作権者と確認する様式の検討を行った。

2-1　みんぱくの研究

特別研究

●特別研究の意義

特別研究は、2016年度から始まった第３期中期計画・中期目標期間の６年間を通じて、「現代文明と人類の未来――環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

近現代のヨーロッパに発する科学・技術、政治・経済制度、社会組織、思想などからなる西欧文明は、世界の多くの国と地域に影響を与え、科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきた。しかし、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言える。特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題である。このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直し、現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として特別研究を発足させた。この特別研究は、グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代的問題系として環境問題や人口をめぐる地球規模の変動をとらえ、それにアプローチすることで、旧来の

（伝統的な）価値から、いかに多元的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざすものである。

2020年度は、前年度に立ち上がった、「文化遺産とコミュニティ」に関する研究プロジェクトにおいて、国際シンポジウムを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大状況と、参加国・地域との時差等を考慮し、合計５回の連続ウェブ研究会「文化遺産実践における身体とモノ――集合的健忘に抗するための文化伝達」（2021年２月13日～３月13日）を実施した（参加者合計474名）。

2018年度に立ち上がった「マイノリティと多民族共存」に関する研究プロジェクトにおいては、2020年３月に開催予定であった「Performing Arts and Conviviality」と題する国際シンポジウムを2021年３月に実施予定であったが、参加予定者等との協議の結果、さらに次年度に延長することし、2020年度はその準備に向けた研究会 “Inaugural Zoom Meeting of the Special Research Project, Performing Arts and Conviviality” を2021年３月６日に開催した（参加者31名）。

また、2016年度に策定したロードマップに沿って、「文化衝突と多元的価値」をテーマとする研究プロジェクト「グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？」を新たに立ち上げ、本テーマに関する公開講演会「ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう」を開催した。

更に、2020年度は、館長リーダーシップ経費により、新たに緊急枠として「現代文明と感染症」を設置、プロジェクトリーダーを館内募集した結果、島村准教授をプロジェクトリーダーに選考し、研究プロジェクト「コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証――東アジアを中心に」を立ち上げ、次年度の国際シンポジウム開催を企画した。

他、研究成果の国際発信に向けて、英文での成果刊行の準備を進めている。

2020年度特別研究一覧

リーダー	プロジェクト名	テーマ区分	研究年度
福岡正太	パフォーミング・アーツと積極的共生	マイノリティと多民族共存	2018-2022
飯田　卓	デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ	文化遺産とコミュニティ	2019-2021
西尾哲夫	グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？	文化衝突と多元的価値	2020-2022
島村一平	コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証――東アジアを中心に	現代文明と感染症	2020-2022

●特別研究のテーマ区分とプロジェクト

１．テーマ区分：⑤　マイノリティと多民族共存

プロジェクトリーダー：人類基礎理論研究部　福岡正太

研究課題：パフォーミング・アーツと積極的共生

研究目的

共生は、可視的な差別は概ね解消されているが、集団間の忌避感や偏見が残る「消極的な共生」と、お互いの文化的特性・差異を認め、尊敬の念を抱けるような「積極的な共生」に分けることができる。本プロジェクトは、音楽・芸能などに代表されるパフォーミング・アーツが「積極的な共生」を実現するために果たしうる役割と可能性を探ることを目的とする。ここで言うパフォーミング・アーツとは、音楽、舞踊、芸能、演劇はもとより博物館・美術館における体験型インスタレーションなど、身体を活動の基盤とする幅広い活動をさす。元来、パフォーミング・アーツは、身体を媒体とし視覚中心的な認識体系を超える（とは異なる）人間の知覚・思考形態に作用すると考えられ、人間の感情に大きな影響を与えることが報告されている。しかし、その一方で、パフォーミング・アーツのもつ感情に作用する力が、偏狭な国家主義、民族主義、性差別主義などの表現として利用されてきたことも事実である。そこで、本プロジェクトでは、パフォーミング・アーツが「積極的な共生」の達成に寄与する枠組みや条件を、具体的な事例の蓄積とそれらの比較検討から探りたい。

人間の集団は、その規模や地域に関わらず、民族、宗教、言語、政治的信条、経済階層、年齢、ジェンダー、セクシュアリティなど様々な指標（徴）により区別されており、そのように区別される集団間には、力の不均衡

が存在することが多い。この中で劣位におかれた集団（マイノリティ）の文化や歴史は、彼らが居住する国家や地域などの公的な文化表象や教育から排除される傾向がある。そのため、マイノリティが音楽や芸能に自己表現や主張の場を求める例がこれまでに数多く報告されてきたが、パフォーミング・アーツと共生の関係をテーマにした研究は数少なく、また地域的にも限定的であった。本プロジェクトでは、世界各地で関連するプロジェクトを展開する研究者や活動家の参加をつのり、パフォーミング・アーツを「積極的な共生」実現に向けた具体的な方策としてとらえる総合的な研究を目指す。

実施状況

2020年３月19日～22日に開催を予定していた国際シンポジウムが新型コロナウイルス感染症の広がりにより延期となったため、状況をみながら、国際シンポジウムの開催の可能性を探った。館内研究員である寺田吉孝名誉教授、国際共同研究員であるデボラ・ウォン教授（カリフォルニア大学リヴァーサイド校）、国際研究協力者サミュエル・アラウジョ教授（リオデジャネイロ連邦大学）と開催方法と内容について議論を深め、2021年３月にオンラインにて趣旨説明と基調講演を中心とした第１回研究会を開催した。その際、令和３（2021）年度には、３回（６月、９月、12月）のオンライン研究会をおこない、３月ごろに対面でのシンポジウムの開催を目指すことで意見がまとまった。

研究成果の概要

対面でのシンポジウムは、再度、延期せざるをえなかったため、期待された成果は次年度以降に持ち越すことになった。しかし、第１回オンライン研究を開催して趣旨説明と基調講演をおこない、全発表者と問題意識を共有し、今後のオンライン研究会およびシンポジウムで検討すべき問題点を整理することができた。

特別研究に関連した成果の公表実績

本研究プロジェクトを実施するきっかけとなったICTM（International Council for Traditional Music）のスタディ・グループ「音楽とマイノリティ」のシンポジウム（2014年、本館にて開催）の報告書 *Music and Marginalisation: Beyond the Minority-Majority Paradigm*（SES No. 105）を出版した。

２．テーマ区分：④文化遺産とコミュニティ
プロジェクトリーダー：人類文明誌研究部　飯田　卓
研究課題：デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ

研究目的

文化をめぐる第三の波が到来しつつある。第一の波は、ナショナリズムと結びついたかたちで文化遺産に関する枠組みができあがった19世紀末から20世紀初頭。第二の波は、産業資本主義への懐疑とともに文化の政治性が浮きぼりになった1970年代から1990年代。そして現在、ヒューマニティ（人間性）の概念をラディカルに問いなおすAIが登場し、ヒューマニティの最後の砦として文化が見直されはじめている。

これら３つの波は、一定時期を過ぎれば鳴りをひそめるといった類いのものではない。現にこんにち、第一の波によって問題化されたナショナリズムや、第二の波によって問題化されたアイデンティティ政治と文化との関係などが、なおも余韻を残しつつ第三の波と干渉し合っている。言いかえれば現代は、ナショナリティとローカル・アイデンティティ、ヒューマニティといった異なる価値に駆動されながら文化が躍動する時代だといってよい。

いっぽうで、文化が意味する範囲は相変わらず多様である。文化が時代を読み解く鍵になるとしても、その定義について合意がなされることは、当分のあいだないだろう。文学や美学が扱ってきた貴族趣味の芸術文化や、ロマン主義や文化人類学が扱ってきた生活様式としての文化、ならびにカルチュラルスタディーズが扱ってきた産業資本主義的なポピュラーカルチャー（文化）は、互いに響きあいながらそれぞれにリアリティを帯びている。ただし、第三の波を受けた現代においては、生活場面全般の行動様式という意味での文化は、相対的に存在感を弱めている。代わって存在感を強めているのが、さまざまな複製技術（VR技術など、デジタル技術に含まれないさまざまな技術も含む）によってパッケージ化され、アイコンとして流通しうる芸術文化やポピュラーカルチャーである。アイコン化になじみにくい行動様式としての文化は、現代では、無形文化遺産という名でパッケージ化されて流通する。このため文化人類学において議論されてきた生活文化は、文化遺産やそれを収める博物館といったテーマにおいてとりわけ先鋭的に問題化され、芸術文化やポピュラーカルチャーの問題に関わっている

のである。

本研究では、文化遺産の価値をめぐってくり広げられる社会関係からその特殊性や政治性を明らかにするとともに、それら文化遺産が現代的価値であるヒューマニティの代理／表象たりうるかどうか、言いかえれば、ローカルな文脈において生まれたはずの文化遺産が普遍性を持ちうるかどうかを議論する。ここでいう文化遺産は、ユネスコなどによって公的に認定されたものだけを指すのではなく、人間的な無形の営みを蓄積・反映した五感的表現は便宜的にすべて文化遺産とみなす。こうした文化遺産が、ナショナリティやローカル・アイデンティティのみならず、ヒューマニティをめぐる議論にも影響されながらいかなるふるまいを示すかを実証的に明らかにしていく。

実施状況

本年度は、前年度（2019年度）末の新型コロナウィルス感染症の副次的影響で普及したウェブ会議アプリを用い、４回の研究会を実施した。うち１回は前年度から延期されたものである。実施日と発表者、発表課題は以下のとおり。

５月30日　松田　陽（東京大学）　文化遺産の民主化と商品化と断片化
６月13日　關　雄二（民博）／ダニエル・サウセド・セガミ（立命館大学）
南米ペルー北高地の小村における文化遺産保護の試み
７月18日　田中英資（福岡女学院大学）　文化遺産と地域社会をつなぐ道
８月20日　中村真里絵（民博 外来研究員）　共有される地域の記憶と共有されない個人の記憶

いっぽうで本年度は、空前の感染症蔓延の影響により、対面的なシンポジウム開催とそのための打合せを中止せざるをえなかった。しかし、５回連続のウェブ研究会を開催することにより、結果的に、当初予定していたよりも多くの聴衆に研究発表を聴講してもらうことができた。研究会の統一テーマは「文化遺産実践における身体とモノ――集合的健忘に抗するための文化伝達」である。各回の実施日とテーマ、発表者と発表題目は以下のとおり。

第１回　記録メディアの継承　2021年２月13日
ニール・キャリア（ブリストル大学）　視覚遺産と都市
縄田浩志（秋田大学）　片倉もとこ中東コレクションの肖像権問題と写真アーカイブズ化
南 真木人（民博）　博物館とソースコミュニティの協同
第２回　モノの継承　2021年２月20日
アロミカ・バッタチャリャ（ペルーインド協会）　アフリカ系ペルー人による木製打楽器の音楽遺産化
吉田ゆか子（東京外国語大学）　バリの芸能の継承における仮面と衣装
佐藤若菜（新潟国際情報大学）　ミャオ女性における刺繍技術の伝承
第３回　デジタル技術をとおした継承　2021年２月27日
グラエム・ウェレ（ブリストル大学）　デジタル時代の文化継承
真鍋陸太郎（東京大学）　参加型コミュニティアーカイブのデザイン
飯田　卓（民博）　実社会における博物館資料の再生
第４回　学術活動をとおした継承　2021年３月７日
ジョン・ケイ（インディアナ大学）　次世代育成能力、遺産実践、高齢者福祉
松田　陽（東京大学）　日本の古墳の近現代史
ダニエル・サウセド・セガミ（立命館大学）／關　雄二（民博）
過去と現在の架け橋
第５回　実践と記憶の継承　2021年３月13日
カティ リンドストロム（KTH王立工科大学）　世界遺産登録は地域の再生産や継承実践を阻害するか？
田中英資（福岡女学院大学）　「われわれはリュキア出身のトルコ系牧畜民だ」
河合洋尚（民博）　遺産実践としての景観ポリティクス

研究成果の概要

年度前半の研究会は、2021年２月から３月にかけて開催した連続ウェブ研究会の準備として意義あるものとなった。また、連続ウェブ研究会は、本来ならば参加できない国内他地域や海外の聴衆の参加を可能としたという意味で、イベントとして大きな成功を収めた。また、内容的にも充実したものとなった。

今後の成果発信につながる論点としては、先行世代の記憶や経験を伝承していく営み（文化継承または文化遺産実践）において、さまざまな「メディア」が活用されていることである。ここでいうメディアとは情報の記録や通信の媒体にかぎらず、日常的に使われるモノ（物質文化）やその製作など、記憶や経験を継承するきっかけや機会などを含んでいる。ただし、どのような文化継承であろうと単一のメディアだけで実現することはなく、複数（場合によっては無数）の回路を用いなければ継承が容易に中断されることがある。

連続ウェブ研究会では、本研究の最終年度にあたる来年度（2021年度）に進めていくべき成果出版の準備を十全におこなうことができた。今後は、ウェブ研究会で共有したことがらを念頭に置きつつ、文化継承の現代的なありかたや現代的な諸問題について各登壇者が論文を執筆していく。

特別研究に関連した成果の公表実績

上記で述べた発表を除く成果公表実績は以下のとおり。

（出版物）

飯田　卓

2021 「遺産化する地域料理」野林厚志（編集委員長）・宇田川妙子・河合洋尚・濱田信吾・飯田　卓・卯田宗平・梅崎昌裕・大澤由実・樫永真佐夫・菅瀬晶子・中嶋康博編『世界の食文化百科事典』pp. 636-641, 東京：丸善出版。

河合洋尚

2020 『景観人類学入門』東京：風響社

2021 「人類学如何着眼景観？――景観人類学之新課題」（辺　清音訳）『風景園林』28(3)：16-20。

末森　薫

2020 「敦煌莫高窟初唐窟に描かれた千仏図の研究」『鹿島美術研究 年報別冊』37：427-437。

2020 「敦煌莫高窟北周時代的石窟空空間构成――解析図案展示的方向性」『芸術学界』24：103-149。

2021 「光学撮影が明らかにした地域文化」国立民族学博物館編『復興を支える地域文化――3.11から10年』pp. 77-81, 大阪：国立民族学博物館。

2021 「新潟県十日町市で発見された越後縮『御召縮』関連資料の解読支援」日髙真吾・黄　貞燕編『地域文化を活用する――地域振興、地域活性に果たす役割』pp. 143-158, 大阪：大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館日髙真吾研究室。

2021 「民俗文化財の光学撮影調査」日髙真吾編『継承される地域文化――災害復興から社会創発へ』pp. 210-223, 京都：臨川書店。

松田　陽

2020 「文化遺産研究から見た建築文化遺産」『建築雑誌』1743：7-9。

2020 「ソンマ・ヴェスヴィアーナの古代ローマ遺跡の保全と活用」『地中海学研究』43：65-66。

2020 「ICOM 博物館定義の再考」『別冊博物館研究――ICOM 京都大会2019特集』pp. 22-26, 東京：公益財団法人日本博物館協会。

Matsuda, A.

2020 Public Archaeology at the So-Called Villa of Augustus in Somma Vesuviana. *Amoenitas*（*Rivista internazionale di studi miscellanei sulla villa romana antica*）8: 105-112.

田中英資

2021 「『リュキアの古道』トレッキング観光を通した遺産化――トルコ地中海地方デムレにおける『デムレーケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバル』の事例から」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』31：1-30.

（口頭発表）

Iida, T.

2020年8月26日 'Re-embedding Museum Objects into Local Communicative Networks.' *ACHS Fifth Biennial Conference 2020, Curated Session "Local Values of Heritage in Africa: Swinging between the Universal and the Local as well as the Tangible and Intangible"*, University College of London, London, United Kingdom, オンライン開催

河合洋尚

2021年3月28日 「ハワイの華人と客家」第584回みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう、国立民族学博物館

田中英資

2020年５月31日　「文化遺産、観光、地域社会のインタラクションと道――トルコ地中海地方『リュキアの古道』トレッキング観光を事例として」日本文化人類学会第54回研究大会、早稲田大学、東京、オンライン開催

３．テーマ区分：③文化衝突と多元的価値

プロジェクトリーダー：グローバル現象研究部　西尾哲夫

研究課題：グローバル地域研究と地球社会の認知地図――わたしたちはいかに世界を共創するのか？

研究目的

和辻哲郎はインド洋から地中海に至る船旅での見聞をもとに風土的文化類型論を構築し、井筒俊彦はイスラーム神秘主義の中に普遍性を探り、東洋的哲学を構築した。また梅棹忠夫は「中洋」という文明圏の発見から地球的規模の文明論を構築し、中東・イスラーム世界を対象とする地域研究体制を創り、従来型の国益に沿う地域研究を、地球規模の人類的課題に係る問題群にアプローチする学問的営みへと発展させた。

西洋と東洋との第三項として「中東」を想定することで学問的発展を促した三者に対し、エドワード・サイードは、非西洋への西洋の植民地統治をも正当化させてきた西洋と「中東／オリエント」との認識論的・存在論的差異について明らかにし、近代西洋と非西洋との関係をめぐる内省的な再検討を促した。しかし日本と中東の文化的事物の往来が近代西洋を介して行われてきたことに目を向ければ、「遠い異郷」としての相互イメージに立脚する日本と中東の文化的仲介者／場としての西洋の役割について理解できるだろう。文化的に隔てられた地域を仲介した西洋への再検討は、グローバル文化的知識の環流が起こる現代的状況を解明することにもなりうる。

個人がアクセスできる知識と公共的コミュニケーション空間の関係の激変は、文化が資源化されて公共性を獲得するプロセス、そしてローカルな生活空間とグローバルな社会空間が接合し、個人の社会的動員作用として働くメカニズムにも影響を及ぼしてきた。そこでグローバルな文化資源を個人がどのように実践して社会に関わるか、それが地域意識や世界観にどのように作用し、媒介項（変項）として環境要因や身体性の類型化可能な要因として作用するのかを確認することが重要となる。旧来の世界認識が、個人空間と制度的システムとの間で生起するナラティブ・ポリティックスに感応し、いかなるグローバルな地域性を獲得しようとしているのかをモデル化するために「東洋（日本）――西洋（ヨーロッパ）――中洋（中東）」における文化往還を検討しつつ、地球社会の認知地図を描こうとしてきた研究枠組みを批判的に再検討することで、現代における「文明」を再定義できるだろう。

地域研究が新たな価値を創出するためには、普遍的な価値を視野に入れた上で、グローバル化という視点から地域を再定位し、同時に地域的視点からグローバル化を再定位しつつ、人びとと世界とのつながり方の現代的動態をフィールド調査によって解明する「グローバル地域研究」が必要となる。自然・社会環境と言語メディア環境に係る地球規模の変動下において個人がいかに情報を入手し、それを知識としてストックし、さらにそれを資源として活用し、個人が生きるローカルな生活空間とグローバルな社会空間をどのように接合しているかという観点から、個人の再社会化ならびにそれらの相互作用の中に多元的価値を包摂／排除する形で共創される社会空間の実相を捉え直す。

実施状況

⑴みんぱく公開講演会「ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう」（主催・国立民族学博物館／日本経済新聞社）を開催し、基調講演「アラジンはなぜ世界を魅了するのか？――ファンタジーの文明誌」と「妄想が世界を創る！　森見登美彦（作家）×西尾哲夫」という対談形式の報告をした。文学研究は地域研究と協業することで新領域を開拓する可能性があることを示した。他者をめぐる物語空間と小説の歴史類型論の構築を試みる一環として、グローバル化とデジタル化が進む地球社会において、ファンタジーの現代的役割に着目し、その創造の現場で考えることで、多元的価値共創空間としての世界文学の可能性について考察した。なおこの講演会を機に森見登美彦氏を国立民族学博物館の特別客員教授として迎え、学際的な共同研究を2021年度より始める。

⑵以下の研究発表による研究会をオンラインで開催した。

第１回　2020年５月４日　16：00～17：30

黒田賢治「近代日本と中東関係をめぐる試論――大正３年巡礼船事業をめぐる海洋覇権と植民地運営を中心に」

第２回　2020年６月５日　16：00～17：30

西尾哲夫「神と人の言葉をめぐる世界認識の類型化に向けて―― Olivier Hanne, L'Alcoran: Comment l'Europe a découvert le Coran.（Paris: Belin, 2019. 696頁）の紹介と井筒俊彦のコーラン（クルアーン）研究の再評価」

第３回　2020年７月３日　17：00～19：00

Irfan Ahmad（Max Planck Institute for the Study of Religious & Ethnic Diversity）Are Anthropology and Ethnography Equivalent?

Hatsuki Aishima（National Museum of Ethnology）Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom

第４回　2020年７月31日　16：00～18：00

鈴木英明「19世紀後半から20世紀前半のペルシア湾における真珠採取業と拘束、奴隷制」

第５回　2020年11月20日　16：00～18：00

奈良雅史「国際貿易都市・浙江省義烏市におけるムスリムの共在のあり方」

第６回　2021年２月22日　16：00～18：00

竹村嘉晃「シンガポールにおける『ナショナルな』舞踊の生成――〈ピープルズ・バラエティー・ショー〉とインド人舞踊家の関わりを中心に」

※上記発表の英語タイトル（⇒HP に掲載）

第１回　2020年５月４日

Kenji Kuroda（National Museum of Ethnology）

Japanese Ships Never Came Again: A Study on Hajj Travel Business in Southeast Asia in 1914

第２回　2020年６月５日

Tetsuo Nishio（National Museum of Ethnology）

Toward a typology of world recognition from the viewpoint of the words of God and man: Critical Book review of Olivier Hanne, *L'Alcoran: Comment l'Europe a découvert le Coran*（Paris: Belin, 2019. 696p.）and re-evaluation of Toshihiko Izutsu's Quranic studies

第３回　2020年７月３日

Irfan Ahmad（Max Planck Institute for the Study of Religious & Ethnic Diversity）

Are Anthropology and Ethnography Equivalent?

17：20-18：00

Hatsuki Aishima（National Museum of Ethnology）

Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom

第４回　2020年７月31日

Hideaki Suzuki（National Museum of Ethnology）

Pearlfishery, Bondage and Slavery in the Persian Gulf, from the Late 19th Century to the Early 20th Century.

第５回　2020年11月20日

Masashi Nara（National Museum of Ethnology）

Co-presence of Muslims in Yiwu-shi, Zhejiang Province

第６回　2021年２月22日

Yoshiaki Takemura（National Museum of Ethnology）

The Making of "National" Dance in Singapore: 'People's Variety Show' with a Focus on Indian Dancers

研究成果の概要

分担者がターゲットとするグローバルに環流する現象（環流グローバル現象）について、それにかかる文化資源を個人がどう日常的に実践して社会空間に関わるか、それが地域意識や世界観などにどう相互作用して、その媒介項（変項）として環境要因やら身体性やらの類型化可能なファクターが働いているかをあぶりだしていく分析作業をおこなった。国内外の共同研究者とのあいだで問題意識の共有をはかり、研究テーマや研究手法について相互理解を深めるために「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（領域開拓プログラム（研究テーマ公募型））」に応募した。

特別研究に関連した成果の公表実績

上記に記した講演会は、日本経済新聞社の協力で動画として視聴可能となっている。

危機の時代空想羽ばたく　民博教授×作家、対談：日本経済新聞（nikkei.com）

また研究会については、現代中東地域研究プロジェクトならびに南アジア地域研究プロジェクトと共催・協力した場合や、日本中東学会等の研究者コミュニティーを通じて公開した。

4．テーマ区分：現代文明と感染症

プロジェクトリーダー：超域フィールド科学研究部　島村一平

研究課題：コロナ禍における文化の免疫系としてのローカル文化の検証――東アジアを中心に

研究目的

新型コロナウイルス感染症がほぼ同時に地球全体に広がるという事態に及んで、社会に潜在していた差別意識が浮かび上がるとともに、私たちが現在の生活を送るうえで当たり前と思って来た慣行やルール、すなわち人類が近代に入って作り上げてきたあらゆる制度や規範の意義と存在理由が改めて問われている。一方、宗教学者の島田裕巳は、新型コロナウイルスの流行は宗教に致命傷を与えた、と主張する。というのも宗教は、信者が集まることによって成り立つものであり、その活動に大幅な制限が加えられるからである。しかし人類学が関心を持ってきたミクロかつローカルな文化実践に関しては、必ずしも人が集まるわけでもない。むしろコロナ禍に対して「文化の免疫系」とも呼べる様々な対抗策がなされていると考えられる。そこで本プロジェクトでは、コロナ禍に対して日本に近い東アジア地域（日本・中国・韓国・台湾・モンゴル・シベリア・ロシア）において、どのような「文化の免疫系」が発動している／していないか、その態様を比較考察することを目的とする。研究会を組織し、最終的には国際シンポジウムを行い、英語による書籍をまとめるものとする。また研究会では、東アジア地域との比較の対象として、コロナ禍の被害が甚大なヨーロッパやアフリカの地域の研究者をゲストスピーカーに呼ぶ予定としている。

実施状況

３月18日に本プロジェクトのキックオフ・ミーティングを行った。参加者は、館内３名（島村一平・韓　敏・諸　昭喜）館外４名（遠藤誠一（阪大医学部教授）松崎政代（阪大医学部教授）中本剛二（阪大医学部研究員）浜田明範（関西大社会学部准教授））の７名である。このミーティングでのプログラムは以下の通りである。

① 島村一平「吉田館長の企画意図」「本特別研究の趣旨説明」 ② 浜田明範（関西大学）「人類学は感染症をいかに扱ってきたか」③自己紹介。

研究成果の概要

このミーティングを通じて濱田氏の指摘から、慢性病などと異なり感染症に対してはバイオメディシンが圧倒的に強いということが共有された一方で、同じバイオメディシンをいかに使うか、という点においてはローカルな差異（国、地域、あるいは病院単位などでの違い）があるのではないかという議論が交わされた。そうした上で、この研究会では「コロナ禍にいかに対処してきたか」という「対処法」を「文化の免疫系」と名付け、いろいろな国や地域、あるいは現場での「ローカルな対処」の事例を集めていくことを目標に定めた。また今後の研究会では、研究者だけでなく、現場の医療者やコロナの患者などもゲストスピーカーとして呼んでいくことが話し合われた。

特別研究に関連した成果の公表実績

なし。

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。

2020年度は、「開発型プロジェクト」３件、「強化型プロジェクト」８件を実施し、３つのデータベースを新たに館内公開、２つのデータベースを館外公開した。また、国際ワークショップ１件を実施した。

構築したデータベース間の検索機能を強化した統合検索システムの開発を継続実施するとともに、博物館学芸員の認定科目の教育に資するプログラムの試行を行った。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
飯田　卓	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	開発型	2017年４月～2022年３月***
寺村裕史	中央・北アジアの物質文化に関する研究 ――民博収蔵の標本資料を中心に	開発型	2018年４月～2022年３月
小野林太郎	海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化 ――東南アジア資料を中心に	開発型	2019年４月～2022年３月
日髙真吾	時代玩具コレクションの公開プロジェクト	強化型	2019年４月～2021年３月
林　勲男	ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築 ――20世紀前半収集資料を中心として	強化型	2019年４月～2021年３月
日髙真吾	津波の記憶を刻む文化遺産――寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良	強化型	2020年４月～2022年３月
三島禎子	セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化	強化型	2020年４月～2022年３月
池谷和信	データベース「焼畑の世界――佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開	強化型	2020年４月～2022年３月
八木百合子	中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	強化型	2018年４月～2022年３月***
丹羽典生	民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築 ――オセアニア資料を中心に	強化型	2018年４月～2022年３月***
南 真木人	ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	強化型	2018年４月～2022年３月***

*2020年度実施分
**開発型は４年以内、強化型は２年以内
***新型コロナウイルス感染症の蔓延により、期間を延長

アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築

代表者：飯田　卓　2017年４月～2022年３月

実施状況

プロジェクトメンバーのあいだですでに活用されている暫定版データベース（日本語および英語、レコード数908,644）の精査をおこなった。また、この作業と並行するかたちでフランス語およびポルトガル語のデータを作成した。これらの作業は、2021年５月末までに完了する。完成すれば、レコード件数が倍加し、1,817,288レコードとなる見込みである。現在は関係者のあいだでの限定公開の状態だが、上記の期日以降にデータの登録と館内公開をとおしたチェックをおこない、９月末日には一般のインターネットユーザーがアクセスできるようになる。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響が大きかったため、暫定版データベースを用いておこなう予定だった国際ワークショップなどをおこなうことができなかった。本プロジェクトは、本来は2021年３月で終了する予定だったが、特例措置により2021年度４月以降に経費を繰り越して使用することが認められたため、新型コロナウイルス感染症が終息すれば、４言語を搭載した完成形のデータベースを駆使してワークショップをおこなうことが可能となる。

完成形のデータベースには、標本資料に関するローカルな情報を効果的に蓄積するための「記憶ファイリング領域」をあらたに設け、民博と現地研究者、さらには民博とソースコミュニティが円滑なコミュニケーションを図れるようにした。

成果

データベースの精査が年度内に完了しなかったことは反省点である。すみやかに精査を完了し、フランス語およ

びポルトガル語のデータも完成させたうえで、2021年９月末までに完全なオープンアクセスの状態でデータベースを使用できるようにする。

国際ワークショップなども、新型コロナウイルス感染症の影響のために開催できなかった。しかし、前年度までに連絡をとり合ったカメルーンおよびケニアの研究者とは電子メールをつうじて連絡をとり合っており、感染症が終息すればただちに計画を再開する準備が整っている。2020年度内に執行できなかった経費を2021年度に繰り越して執行することが認められたため、感染症の心配がなければ完成形のデータベースを使って国際ワークショップを開催し、現地の研究者やソースコミュニティとの協働をおこなえる予定である。

成果の公表実績

＜単著＞

鈴木英明

2020 『解放しない人びと、解放されない人びと――奴隷廃止の世界史』東京：東京大学出版会。［査読有］

川瀬　慈

2020 『エチオピア高原の吟遊詩人――うたに生きるものたち』東京：音楽之友社。

＜口頭発表＞

2020年８月26日 ‘Re-embedding Museum Objects into Local Communicative Networks.’ “ACHS Fifth Biennial Conference 2020”, University College London, London, United Kingdom, オンライン開催

2020年８月26日 (Iida, T., A. A. Nelson, T. Laely, K. Umeya, J. Grigo, R. Nakamura, K. Hanabuchi, and K. Keida) ‘Re-embedding Museum Objects into Local Communicative Networks.’ “ACHS Fifth Biennial Conference 2020”, University College London, United Kingdom, オンライン開催

2020年10月30日 ‘The Rise of Nosy Be: Conjunction between Indian Ocean Network and Imperial Expansion.’ “A Statistical Study of Indian Ocean Trade: Towards a Reappraisal of Regional Trade in Modern World History”, オンライン開催

2021年２月27日 ‘Making Museum Objects Revive in Human Societies: An Experience of an Image-Sharing Project between Africa and East Asia.’ Serial Academic Webinars of Minpaku Special Research Project “Cultural Transmission against Collective Amnesia: Bodies and Things in Heritage Practices”, National Museum of Ethnology, オンライン開催

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：20,651件

レコード数：20,651点×44項目（写真を除く）＝908,644件

（ただし一般公開ではなく、研究者を中心とした関係者による限定公開）

中央・北アジアの物質文化に関する研究――民博収蔵の標本資料を中心に

代表者：寺村裕史　2018年４月～2022年３月

実施状況

本プロジェクトでは、広大な地域をロシア、モンゴル、中央アジアの３地域に分け、民博の中央・北アジア展示場で公開されている文化資源情報を核として、民博が収蔵している当該地域の標本資料に関する情報を高度化し、その成果をもとに中央・北アジア文化資源情報データベースを構築することを目的としている。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、海外での調査・研究は実施することができなかったが、日本国内で可能な事柄を中心に、主に下記の研究を実施した。

1）各メンバーが実際にフィールドワークを行ってきた地域や民族に重点を置き、その上で、自然環境への適応と生業形態、日常生活と信仰、社会主義の経験など、展示場でキーワードとなっているいくつかの共通項目を、通文化的に概観することを目指して、データベースの基本項目を定めた。

2）日本語・英語の中央・北アジア文化資源の基本データベースの作成と、現地語情報の追加。

3）プロジェクト内でのみ閲覧可能であるが、フォーラム型のDBテンプレートを活用し、試験版の「中央・北アジア物質文化資料データベース」を構築。

（中央アジア）標本資料件数：1,198件、レコード数：18×1,198＝21,564レコード

（北アジア）　標本資料件数：2,960件、レコード数：18×2,960＝53,280レコード】

4）中央・北アジア文化資源情報の高度化のための、マルチメディア型コンテンツの制作を実施。
＊「タシケントの民家（1/10模型）」に関わるインタビュー映像編集・番組制作
＊「タシケントの民家（1/10模型）」の設計図（青焼き図面）のデジタル画像化
＊サマルカンドのバザールのパノラマ映像編集およびデータベースとの連携
5）ウズベキスタン資料を中心に、現地（ウズベキスタン共和国）の連携機関や研究協力者とオンラインで打合せを実施し、英語・ロシア語翻訳チェック等を研究協力者の協力を得ながら進めた。

成果

今年度は研究計画にもとづき、国内外の研究機関や現地社会と協働して中央・北アジアの物質文化に関する現地調査や共同研究、ワークショップ等を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響のため、そうした海外での調査・研究の実施ができなかった。そこで、日本国内でも実施可能な、基本項目の確定や現地語情報の追加、試験版のデータベース構築などを前倒しで実施することとした。その成果については、先の「4. 今年度の研究実施状況」の(3)の項目で述べたとおりである。

また、現地（ウズベキスタン共和国）の連携機関や研究協力者とオンラインで打合せを実施する過程において、これまでの現地調査に関連する事柄も含めて、共著という形で論文を発表し、以下のジャーナルに掲載された。

Alisher BEGMATOV, Amriddin BERDIMURODOV, Gennadiy BOGOMOLOV, MURAKAMI Tomomi, TERAMURA Hirofumi, UNO Takao and USAMI Tomoyuki

2020 New Discoveries from Kafir-kala: Coins, Sealings, and Wooden Cravings. *ACTA ASIATICA*（Bulletin of the Institute of Eastern Culture）(119): 1-20. 東京：一般財團法人　東方學會.

マルチメディア型コンテンツの制作においては、民博の展示場の標本資料と直結した「タシケントの民家（1/10模型）：H0105532」に関わる映像編集ならびに番組制作を実施し、約25分の『タシケントの民家再訪』という番組に仕上げた。最終的には、フォーラム型のデータベース上で閲覧可能（ID・PWによる制限の可能性あり）にするため、データベースへの組込み作業を次年度に実施する。

展示場にある民家模型が製作された、30年前の事情を知るインフォーマント（家主）から昨年度にインタビューし、30年後の現在の民家（と居住する人々）の姿を映像として記録したものを、今年度ひとつの番組として編集・制作できたことは、本プロジェクトにとっても現地社会との双方向の情報のやり取りを目的のひとつとするフォーラム型の実践例として大きな成果である。また、都市開発の波にさらされ、住人が立ち退きを要求され民家そのものも壊される可能性があることが、インタビューの結果判明し、30年前と現在の現地での暮らしの様子を伝える貴重な資料として、今回の映像および展示場の資料をフォーラム型で構築するデータベースで公開することで、資料情報の高度化にも資することができると考える。

さらに、サマルカンドのバザールのパノラマ映像編集およびデータベースとの連携については、パノラマ映像中から該当資料をクリックすることで、標本資料の情報を表示させるところまで完成しており、次年度に具体的にデータベース中に組込む作業を実施する予定である。

なお、モンゴル資料、中央アジア資料については、試験版ではあるがデータベース構築を進めることができた一方で、シベリア・極北の資料に関しては、データ整理途中であり、次年度にデータベースに組み込む作業が必要であるため、今後の検討課題である。

成果の公表実績

＜論文＞

ベグマトフ・アリシェル、寺村裕史、村上智見、宇野隆夫、宇佐美智之、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディ

2021 「ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡発掘調査2020年度までの成果――出土遺物に見るカフィル・カラの文化交流」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』（令和２年度考古学が語る古代オリエント）、東京：日本西アジア考古学会。

Begmatov, A., A. Berdimurodov, G. Bogomolov, T. Murakami, H. Teramura, T. Uno, and T. Usami

2020 New Discoveries from Kafir-kala: Coins, Sealings, and Wooden Cravings. *ACTA ASIATICA*（Bulletin of the Institute of Eastern Culture）119: 1-20.

＜波及効果がみられるもの、大学共同利用・高等教育に資するもの＞

● 総合研究大学院大学（博士課程）・文化資源研究特別演習・担当教員　寺村裕史、講義題目「文化資源のデジタル化とドキュメンテーション」

●岡山大学文学部　(2020年度　夏季集中)・担当教員　寺村裕史、講義題目「博物館情報・メディア論ａ」
●岡山大学文学部　(2020年度　夏季集中)・担当教員　寺村裕史、講義題目「博物館情報・メディア論ｂ」

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：4,158件
レコード数：74,844件

海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化――東南アジア資料を中心に

代表者：小野林太郎　2019年４月～2022年３月

実施状況

本プロジェクトの目的は、東南アジア島嶼部を中心とする海域アジアとその周辺海域を対象とし、本館が所有する人類の海洋適応に関わる物質文化のデータベース化、およびこのデータベースを用いた関係諸国の専門家との海洋文化研究の発展、ネットワーク連携の強化となる。この目的達成の下、今年度はまず (1) 海域アジアとその周辺島嶼域の海洋文化（漁撈・航海・船舶技術・装飾・儀礼）に関する本館の資料を総チェックし、日本語と英語による資料台帳の作成を進めた。その結果、東南アジア島嶼部ではインドネシア、マレーシア、フィリピンを中心とした約800点、オセアニアにおいてはミクロネシアとメラネシアで収集された本館の関連所蔵標本約800点の資料を台帳化できた。このほかに東南アジア大陸部における類似性の高い資料についても台帳化のバージョンアップを進めた。

一方、データベースを基にした専門家との研究の発展についてはコロナの影響もあり、対面式での検討は行うことができなかった。しかしメール等を使って、国内における海洋文化の専門家との情報交換は進めることができ、国立科学博物館、沖縄県立博物館・美術館、沖縄海洋文化館、南山大学人類学博物館に所属する国内研究者ネットワークの強化を行った。海外における専門家との検討においては、2021年２月27日にオンラインでの国際ワークショップを開催し、インドネシアの国立科学研究所（LIPI)、海洋博物館、バハリ博物館、マレーシアの国立博物館、アダット博物館、マレーシアプトラ大学、フィリピンのフィリピン国立博物館、フィリピン国立大学に所属する各国を代表する海洋文化研究の専門家と協議したほか、各機関と連携強化を進めた。またこのワークショップでは日本国内の専門家も招聘し、今年度に作成・発展させたデータベースに対する直接的な意見や関連情報を頂いた。

成果

今年度における研究成果には、まず (1) 国立民族学博物館が所有する、東南アジア島嶼部と新たにオセアニア（ミクロネシアとメラネシア）も加えた海洋文化関連の資料（漁具・船・儀礼・装飾関連）をほぼすべて英語化し、データベースのウェブ版デモのバージョンアップを行った点があげられる。さらに (2) このバージョンアップしたデータベースを軸にインドネシア、マレーシア、フィリピンの専門家を交え、資料の実見に基づく検討と海洋文化研究の推進も目的とした第２回目の国際ワークショップを2021年２月に開催し、データベースおよび研究の両方をさらに発展できた点があげられる。とくに(1)については予定通りに新たにオセアニアの関連資料（約800点）に関するデータベースを追加することができたほか、昨年度に台帳化した東南アジア関連の約800点についても新たな項目や情報追加を行うことができたため、今年度の研究目的は十分に達成できたと考えている。さらに(2)については、オンラインではあったが、２回目の国際ワークショップも継続して開催することができた。とくにこのワークショップでは、新たにロンドン大学の東洋アフリカ研究学院（SOAS）が展開中のフィリピン関連の博物館資料に関するデジタルアーカイブスプロジェクトに関する基調講演を、その担当者であるChristina Juan博士におこなって頂いた。またその後の議論を通して、こうした海外での共通性の高いプロジェクトとの今後の連携・協力を協議できたほか、計２回の国際ワークショップの成果公表について具体的な計画を進めることができたことは大きな成果であった。最終年度となる次年度は、このワークショップでの成果を踏まえた論文を国立民族学博物館研究報告の特集号として掲載する計画のほか、東南アジアやオセアニアの海洋文化に関する研究成果の論文・図書等による公表も視野に、より多角的な展開を計画している。また対象地域もオセアニア域のポリネシアも含めた全域に広げ、本館が所蔵する関連資料のデータベースの完成を含め、さらなる発展とプロジェクトの拡大を大いに期待できる。さらに捕捉として、本プロジェクトが終了する翌年度となる2022年度には、プロジェクトの成果を反映した企画展「海と人類（仮題)」開催の計画も進んでいることを追記しておきたい。

成果の公表実績

＜編著＞

Ono, R. and A. Pawlik（eds.）

2020 *Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation*. London: IntechOpen Publisher.［査読有］

＜分担執筆＞

小野林太郎

2020 「人類史１――発掘からよみとくオセアニア移住史と海洋適応」風間計博・梅崎昌裕編『オセアニアで学ぶ人類学』pp. 2-20，京都：昭和堂。

2020 「『動く』戦略からみたオセアニアにおけるヒトの人類史」大塚柳太郎編『動く・集まる』（生態人類学は挑む）pp. 95-121，京都：京都大学学術出版会。

＜論文＞

Fuentes, R., R. Ono, J. Carlos, C. Kerfante, Sriwigati, M. Tatiana, A. Nasrullah, H.O. Sofian, and A. Pawlik

2020 Stuck within Notches: Direct Evidence of Plant Processing during the Last Glacial Maximum in North Sulawesi. *Journal of Archaeological Science: Report*.（doi.org/10.1016/j.jasrep. 2020.102207）

Ono, R., H.O. Sofian, A.A. Oktaviana, Sriwigati, and N. Aziz,

2020 Island Migration, Resource Use, and Lithic Technology by Anatomically Modern Humans in Wallacea. In Ono, R. and A. Pawlik（eds.）*Pleistocene Archaeology-Migration, Technology, and Adaptation*, pp. 85-111. London: IntechOpen Publisher.［査読有］

Nakanishi, Y., R. Ono, C. Katagiri, N. Sakagami, and T. Tetsu

2020 Pursuing Sustainable Preservation and Valorisation of Underwater Cultural Heritage: Okinawa's Pilot Project for an Underwater Site Museum. In J.A. Rodrigues and A. Traviglia（eds.）*IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November–2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle, Western Australia*, pp. 292-300. Oxford: Oxbow Books.［査読有］

Katagiri, C., R. Ono, Y. Nakanishi, and H. Miyagi

2020 Research on the Wreck Sites, Sea Routes and the Ships in the Ryukyu Archipelago. In J.A. Rodrigues and A. Traviglia（eds.）*IKUWA6: Shared Heritage: Proceedings of the Sixth International Congress for Underwater Archaeology: 28 November–2 December 2016, Western Australian Maritime Museum Fremantle*, pp. 19-29. Oxford: Oxbow Books.［査読有］

Ono, R., R. Fuentes, A. Noel, O. Sofian, Sriwigati, N. Aziz, and A. Pawlik

2021 Development of Bone and Lithic Technologies by Anatomically Modern Humans during the Late Pleistocene to Holocene in Sulawesi and Wallacea. *Quaternary International*.［査読有］

Ono, R.

2021 Technological and Social Interactions between Hunter-gatherers and New Migrants in the Prehistoric（Neolithic）Islands of Southeast Asia and Oceania. In K. Ikeya and Y. Nishiaki（eds.）*Hunter-gatherers in Asia: From Prehistory to the Present*（Senri Ethnological Studies 106）: 127-148. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

＜監修＞

小野林太郎

2021 テルモ・ピエバニ、バレリー・ゼトゥン著、エラリー・ジャンクリストフ、篠原範子、竹花秀春訳『人類史マップ――サピエンス誕生・危機・拡散の全記録』東京：日経ナショナルジオグラフィック社。

＜口頭発表＞

2021年２月27日 ‘Report of Project Update and Plan 2020-2021.’ International Online Meeting and Workshop “Fishing and Material Culture in Maritime Asia”, National Museum of Ethnology, Osaka, オンライン開催

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：1,600件

レコード数：32,000件

時代玩具コレクションの公開プロジェクト

代表者：日髙真吾　2019年４月～2021年３月

実施状況

2020年のプロジェクトでは、初年度の成果を踏まえ、1. 形態では26種類（人形玩具、戦争玩具、乗物玩具、動力玩具、マスコミ玩具、紙製玩具、めんこ、カルタ、双六、着せ替え、ぬり絵、ビー玉・おはじき玩具、光学玩具、水遊び玩具、お面の玩具、ボード（盤上）玩具、ものづくり玩具、ごっこ玩具、スポーツ玩具、お土産玩具、教育玩具、駄菓子屋玩具、楽器玩具、玩具関連資料Ⅰ（子ども服・装身具）、玩具関連資料Ⅱ（文献・写真等）、その他）、2. 主な使用者３種類（男子、女子、男女共用）、3. 遊び方５種類（対戦、ごっこ遊び、鑑賞、一人遊び、ものづくり遊び）、4. 主に遊ばれる季節５種類（正月、ひな祭り、端午の節句、クリスマス通年）、5. 製造年代４種類（明治・大正・昭和・平成）、6. 主要素材９種類（植物由来、皮革由来、金属由来、土由来、貝由来、石由来、ガラス由来、人工素材由来、布由来）、7. サイズ、8. 備考という観点からの分類作業を進め、完了した。また、ここに記載される事項はすべて英訳作業を進め、データベースの構成素材を完成させた。その上ですでにフォーラム型情報ミュージアムで公開されている「日本の文化展示関連情報データベース」のプラットフォームを採用してデータベースを構築した。

成果

本データベースで最大の課題となっているのが著作権、版権を伴う玩具の写真の扱いである。これらの写真データは、現在、初年度の情報収集において、2020年10月24日に文化庁著作権課が示した「デジタル化・ネットワーク化の進展に対応した柔軟な権利制限規定に関する基本的な考え方」（著作権法第30条の４、第47条の４及び第47条の５関係）に着目し、なかでも、「その行為の目的上必要と認められる限度において、当該行為に付随して、著作物を軽微な範囲で提供する行為を行うことができる」に依拠した画像提供をおこなうことを考え、そして、「軽微な範囲」として示されている点については、国立民族学博物館で検討されている「インターネットによる学術情報公開のためのガイドライン」で示される「公開方法」のなかの、「人間文化研究機構資料特別利用規程に定める「特別利用」（熟覧、資料の複製等）に抵触しないようにするため、画像（静止画）データのサイズは長辺を1,500ピクセル（例えば1,500×1,200ピクセルの場合、180万画素となる）までに制限する。」に準じて掲載することとした。

写真の画像データを見本用画像であるサムネイル（180×180ピクセル）での掲載を考えている。ただし、この点については重要なことであるので、引き続き、情報課と連携しながら、サムネイル画像の取扱い基準を定めていきたい。また、本データベースでは、ID とパスワードでログインし、情報が追記できる仕組みと、新規情報が追記された際の履歴ごとのページを閲覧できるメモ機能の開発をおこなった。

成果の公表実績

＜論文＞

日髙真吾

2020 「フォーラム型ミュージアム「時代玩具コレクションデータベース」について」近畿民具学会編『近畿民具』42：33-43。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：13,828件

レコード数：46,804件

ミクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築――20世紀前半収集資料を中心として

代表者：林　勲男　2019年４月～2021年３月

実施状況

プロジェクト最終年度に当たる本年度は、以下の作業を実施した。

1）2020年２月に標本資料の熟覧調査をした国際研究協力者から送られてきた追加情報の精査をおこなった。

2）染木　煦著『ミクロネシアの風土と民具』の記述内容および挿絵と、染木収集による民博収蔵資料とを照合し、データの精査をおこなった。

3）東大情報カードと『内外土俗品圖集』の記載内容と民博収蔵資料とを照合し、データの精査をおこなった。

4）松岡静雄著『ミクロネシア民族誌』の記載内容と民博収蔵標本資料とを照合し、関連情報を整理した。
5）「杉浦健一アーカイブ」所収のスケッチと民博所蔵標本資料とを照合する作業をおこなった。
6）染木　煦ご遺族所有の絵はがきおよび写真を民博にて撮影し、染木によって付されたメモを整理した。
7）データベースに記載する情報の英訳をおこなった。
8）フォーラム型情報ミュージアムの開発型プロジェクト「海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化――東南アジア資料を中心に」（代表：小野林太郎）と、データベースでの相互参照等の協力・連携の可能性について検討した。

成果

今年度は、対象としているミクロネシア地域の標本資料に関連する文献・画像資料の調査を実施し、該当する記述および画像等と標本資料の紐づけ作業と、データの入力作業を実施した。

当初は、マーシャル諸島共和国とミクロネシア連邦での共同研究員による現地調査と、両国から資料熟覧のための民博への招へいを計画していたが、新型コロナ感染症拡大のため、実施がかなわなかった。また、インターネットを用いての現地との打ち合わせや、標本資料に関する情報収集についても検討したが、現地のネット環境や必要機材の不備のために諦めざるを得なかった。そのため民博が所蔵する文献やアーカイブス資料を中心に、関連情報の調査とそれに基づいたデータの摘出と整理を実施した。

データベースの整備実績

資料（標本資料、映像・音響資料）件数：1,917件

レコード数：36,301件

現時点で収集・整理を完了したデータについては、システム開発班に引き渡し、データベースの検索機能について同班と協議中である。2021年７月中に館内公開、８月末までに一般公開の予定である。

津波の記憶を刻む文化遺産――寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良

代表者：日髙真吾　2020年４月～2022年３月

実施状況

研究の初年度となる2020年度は現在の入力データを精査し、記入ミス等の修正をおこなった。今年度は全件をおこなう予定であったが、想定以上に記入ミスや課題が散見したことで全体の３分２程度の精査にとどまった。また、国土地理院、東北大学災害科学国際研究所、国立研究開発法人海洋研究開発機構と研究会を開催し、本データベースの改良の方向性、災害の記憶に関するデータベースとの連携について協議する予定であったが、新型コロナウイルスの影響もあり、個別に意見交換をおこなうにととどめた。一方、本データベースの改修の基礎となる管理機能の利便性の向上については予定通り、改修を進めることができた。なお、次の展開として、申請者が主催する基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表彰システムの構築」、また分担者となっている特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」とは研究会等で意見交換がおこなえ、来年度は特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」の研究会で発表することとした。

成果

本年度のプロジェクトの最大の目標は、フォーラム型情報ミュージアムに適合したデータベースに改修することであった。このなかで、管理画面から寺社・石碑を登録する際に、住所の入力を支援する機能として、①市区町村をリストから選択することで都道府県から市区町村までの住所を登録出来るようにする、②登録した写真画像ファイルに含まれているGPS情報をもとに、国土地理院のジオコーディングサービスを利用して住所を取得・登録するシステムを整えることができた。

成果の公表実績

＜論文＞

寺村裕史

2021　「津波の記憶を刻む文化遺産――寺社・石碑データベース」日髙真吾編『特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」』pp. 94-101，大阪：国立民族学博物館。

＜波及効果がみられるもの、大学共同利用・高等教育に資するもの＞
特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」において、改良版をスタンドアローンで公開。

データベースの整備実績
資料（標本資料、映像・音響資料）件数：448件
レコード数：9,856件

セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化

代表者：三島禎子　2020年４月～2022年３月

実施状況
㈠2017年に撮影したセネガルにおける文化週間の映像記録（20ケ村、５日分）を精査し、演目、場所とシーン別におよそ240件の画像データに分割した。とくにビデオテークや映像民族誌に挿入することができなかった音声情報が豊富な歌や演説をピックアップすることに留意したほか、民族文化を紹介する演目ひとつひとつをカットしないで整え、さらに演目には直接関係がないものの民族文化を表象する踊りやパフォーマンスなどをもれなく拾い上げた。
㈡①の各データについて必要な基本情報を入れたデータベースをフランス語で作成した。
㈢②のデータベースのプラットフォームについて本館の担当者と、携帯端末などで閲覧が可能な適切なデータ量に加工すること、音声コメントのやりとりの可能性などについて話し合った。さらに240件のデータをプラットフォームに落とし込む作業を依頼し、現在進行中である。
㈣本計画の背景と構想について『民博通信 Online』に執筆した。
㈤本計画の構想について日本アフリカ学会と共同研究会において発表した。

成果
本プロジェクト全体の第一段階は、映像の内容を精査したうえで適切なかたちで分割することである。今年度はおよそ240件の映像データを作成した。また第二段階では分割した映像データそれぞれについて情報の項目を設定し、フランス語で基本情報を挿入する作業を終了した。本館の担当者にプラットフォームの相談をおこない、データ量を加工したうえでデータベースを落とし込む作業を依頼し、現在進行中である。第三段階はデータベースの日英版を整え、データベースの活用方法と情報追加について対象社会の人びととワークショップ等を行うことを来年度の目的としているが、そのための準備作業は順調に進んでいる。
また本プロジェクトの構想については論文や口頭発表などで公開した。

成果の公表実績
＜その他＞
三島禎子
2021 「ソニンケによる『文化週間』の映像データベースの構築」『民博通信 Online』3：8-9。
＜口頭発表＞
2020年５月23日～５月24日 「ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局――『文化週間』の映像取材から見えてきたもの」日本アフリカ学会第57回学術大会、オンライン開催

データベースの整備実績
資料（標本資料、映像・音響資料）件数：約240件
レコード数：240件×10項目→およそ2,400件

データベース「焼畑の世界――佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開

代表者：池谷和信　2020年４月～2022年３月

実施状況
- データベースの国際化
今年度は、現在、民博で公開されているデータベース「焼畑の世界――佐々木高明のまなざし」（和文）の日本

語部分の英訳をして英語版を作成した。今後、個々の内容を精査して一般公開を進めていく予定である。

・学術研究の展開

以下、①研究報告、②論文刊行、③展示会の開催の３点から紹介する。

① カリフォルニア大学・バークレー校・東アジアセンター主催の国際シンポジウムにて熊本県五木村の焼畑の変遷に関する研究報告を行った。また、佐々木高明の中心的な調査地である五木村にて５回にわたる研究会（テーマ「焼畑と現代文明」、対象をモンスーンアジア地域に拡張）を開催して、各回において多様な分野の研究者による報告と同時に地域の人々との議論を進めてきた。

② 食と農をめぐる文明論について、池谷編集の本『食の文明論 ホモ・サピエンス史から探る』のなかで論議した。

③ 2020年10月から12月にかけて佐々木高明の調査をした五木村にて特別展示『佐々木高明の見た焼畑――五木村から世界へ』を実施した。展示の開催中、展示場でのギャラリートークを行って、研究者や地域の人々とのあいだで意見交換を行った。

以上のように本研究プロジェクトでは、佐々木高明のみた焼畑の世界を日本列島のみならずモンスーンアジア地域に拡張して、焼畑の民族学・文化地理学を中心とした学術研究が展開された。

・プロジェクトの内容

これまで、日本列島における焼畑については、中世史や近世史、日本民俗学、人文地理学、民族学、農学などを中心にして戦前から数多くの研究がみられるが、その大部分は日本語の論文であり英語によって公開された論文がほとんどみられない。同時に、日本の焼畑の実態を時代や地域を明確にして分野を超えて展望するような研究が生まれていない。このため、現在でも焼畑が行われている湿潤熱帯を中心とした世界の焼畑研究に対して日本列島の事例からの貢献がほとんどないのが現状である。

しかしながら、世界的な視点からみると日本の焼畑は寒冷帯（「北の焼畑」）と熱帯・亜熱帯（「南の焼畑」）の焼畑で栽培されてきた多様な作物が含まれているなど、その多様性の起源や伝播普及の過程は十分に明らかになっていない。そして、現在の日本において「焼畑サミット」が開催されたり焼畑の再生がみられるなど、地球環境のなかでの持続可能な資源利用が求められるなかで、焼畑は自然にやさしい循環的な農耕であることが注目されている。

本プロジェクトでは、九州地方を中心として焼畑地の選択方法、焼畑の技術、土地利用、焼畑で作られる栽培植物の種類など、近現代における焼畑文化の変遷を総合的に把握することがねらいである。このためには、データベース「焼畑の世界――佐々木高明のまなざし」の写真類の利用を中心にして地元の人々への研究成果の還元を考慮しながら新たな焼畑像を構築することがねらいである。同時に、アジア（とくに東南アジアや南アジア）の焼畑を知ることから日本のそれの地域的特性を把握することも目的とする。

・期待される成果

以下の３点が挙げられる。これまで国内で国際発信の弱かった焼畑農耕の民族学的研究（例：現在まで刊行された約100冊のSenri Ethnological Studiesのなかで、焼畑論集が刊行されていない）を①英語圏中心にして世界に発信することができる。同時に、日本列島内の山の暮らしの詳細を知ることから、平地とは異なる②新たな日本文化論を展開することができる。さらに、近年、循環型農耕として自然にやさしい焼畑が、とくに国内において広く注目されている。これらの焼畑に関する知恵（在来知）は、③温帯山地や熱帯低地の森林地帯を中心にして全地球の持続的資源利用のあり方を考える際にヒントを与え、日本の人文学の社会的な価値を高めることになるであろう。

成果

以下の３点にまとめられる。

1）研究：国際シンポジウムのなかで焼畑の研究報告をしたことによって、世界的にみても焼畑が衰退・消滅している傾向にあることがわかった。同時に、日本の焼畑文化は、世界のなかでも栽培技術ほかかなりユニークなものである可能性が高いという印象を受けた。例えば、日本の焼畑の形成・展開・衰退についてのモデルを構築することが世界の研究に貢献することになるであろう。

2）展示とネットワーク構築：かつて焼畑が基本の生業であった村にて展示の開催中に国内ワークショップを開催したことで、新たなネットワークが形成された。研究者、行政、学校、地域住民である。例えば、学校教育におけ

る日本の歴史の時代区分が村の歴史にあわないという実態、焼畑で栽培された在来品種の小規模な商品化など焼畑を見直す動きがみられた。現に、2021年３月下旬に消滅していた村の焼畑が復活する動きとして結実している。

3）データベース：現在、公開されているデータベース「焼畑の世界――佐々木高明のまなざし」の写真キャプションほかに展示を観覧していた住民から間違いが指摘された。また、焼畑に関する物質文化の一部を地元の博物館が収集することをサポートした。それにともない、ものづくりの技術や知識を基礎資料として整備することができた。

成果の公表実績

＜編著＞

池谷和信編

2021 『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム　人間の食）東京：農山漁村文化協会。

＜分担執筆＞

池谷和信

2021 「地球・食・文明」池谷和信編『食の文明論――ホモ・サピエンス史から探る』（フォーラム　人間の食）pp. 9–31，東京：農山漁村文化協会。

＜論文＞

Yatsuka, H. and K. Ikeya

2020 Farming Practices among African Hunter-Gatherers: Diversifying without Loss of the Past. In G. Hyden, K. Sugimura and T. Tsuruta（eds.）*Rethinking African Agriculture: How Non-Agrarian Factors Shape Peasant Livelihoods,* pp. 49–63. London and New York: Routledge.

＜その他＞

池谷和信

2020 「食と農の未来――佐々木高明の見た最後の焼畑」特集「拡がる写真データベース」『月刊みんぱく』44（7）：6–7。

2021 「五木村での『佐々木高明の見た焼畑』展」『民博通信 Online』3：4–5。

Ikeya, K.

2021 Slash-and-Burn Cultivation Viewed by SASAKI Komei: From Itsuki Mura to the World. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 51: 14.

＜口頭発表＞

池谷和信

2021年3月19日 ‘Slash-and-burn Agriculture and Millet Cultivation in Postwar Japan.’ CJS-JSPS Symposium-Agroecology, Sustainable Food Production and Satoyama: Contributions of Japanese Case Studies to the Discussion of Traditional Ecological Knowledge and Environmental Conservation, Institute of East Asian Studies, University of California, オンライン開催

2020年度までに終了したプロジェクトによる成果の公表実績

＜編著＞

Nobayashi, A. and S. Simon（eds.）

2020 *Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific*（Senri Ethnological Studies 103）. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

Ito, A., C. Lomahaftewa, and C. Colwell（eds.）

2021 *Collections Review on 38 Silverworks Labeled “Hopi” in the Denver Museum of Nature & Science: Reconnecting Source Communities with Museum Collections 5*（Info-Forum Museum Resources 5）. Osaka: National Museum of Ethnology.［査読有］

＜論文＞

Clifford, J., A. Ito, R. Saito, K. Yoshida, I. Hayashi, and T. Iida

2020 International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”. *Bulletin of National Museum of Ethnology* 45（1）: 115–176.［査読有］

丹羽典生

2021 「探検家朝枝利男の後半生――アメリカ日系人収容所での生活から博物館での活躍まで」『経済志林』88

(3)：21-42。

＜その他＞

伊藤敦規

第10回（2020年度）地域研究コンソーシアム賞（JCAS賞）授賞［研究企画賞］「ソースコミュニティと博物館資料との「再会」プロジェクト」〈http://www.jcas.jp/jcas2020.html〉

＜波及効果がみられるもの、大学共同利用・高等教育に資するもの＞

八木百合子

神戸市外国語大学・中南米文化史（集中講義）

「中南米の文化資料に関するデータベース」を活用した「中南米の人びとの暮らし――生活を形づくるモノと世界観（衣装／織物／現代の民衆芸術）」についての講義

横山廣子

非常勤講義（オンライン）での展示場とデータベース、ならびにデータベース作成プロセス等の紹介

講義

1）東京女子大学現代教養学部「周縁世界とグローバル化Ⅱ」
2020年度後期　大学３年、４年生対象講義

2）神奈川大学国際日本学部「文化人類学概論」
2020年度後期　大学１年生対象（新設学部ゆえ１年生のみ存在）講義

3）塚田誠之（横山プロジェクト）
東京女子大学現代教養学部 「民族と世界／エスニシティ論」
2020年度後期　大学３年、４年生対象講義

＜波及効果がみられるもの、社会貢献、ソースコミュニティに資するもの＞

台湾原住民電子台

『ivucung 誰迷了路』（2019.12放映）第55屆電視金鐘獎（第55回テレビ番組大賞）人文紀實節目獎（人文ドキュメンタリー賞）

許春美

2020 『tjinnun nuwa paiwan（排灣族的織布）』屏東：許春美。

共同研究

2020年度の応募・採択状況

カテゴリー１：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広いテーマを対象とし、挑戦的で、新領域開拓につながる研究

カテゴリー２：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分			2020年度			
研究代表者		カテゴリー区分	申請	採択	継続	合計
一般	館内	1	6	4	4	9
		2	0	0	1	
	客員	1	0	0	0	0
		2	0	0	0	
	館外	1	6	3	10	14
		2	0	0	1	
若手		1	3	1	3	4
		2	0	0	0	
計			15	8	19	27

共同研究課題一覧

○印は館外研究者による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	区分	研究期間
博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から	園田直子	2	2017-2022
○人類学 / 民俗学の学知と国民国家の関係 ――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生勝美	1	2017-2022
○文化人類学を自然化する	中川　敏	1	2017-2021
○ネオリベラリズムのモラリティ	田沼幸子	1	2017-2022
○オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間計博	1	2018-2022
○伝統染織品の生産と消費 ――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって	中谷文美	1	2018-2022
○心配と係り合いについての人類学的探求	西　真如	1	2018-2022
○統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する	佐川　徹	1	2018-2022
○グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス	山　泰幸	1	2018-2022
○カネとチカラの民族誌：公共性の生態学にむけて	内藤直樹	1	2018-2022
●拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田瑞穂	1	2018-2022
○沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	大西秀之	2	2019-2022
○グローバル化時代における「観光化／脱−観光化」のダイナミズムに関する研究	東　賢太朗	1	2019-2022
食生活から考える持続可能な社会――「主食」の形成と展開	野林厚志	1	2019-2022
社会・文化人類学における中国研究の理論的定位 ――12のテーマをめぐる再検討と再評価	河合洋尚	1	2019-2022
人類史における移動概念の再構築――「自由」と「不自由」の相克に注目して	鈴木英明	1	2019-2022
島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	小野林太郎	1	2019-2022
●感性と制度のつながり――芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	緒方しらべ	1	2019-2022
●モビリティと物質性の人類学	古川不可知	1	2019-2022
○海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み	片岡　樹	1	2020-2023
○「描かれた動物」の人類学――動物×ヒトの生成変化に着目して	山口未花子	1	2020-2023
○月経をめぐる国際開発の影響の比較研究――ジェンダーおよび医療化の視点から	新本万里子	1	2020-2023
環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究 ――人類史的視点から	岸上伸啓	1	2020-2023
不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う ――モノ、制度、身体のからみあい	森　明子	1	2020-2023
戦争・帝国主義と食の変容：食と国家の関係を再考する	宇田川妙子	1	2020-2023
日本列島の鵜飼文化に関するＴ字型学際共同アプローチ ――野生性と権力をめぐって	卯田宗平	1	2020-2023
●先住民と情報化する社会の関わり	近藤祉秋	1	2020-2023

「博物館における持続可能な資料管理および環境整備――保存科学の視点から」

本館における保存科学研究では、博物館機能をもつ研究所という特色を生かし、基礎的な研究と、それを発展させた実践的な研究に取り組んでいる。その内容は、モノ資料を主たる対象に、生物生息調査や温度・湿度モニタリングなどの保存環境データを効率的に分析するプログラムの開発、データの分析結果をもとにした展示・収蔵環境の整備とその検証、化学薬剤を用いない殺虫処理法の開発および条件改良、収蔵スペースの狭隘化対策と収蔵改善を目的とした収蔵庫の再編成、被災文化財への応急措置を含めた保存修復法の開発など、多岐にわたる。

本研究では、これまでの研究をさらに深化させ、環境への配慮が一層求められる21世紀の社会状況に適合する持続可能な資料管理および保存環境の基盤整備を目的とする。ここでは、研究対象をモノ資料だけでなく、映像資料にひろげるとともに、大規模な博物館等の施設のみならず、設備、人手、経費が限られる小規模な博物館等の施設や個人所蔵者でも応用・実践が可能な保存の条件や指針を提示するという新たな軸を設定して研究を進める。その上で、保存科学の基礎的・実践的研究にくわえて、21世紀の社会状況のもとでの資料の保存と活用について、その

意義を整理し再考する。

研究代表者　園田直子
班員（館内）大森康宏、森田恒之、河村友佳子、末森　薫、橋本沙知、日髙真吾、平井京之介、吉田憲司
（館外）大関勝久、木川りか、佐藤嘉則、髙畑　誠、鳥越俊行、馬場幸栄、山口孝子、和田　浩、和髙智美

研究会
2020年８月７日（金） 13：30～17：00（ウェブ会議）
テーマ１：各館における新型コロナウィルス感染症対策
（文化財保存修復学会と共同開催。編集映像は学会 HP で2020年10月12日から12月12日まで公開した）
日髙真吾（国立民族学博物館）「国立民族学博物館の展示場における新型コロナウィルス感染症対策」
和田　浩（東京国立博物館）「新型コロナウィルス感染症対策――東京国立博物館の事例」
鳥越俊行（奈良国立博物館）「新型コロナウィルス感染症拡大予防対策に関する奈良国立博物館の取り組み」
木川りか・渡辺祐基（九州国立博物館）「九州国立博物館におけるコロナ感染症対策の概要」
山口孝子（東京都写真美術館）「新型コロナ感染拡大防止対策」
馬場幸栄（一橋大学）「一橋大学社会科学古典資料センターの新型コロナウィルス感染症拡大防止対策――貴重書閲覧室の場合」
テーマ２：共同研究の成果報告書について
2020年12月24日（木） 13：30～17：00（ウェブ会議）
テーマ：生物被害対策
河村友佳子（国立民族学博物館）、佐藤嘉則（東京文化財研究所）、小峰幸夫（東京文化財研究所）「太陽熱を用いた高温処理の条件確立に向けて――アフリカヒラタキクイムシを用いた高温繰り返し実験について」
森田恒之（国立民族学博物館）「戦後の日本の博物館における虫害対策」
2021年３月12日（金） 13：30～16：00（ウェブ会議）
テーマ１：小規模施設における資料管理
平井京之介（国立民族学博物館）「手作り資料館の持続不可能な資料管理――水俣の事例から」
馬場幸栄（一橋大学）「非博物館施設および個人宅における資料管理・環境整備の課題と対策――緯度観測所関連資料の事例から」
テーマ２：映像音響資料
園田直子（国立民族学博物館）
「A-D Strips を用いたフィルム調査――国立民族学博物館の事例からの考察」

成果
2020年度の研究会は、すべてウェブ開催とした。第１回研究会（8月7日）は「各館における新型コロナウィルス感染症対策」をテーマに、本館をはじめ、奈良国立博物館、九州国立博物館、東京国立博物館、東京都写真美術館、一橋大学社会科学古典資料センターの事例報告で構成した。この研究会は、本館と学術提携を結んでいる文化財保存修復学会との共同開催であり、編集映像は学会 HP で公開した（2020年10月12日～12月12日）。第２回研究会（12月24日）では、東京文化財研究所と本館が進めている高温殺虫処理実験の結果をもとに、実践で使用するための条件精査を行うことを確認した。また、戦後日本の博物館における虫害対策について議論を進めた。第３回研究会（３月12日）では、小規模な施設が抱える問題をふたつの事例をもとに共有した。また、映画フィルムのビネガーシンドロームを取り上げ、本館で15年あまり進めてきた調査結果について考察した。なお、今年度は九州国立博物館での館外研究会を計画していたが、コロナ禍で実施できなかったため、2021年度に繰り越すことが承認された。

「人類学 / 民俗学の学知と国民国家の関係――20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス」
日本の人類学は、欧米の理論を導入して移植して学知として定着していった一方で、植民地経営への応用、ナショナリズムの勃興と民族意識の高揚、戦闘地域での情報活動など、人類学を取り巻く国内外の政治的状況で展開、発展してきたのは、欧米と同じである。そこで、単に学術活動や理論の受容を祖述するだけではなく、人類学 / 民俗学を取り巻く社会的状況を踏まえ、隣接諸領域を視野に含めた歴史の再構築をすることで、人類学の果たした社会的役割を明確にすることが、この研究の目的である。具体的にこの研究では、1920年代から40年代にかけての戦間期における欧米と日本の人類学 / 民俗学を比較対照することで、日本への影響のルーツを探り、学知として成立す

る人類学 / 民俗学を歴史のコンテキストで理解する基礎研究を目指したい。

研究代表者　中生勝美
班員（館内）飯田　卓、宇田川妙子
（館外）飯嶋秀治、池田光穂、臼杵　陽、江川純一、及川祥平、加賀谷真梨、栗本英世、佐藤若菜、角南聡一郎、泉水英計、田中雅一、Damien KUNIK

研究会
2020年12月19日（土） 10：00〜17：00（ウェブ会議）
中生勝美（桜美林大学）「今後の研究成果出版計画」
出席者：研究状況報告

成果
今年度は、７月に東京の国立映画アーカイブに集合し、戦前に制作された鳥居龍蔵を題材にした映画を鑑賞した後、研究会を開こうとしたが、緊急事態宣言により開催を一旦秋に延ばしたが、やはり実施できず、やむなく中止した。最終的に12月にオンラインで研究の進捗状況を個別に報告する研究会しか実施できなかった。個別の研究成果としては、単著として池田光穂『暴力の政治民族誌――現代マヤ先住民の経験と記憶』が発表され、論文として中生勝美「戦後日本の人類学史（1）」、池田光穂「軍事的インテリジェンスの人類学の射程と倫理」佐藤若菜「1978年以降の日中民間交流に関する人類学的考察――ミャオ族の民族衣装に着目して」、角南聡一郎「黒潮文化圏と新『海上の道』」、「坪井正五郎と土俗学」など、関連したテーマでの論文、分担執筆などが出版された。

「文化人類学を自然化する」

文化人類学を自然科学の一部とすることを最終目標として、そのための方法を模索する。自然科学を人類学の研究対象にするのではない。人類学を他の自然科学（とりわけ心理学と生物学）と横にならぶ自然科学の一つの部門として成立させるのである。具体的には、人類学独自のことば遣いを自然科学のある部門の言葉へと翻訳する可能性を考えることから始める。すなわち還元がその方法論である。還元先の部門としては、とりあえず、心理学（認知心理学、社会心理学）そして生物学（進化生物学、疫学）を考えている。また積極的に自然化を推し進めている一部の哲学にも範を求めたい。消極的には「人類学の解消」に繋る動きととらえることもできようが、わたしは、より積極的に、文化人類学の自然化は自然科学というものを変化・発展させる契機になり得ると信じている。

研究代表者　中川　敏
班員（館内）飯田　卓、松尾瑞穂
（館外）唐沢かおり、高田　明、戸田山和久、中川　理、中空　萌、中村　潔、浜本　満、山田一憲

研究会
2020年８月１日（土） 13：00〜17：00（ウェブ会議）
中空　萌（広島大学）「アクターネットワーク論と自然主義？（2）現代インドの自然物への法人格付与を事例に」
2021年度日本文化人類学会での分科会（成果発表）登録についての打合せ

成果
今年度はパンデミックのために研究会はオンラインで開催した。最初の一回のみは対面型同様になるべく多くの人が集まるよう日程調整し、長時間の研究会を開いた。その後はオンラインの特徴を活用して、短い時間の研究会を頻繁に開催することとした。（交通費を使用しないので、報告をしなかった。）全部で９回の１時間から２時間の研究会を開催した。2021年３月21日のオンライン・カンファレンスを計画し、それに向けて濃密な討議を重ねることができた。その討議の中で、研究会の目指す自然主義の人類学についてのイメージを固めることができた。一つは通時的な方向性で、理論的な性格を側面が強調される。もう一つは共時的な方向性で、民族誌を書くための方法が追求される。前者は閾問題（ヒトへの進化）の中に人類学的問題を探し、後者のテーマはアクターネットワークセオリーと自然主義の人類学の交差する地点を探ることである。

「ネオリベラリズムのモラリティ」

本研究の目的は、ネオリベラリズムの現れ方の多様性、特にモラリティの意味付けと実践を現地の文脈や当事者の視点から解き明かすことによって、今日の世界における生を民族誌的現実に即して知らしめ、具体的な課題を明らかにしつつ、ありうべき社会の可能性を探るための議論に貢献することにある。

ネオリベラリズムは、その言葉を知ろうと知るまいと、関心があろうとなかろうと、私たちの生活を覆いつくしつつある。しかしその現れ方は、場や受け取る側の歴史や政治経済的状況、及び文化によって様々である。本共同研究では、世界各地で長期フィールドワークを行ってきた30～40代の研究者たちが、それぞれの地域と対象の人々の詳細な事例に関する情報と知見を交換し、ネオリベラリズムの世界におけるモラリティを具体的な事例を通じて理解することを試みる。

研究代表者　田沼幸子

班員（館内）相島葉月、八木百合子

（館外）伊東未来、猪瀬浩平、酒井朋子、佐川　徹、佐久間寛、佐々木 祐、中川　理、深澤晴奈、宮本万里

研究会

2020年８月４日（火） 10：30～15：30（ウェブ会議）

Discussion on Theme “Ethnographies of Neoliberalism: Hope or Pessimism?”

Sachiko Tanuma（Tokyo Metropolitan University), Haruna Fukasawa（Keio University),

Tomoko Sakai（Kobe University), Mari Miyamoto（Keio University),

Tasuku Sasaki（Kobe University）

2020年11月21日（土） 14：00～18：30（国立民族学博物館　大演習室　ウェブ会議併用）

田沼幸子（東京都立大学）「ネオリベラリズムを生きる人類学者として、何ができるのだろうか」

深澤晴奈（東京大学）「移民受け入れ社会におけるモラリティの変容――現代スペインのケース」

宮本万里（慶応義塾大学）「宗教領域の一元化と起業家的仏教僧の登場――ブータンの事例から」

酒井朋子（神戸大学）「EU 離脱をめぐる分断と家族の配慮――北アイルランドの事例から」

佐々木祐（神戸大学）「トランジットの毎日を生きること――メキシコにおける中米移民」

松田素二　コメント

2021年２月９日（火） 10：00～16：00（ウェブ会議）

Discussion on Theme “Ethnographies of Neoliberalism: Hope or Pessimism?”

Sachiko Tanuma（Tokyo Metropolitan University), Haruna Fukasawa（Keio University),

Tomoko Sakai（Kobe University), Mari Miyamoto（Keio University),

Tasuku Sasaki（Kobe University), Koharu Shiozawa（Tokyo Metropolitan University）

2021年２月22日（月） 18：00～22：00（ウェブ会議）

Discussion on Theme “Ethnographies of Neoliberalism: Hope or Pessimism?”

Presenters: Sachiko Tanuma（Tokyo Metropolitan University), Haruna Fukasawa（Keio University),

Tomoko Sakai（Kobe University), Mari Miyamoto（Keio University), Koharu Shiozawa（Tokyo Metropolitan University）

Discussants: Inge Daniels（Oxford University), Hazuki Aishima（Minpaku), Atsuko Tsubakihara（Ryukoku University）

成果

一部対面で行えたのは11月21日の研究会のみであったが、成果として以下の学会発表を行なった。準備のための集合を複数回行い、外部からのコメンテーターの意見をも受け、完成度の高い発表をすることができた。

⑴　2020年５月31日　分科会「ネオリベラリズムの民族誌――過去と今から」日本文化人類学会第54回研究大会、オンライン開催

⑵　2021年3月13日　Panel “Ethnographies of Neoliberalism: Hope or Pessimism?” IUAES 2020, Croatia（Online）［Convenor: Sachiko Tanuma, Co-convenor: Inge Daniels（Oxford University）］

⑴の発表には70人以上の参加者があり、対象となった人々の生き様や、微細な日常の複雑さを切り取った報告に考えさせられたという評価をいただいた。

⑵においてはInge Daniels氏より、もはや人類学でも当たり前のものではなくなりつつあるが、やはり長期に

渡って関係を築くことによって行う調査の有効性を感じられるものだったと評価された。会長の小泉潤二氏からも、このテーマと meticulous な民族誌によって fresh に感じられたとコメントをいただいた。

2021年度の日本文化人類学会でも分科会発表を行う予定である。

「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」

本研究の目的は、虚実入り混じる電子情報が飛び交う現代世界において、他者接触に関する歴史経験の記憶がいかに「史実性」を獲得するのか、想起の場や感情と関連づけて追究することである。

近現代のオセアニアおよび東南アジア島嶼部では、欧米諸国や日本による植民地統治や第二次世界大戦を経て、多くの新興国が独立した。今日に至る歴史動態のなかで、当該地域の人々は、移動して多様な他者と遭遇し、軋轢や戦争に巻き込まれ、また他者との平和的協働を経験してきた。このような他者接触の歴史記憶を焦点化するにあたり、便宜上、1）国民やエスニック集団を統合する公的な集合的記憶、2）個々人の日常生活に根差したヴァナキュラーな記憶の二極を措定しておく。

そして、第一に、２つの歴史記憶の相互関係を見据えながら、人々が感情を伴っていかに集合的記憶および個別経験の記憶を生成、継承し、あるいは忘却していくのかを考察する。さらに、遺物や文書、語りを通して想起された歴史記憶は、静態的な情報に留まることなく、人々の感情を揺さぶり、ときに過激な行動を引き起こす潜在力を有する。そこで第二に、今を生きる人々の歴史記憶が立ち現れる場を射程に入れ、想起が内包する感情および身体的な特性の把握を目指したい。

研究代表者　風間計博

班員（館内）丹羽典生

（館外）金子正徳、河野正治、北村　毅、桑原牧子、小杉　世、長坂　格、西村一之、比嘉夏子、深川宏樹、深田淳太郎、藤井真一、森　亜紀子、山口裕子、吉田匡興

研究会

2020年６月６日（土） 13：30〜19：00（ウェブ会議）

北村　毅（大阪大学）「沖縄のガマにおける集団憑依現象へのアプローチ」

質疑応答

長坂　格（広島大学）「『薄いエージェンシー』としてのあいまいな未来――イタリアのフィリピン系若者移住者の未来イメージをめぐって」

質疑応答

全体討論

2020年７月４日（土） 13：30〜19：00（ウェブ会議）

金子正憲（摂南大学）「インドネシアにおける『日本』をめぐる記憶と変化」

質疑応答

西村一之（日本女子大学）「『社』から『神社』へ、そしてその後――台湾における日本認識の理解に向けて」

質疑応答

全体討論

2020年11月７日（土） 13：30〜19：00（ウェブ会議）

森　亜紀子（同志社大学）「南洋群島に生きた沖縄の人びとの植民地経験――境界から問う『長い20世紀』」

質疑応答

藤井真一（国立民族学博物館）「移動の来歴と史実性――ソロモン諸島ガダルカナル島における人的交流の歴史経験」

質疑応答

全体討論

2020年12月５日（土） 13：30〜19：00（ウェブ会議）

吉田匡興（桜美林大学）「パプアニューギニア、アンガティーヤ社会での過去語りの諸相――他者接触の歴史経験としての『公的自己認識』と炉辺で語られる『ストーリー』としての『他者接触』」

質疑応答

河野正治（東京都立大学）「『外来の人』を始祖とする人々――ミクロネシア・ポーンペイ島における他者接触の歴史と親族関係の想起」

質疑応答
全体討論

成果

今年度はオンライン研究会を４回開催し、共同研究員８名が発表を行った。全体を通してみると、東南アジア島嶼部とオセアニアにみられる共通性および個別事例の特異性が提示され、議論のなかで共同研究の全体像を明確化することができた。

植民地期や戦争時に起こった現地の人々と日本人との接触の記憶、歴史的遺物や物的痕跡の現在（台湾、インドネシア）、沖縄から南洋群島へ移住した移民の歴史経験等の具体的事例が検討された。諸事例において、日本と近隣諸国・地域に関わる現代史のなかで見落とされがちな歴史経験の記憶が、遺物や写真といった物を通して継承されていることが明示された。また、戦時中に多数の犠牲者が出た洞窟における幽霊の目撃譚や憑依（インドネシア、沖縄）の事例では、死に結び付いた特異な閉鎖空間が現在の人々の感情や身体に影響を及ぼすという、興味深い現象が検討された。

さらに、ヨーロッパ人との初期接触の記憶（ニューギニア、ポーンペイ）、現在と過去の移動経路（ガダルカナル）の事例を見ると、親族関係や通婚を媒介項として記憶が継承され、自己認識が新たに生成されるという、オセアニア諸社会に埋め込まれた記憶の諸相を見出すことができた。加えて、異郷のイタリアにおけるフィリピン人移民の生活を見ると、若者は現状に不満を抱きながらも未来への確固たる意志を示すことがないという、従来の移民像とは異なる微弱で曖昧な態度が考察された。

文字によらないヴァナキュラーな他者接触の経験と歴史記憶は、口碑伝承のみならず、物や親族関係の知識を通じて継承される。そして、直接経験していない世代を動かして新たな記憶が創出され、再活性化される多様な位相を見出すことができた。

「伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって」

本研究では、ローカルな生活世界において一定の社会的・文化的意味と機能を持ち、使用されてきた伝統染織品が商品化され、従来の生産と使用の文脈を離れた市場に流通するようになった過程を考察対象とする。とくに、ローカルな文脈に根付いた文化実践を国単位のものとしてグローバルな文脈に引き上げ、可視化する無形文化遺産の認定や、商品としての販路開発と結びつくと同時に外部者からの評価を強化する観光化が、アジア地域を中心とする各地の伝統染織品の生産と消費にどのような効果や影響をもたらすのかという点を議論の軸とする。具体的には、1）個別の伝統染織品に対してどのような価値づけが行われるようになったか、2）個別の伝統染織品が生産者および生産者を取り巻く社会において保持してきたローカルな意味がどのように変容してきたか、3）そこに生じる変容は、伝統染織生産に用いられる技法や素材の選択にも影響を及ぼしているかといった課題に取り組む。

研究代表者　中谷文美
班員（館内）上羽陽子
（館外）青木恵理子、五十嵐理奈、今堀恵美、落合雪野、金谷美和、窪田幸子、佐藤若菜、杉本星子、田村うらら、松井　健、宮脇千絵

研究会

2020年９月27日（日） 10：00～18：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）
金谷美和（国際ファッション専門職大学）「モノ語り　Part VI――インド、カッチ地方のアジュラック」
民博企画展「知的生産のフロンティア」観覧
三谷　武（MITTAN）・小林史恵（CALICO）「アジアの布から生み出すデザイン――MITTAN・CALICOの活動から」

総合討論・今後の打ち合わせ

2020年10月21日（水） 18：00～19：30（ウェブ会議）
共同研究の中間総括と成果取りまとめについての打ち合わせ
2021年１月24日（日） 10：30～18：00（ウェブ会議）
テーマ討議１「伝統染織とファッションショー」
宮脇千絵（南山大学）「エスニック・ファッションショーに関する試論」

中谷文美（岡山大学）「バリのテキスタイル in パリコレ── Appropriation or CSI?」
落合雪野（龍谷大学）「ラオスのハンディクラフト業界における＜文化的知的所有権＞をめぐる動向── #MaxOma からファッションショーまで」

ワークショップ「布と社会をとらえるテーマ群をめぐって」
2021年３月23日（火）13：00～17：30（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）
杉本星子（京都文教大学）「モノ語り Part VII　マダガスカルの野蚕と家蚕──島固有種の多様性」
テーマ討議２「伝統として残す素材・技術・道具」
落合雪野（龍谷大学）「繊維植物を利用し続けるために──農学と森林学からの検討」
金谷美和（国際ファッション専門職大学）「素材からみる藤織りの伝承」
上羽陽子（国立民族学博物館）「女神儀礼用染色をめぐる伝統イメージ」

成果
今年度は、ウェブ開催を含め計４回の研究会を開催した。第１回は「モノ語り Part VI」として、金谷がインド・グジャラート州カッチ地方の木版捺染について調査スライドや現物を用いて解説した。特別講師として招いた MITTAN と CALICO という２種類のブランドの代表者からは、大量生産・大量消費を前提とする社会のあり方に対する疑問から生まれた、オルタナティブなものづくりとマーケティングの姿勢を聞いた。
本共同研究が次年度は最終年度となることを踏まえ、第２回は成果取りまとめに向けての方針を成立する全体討論を行った。その際の議論に基づき、第３回は集中討議をするためのテーマの例として「伝統染織とファッションショー」を設定し、落合、中谷、宮脇が報告を行った。続いてワークショップ方式でテーマの洗い出しを行い、第４回はその中の一つ、「伝統として残す素材・技術・道具」のもとに上羽、落合、金谷が報告をした。「モノ語り Part VII」としては、杉本とともに、民博の収蔵庫内の資料熟覧を行った。

「心配と係り合いについての人類学的探求」

子育てや介助、癒やしや看護といった生活の様々な局面におけるケアの実践は、他者との一時的関係から生じる情動によって起動され、集合的な規範によって支持あるいは却下され、社会経済的制度によって保障あるいは排除される一連の係り合いの文脈において把握することができる。いかなる社会も、その成員が必要とする庇護や治癒を提供するための込み入った規範と制度とを備えている。しかし不確実な世界において私たちは、それら規範によって支持される見込みのない心配、制度的な保障を欠いた係り合いに常に巻き込まれている。本研究の目的は、情動と規範との間に生起する係り合いの束が、ある種の秩序／反秩序へと向かう政治的な過程を民族誌的記述として捕捉すること、またそのための方法論の確立である。その民族誌的方法は同時に、ケアに関する複合的な規範と制度、それらを結びつける諸エージェントの働きかけ、およびそこに動員される知識・技術・資源を、ある価値産出的な系として、すなわちケアの生態系として描き出すことを可能にする。

研究代表者　西　真如
班員（館内）森　明子
（館外）有井晴香、池見真由、大北全俊、加藤敦典、桑島　薫、佐藤奈穂、デ・アントーニ アンドレア、内藤直樹、中村沙絵、野村亜由美、馬場　淳、浜田明範、モハーチ　ゲルゲイ、森口　岳

研究会
2020年７月19日（日）10：00～17：00（国立民族学博物館　大演習室　ウェブ会議併用）
西　真如「ケアの生態学について」
加藤敦典（京都産業大学）、モハーチ ゲルゲイ（大阪大学）「Detachment を読む」
西　真如（京都大学）「Matters of Care を読む」
全体討論
2020年10月10日（土）10：00～17：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）
成果公開に向けた討論（全員）
2021年２月６日（土）13：00～16：00（ウェブ会議）
デ・アントーニ アンドレア（立命館大学）「神様を形成する情動とケア──徳島県の現代にお祓いにおける生成とデタッチメント」

桑島　薫（名城大学）「他者の痛みへの接近――DV シェルターにおける支援から自他関係を考える」
総合討論

成果

2020年７月の研究会では、本共同研究の理論的枠組みについてメンバー間で理解を共有するための議論を行った。アフリカにおけるてんかん患者のケアやCOVID-19流行下の日本における自閉症者のケアといった事例を取り上げ、「ケアの生態学」の枠組みでどのように理解できるかを話し合った。また人間と非人間の双方に開かれたケアのあり方について、人類学やケア倫理学の最近の著書を取り上げながら討論を行った。10月の研究会では、メンバーがそれぞれ本共同研究の最終的な成果をにらんだ研究計画を発表し、全員で討論を行った。なお10月の研究会では認知症ケアの現場を訪問する予定もあったが、これはCOVID-19流行のため中止となった。

２月の研究会では、四国の神社でおこなわれている憑きもの祓いを、情動的技術による治癒の過程として分析した報告（デ・アントーニ）および、DV 被害者のシェルターにおいて支援活動に携わる者が、被害者の痛みにどのように接近するかを考察した報告（桑島）について討論を行った。

「統治のフロンティア空間をめぐる人類学――国家・資本・住民の関係を考察する」

本研究では、統治のフロンティア空間、つまり国家の中心部から隔たれ、統治の遂行が希薄である空間の動態に着目する。P・クラストルやI・コピトフ、J・スコットは、国家と国家に捕捉されざる住民との関係を各地域レベルで論じた。彼らが対象としたのは、主として植民地化以前や第二次世界大戦以前の世界である。だが、フロンティア空間の国家への包摂は不可逆的なプロセスではない。国家による領域化が一度は完遂したと思われる地域も、国家の統治能力の減退により、再度フロンティア空間に回帰することがある。また国家統治から放置されていた地域が、新たな資源の商品化により、資本や国家からフロンティア空間として再度見出されることもある。フロンティア空間の「発見と消失」は循環的な現象である。実際、21世紀に入ってから、世界各地で新たなフロンティア空間が「発見」され、その開発と領域化が進行している。本研究の目的は、アフリカ・東南アジア・中南米地域の事例分析をとおして、国家による統治と資本主義への接合から完全には逃れられない現代世界で、フロンティア空間の住民がいかに生活の再編を試みているのかを示すことである。

研究代表者　佐川　徹
班員（館内）池谷和信、南 真木人
（館外）王　柳蘭、大澤隆将、岡野英之、桐越仁美、日下部尚徳、久保忠行、後藤健志、近藤　宏、鈴木佑記、武内進一、二文字屋脩

研究会

2020年９月11日（金）13：00～18：00（ウェブ会議）
佐川　徹（慶應義塾大学）趣旨説明
池谷和信（国立民族学博物館）「フロンティア空間の発見と消失――乾燥帯アフリカの事例」
桐越仁美（国士館大学）「砂漠と海を結ぶ人びと――西アフリカにおける長距離交易の変遷と商業民ハウサの外部社会との結節」
岡野英之（近畿大学）「ゴールデン・トライアングル――二つの国家のフロンティアが重なるハイブリッド・ガバナンスの領域」

2020年９月22日（火）13：00～18：00（ウェブ会議）
佐川　徹（慶應義塾大学）「領域性概念についての覚書」
王　柳蘭（同志社大学）「東南アジア大陸部イスラーム圏における商業・宗教的ネットワークの展開」
日下部尚徳（立教大学）「チッタゴン丘陵から見るロヒンギャ問題――バングラデシュの国家・資本・先住民族」
総合討論

2021年１月９日（土）10：00～18：00（ウェブ会議）
事務連絡
寺内大左（東洋大学）「土地開発フロンティアを生きる焼畑民――カリマンタンの消えゆく熱帯林から」
宮地隆廣（東京大学）「ラテンアメリカにおける国家研究の射程」
武内進一（東京外国語大学）「アフリカ農村部の土地をめぐる統治――ルワンダとコンゴ民主共和国」
総合討論

成果

今年度の研究会では、経済的利益の獲得を求めて外部からフロンティア空間に参入してくる商人（東南アジアとサハラ以南アフリカ）の観点から、またフロンティア空間への統治の貫徹を目指す国家（東南アジア、中南米、サハラ以南アフリカ）の観点から調査研究を進めているメンバーが発表をおこなった。その結果、国家、資本、地域住民の三者関係をめぐってより多面的な理解が可能になった。さらに、東南アジアにおける外的フロンティア地域の典型ともいえるカリマンタンの事例や、サハラ以南アフリカにおいて複数のフロンティア性が折り重なる南部アフリカの事例の発表をとおして、フロンティア概念の有効性をめぐる議論が活発になされた。そして、理論的にはフロンティア概念と密接なかかわりをもつ領域性（territoriality）概念をめぐる発表がなされた。最終年度となる次年度は、これまでの研究会での各発表の内容を総括して、成果のとりまとめに向けた議論を進める予定である。

「グローバル時代における『寛容性／非寛容性』をめぐるナラティヴ・ポリティクス」

急激にグローバル化が進展し、人間の移動が激しさを増すとともに、多文化的状況が今後さらに進展することが予想される。西欧の列強と呼ばれた国々では、かつての植民地から大量の移民が流れ込み、ある意味では予想外の、だが、ある意味では、必然の結果とも言うべき、皮肉な現象が起きている。こうした地球規模の社会環境の変容に加えて、従来の口承性や書承性を超越するメディア環境の変容の影響下で、文化的他者認識としての「異人」を迎える側の経験は、その質と量において、かつての「異人論」が想定していた状況とは比べものにならない規模となっている。さらに、この大量移動の時代は、程度の差こそあれ、誰もが自らも異人となる経験を持つことが当たりとなっている。問題は、こうした状況において、大小さまざまなコンフリクトが発生し、「不寛容」社会が出現しつつある点である。

本研究では、こうした状況を解明し、これに応答するために手がかりとするのが、「異人論」である。文化人類学及び民俗学の学問的伝統においては、外部から訪れる他者、すなわち「異人」に対する歓待や排除、蔑視あるいは畏怖や憧れなどの観念や行動をめぐって、「異人論」と称される研究の蓄積がある。本研究では、「異人論」という視点や方法を再考し、鍛えなおすことで、人文科学の立場から現代的問題の解決の糸口を探ることを目的とする。

研究代表者　山　泰幸

班員（館内）河合洋尚、韓　敏、西尾哲夫

（館外）岩本通弥、鵜野祐介、及川祥平、小川伸彦、カルディ ルチャーナ、川島秀一、川松あかり、君野隆久、國弘暁子、小長谷有紀、小松和彦、竹原　新、村井まや子、横道　誠

研究会

2020年10月31日（土）13：00～17：00（ウェブ会議）

村井まや子（神奈川大学）「新しい皮――おとぎ話のなかの毛皮と現代アート」

カルディ ルチャーナ（大阪大学）「異人としての狐――20世紀～21世紀のアメリカ文学における日本の民話の受容」

2020年11月28日（土）13：00～17：00（ウェブ会議）

河合洋尚（国立民族学博物館）「異人から客家へ――清末・民国期、広東の「客」をめぐるナラティブ・ポリティクス」

小川伸彦（奈良女子大学）「Corona-rative？――寛容性／非寛容性の実験場」

2021年１月23日（土）13：00～17：00（ウェブ会議）

横道　誠（京都府立大学）「異人についてのエスノグラフィー　発達障害自助グループ・当事者研究会のナラティヴ・ポリティクス」

全　成坤（翰林大学）「災害をめぐる経験とナラティヴの間」

成果

2020年度は、コロナ禍のため、秋以降からウェブ会議のかたちで研究会を再開し、昨年度に引き続き持ち回りの発表を行い、異人をめぐる説話・民話などの物語、現代的な新しい形態のナラティヴと現代的問題との関係、いわば物語と現実社会との関係について、さらに集中的に検討を加えた。異人を排除する物語の論理を見極め、異人との間の相互的均衡的な関係性を打ち立てるような、ナラティヴがもつ潜在的な可能性について検討を試みた。対面的あるいは微視的なコミュニケーションの次元から、文学作品や映画など広く社会的に影響をもつ芸術作品における異人をめぐるナラティヴを共通の関心から検討を行った。

「カネとチカラの民族誌：公共性の生態学にむけて」

本共同研究の目的は、「利己性」と「経済」という視点から、公共性概念に関する人類学的な考察を深めることにある。そのために、近年の情報通信技術の発展のもとで営利を追求する諸主体（企業・NGO・個人・コミュニティ等）による実践に焦点をあてる。そして利己的な主体による、生存上の必要（食・住居・教育・医療・福祉等）の充足に関わるやりとりが、公的な領域やネットワークを創発する事例に関する民族誌を比較検討する。これらの検討を通じて、グローバルな政治経済的状況における公共性をめぐる諸問題に対する人類学的な応答の方途を構想する。それは、社会が成立する保証が無い状況から、社会がいかに立ち上がるか考察することでもある。そのために本共同研究では、市民社会やその規範的価値の存在を前提視しえない状況における、①それぞれの生存を追求しようとする多様な主体による利己的な行為に焦点をあて、②物質やエネルギーの移動をともなう相互行為としての経済に注目し、③それが特定の価値や倫理を帯びた場所やネットワークを産出する事態を社会的なものの創発として捉え、その機序を検討することを通じて「公共性の生態学」を構想する。

研究代表者　内藤直樹
班員（館内）森　明子
（館外）飯嶋秀治、岩佐光広、岡部真由美、北川由紀彦、木村周平、工藤由美、久保忠行、沢山美果子、髙橋絵里香、内藤直樹、中野智世、藤原辰史、丸山淳子、三上　修、モハーチ・ゲルゲイ、山北輝裕

研究会
2020年７月４日（土）13：30～18：00（ウェブ会議）
木村周平（筑波大学）「Scallop at the end of Japan――公共性の生態学への予備的考察」
大槻　久（総合研究大学院大学）「協力の起源と維持機構――その進化生物学的考察」
討論（全員）
2020年11月７日（土）13：00～16：00（ウェブ会議）
内藤直樹（徳島大学）「『厄介者』と（して）生きることについて――寄生や依存から考える」
討論（全員）
2021年１月23日（土）13：30～17：00（ウェブ会議）
岡部真由美（中京大学）「布施のエコノミーと宗教的なるもの――北部タイにおける仏法センターの事例」
（全員）成果公開にむけた討論
2021年３月18日（土）13：30～17：00（ウェブ会議）
深田淳一郎（女子栄養大学）「介護の人類学試論――『贈与と福祉――全身性障害者の自立生活運動を事例に』
討論（全員）

成果
今年度は、安易な価値観の共有を許さない非人間を含む他者とともにあることのままならなさのなかで活動の場を創り、維持する機序について、さまざまな分野を専門とする共同研究員が理解するための基盤について検討した。そのために、数理生物学や福祉社会学の専門家を特別講師として招聘し、協力や共生についての生物学的な捉え方や福祉につきまとう贈与のパラドクス問題の解法についての討論をおこなった。そして、とりわけ近代以降にネガティヴなイメージがつきまとうようになった依存、寄生、厄介といった関係のあり方や腐敗、雑音、賭けといった活動や態度を通じて「共生」概念について再考する可能性を検討しようとしている。研究代表者の内藤は、こうした検討を通じて得た見方をもとに、２編の編著本を出版した。最終年度には＜エコロジー＞と＜エコロジカルに考えること＞の違いを整理した上で、否定的なものから公共性や公共空間について再考する方途について考察する。

「拡張された場における映像実験プロジェクト」

現場での観察や実測に基づくフィールドワークなど人類学的な手法が、美術、特に映像表現を含むものにおいて随分多く見られるようになり、また人文科学においても写真、映像、音楽など芸術の手法を活用した研究の必要性を論じるアートベースド・リサーチという考え方が広まりつつある。このように、従来の学問領域を超えたアプローチが日々更新されているという傾向を踏まえ、本研究では、映像人類学者、文化人類学者とキュレーター、アートコーディネーター、美術家といった芸術に関する専門職に携わる者からなるチームを結成し、多様な領域の理論と現実社会とを芸術を媒介に結びつけることを目指す。異なる領域での活動を行う者が互いにその活動にふれ、交流や協働作業を通してそれぞれの知と技術との交換を可能とする領域横断的な研究活動の基盤作りを推進するととも

に、従来の学問それぞれのアーキテクチャー（枠組み、構造）自体を拡張、発展へとつなげていくことを目的とする。

研究代表者　藤田瑞穂
班員（館内）下道基行、川瀬　慈
（館外）奥脇嵩大、岸本光大、佐藤知久、西尾咲子、西尾美也、福田浩久、村津　蘭、矢野原佑史

研究会
2020年７月１日（水）13：00～17：00（ウェブ会議）
村津　蘭（東京外国語大学）「憑依におけるメディアと情動」
ふくだぺろ（福田浩久・立命館大学）「ルワンダの元狩猟採集民トゥワのイメージコスモロジー」
全体討論
2020年11月18日（水）14：00～17：30（国立民族学博物館　大演習室　ウェブ会議併用）
柳沢英輔（同志社大学）「エオリアン・ハープを用いた環境の可聴化」
全体討論
2021年３月９日（火）13：00～17：00
各メンバーによる研究進捗報告、全体討論

成果
新型コロナウイルスの感染拡大の影響によって社会が変化していく中で、あらためて「映像」をどのように捉えるかということがたびたび議論の中心となった。フィールドワークの実施が難しく、研究計画の延期・変更を余儀なくされたメンバーも少なくないが、この状況にも柔軟に対応しようとする意欲的な萌芽的研究が多数報告され、また活発に意見交換も行われた。今年度最終の研究会では、成果発表のあり方についても協議した。研究期間を１年延長し、学際的な共同研究として、研究会のタイトルにもある「拡張」「実験」をキーワードに、この研究会によって新たに生まれた視点から各自の研究をつなぎ合わせて一つのストーリーを築き上げるための作業に時間をかけて取り組むことが確認された。加えて、動的イメージに関する論考をめぐっての将来的な展望をどのように示すかが継続的な課題となるだろう。

「沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討」

本研究では、国立民族学博物館所蔵の「泉靖一アーカイブ」を対象として、泉によって提示されたアイヌ社会像の再検討を試みる。具体的には、泉靖一が「イオル論」をはじめとするアイヌ社会モデルの構築に至った沙流川流域での調査資料を中心とする基礎データを、今日的な研究成果や社会意義などから改めて読み解くことにより、その新たな学術的・社会的活用の可能性を追究する。

このような目的の下、本研究では、まず①アイヌ研究に関連する文化／社会人類学・歴史学・考古学などの現在までの成果と、②アイヌ文化振興にかかわる諸政策・事業活動の成果を踏まえ、多角的に泉靖一の調査資料・データの再検討を行うことにより、単なる政治・政策的な批判や歴史的事実関係の正否の検証にとどまらない新たな評価や解釈の可能性を追究する。その上で、現在平取町を含む北海道各地で推進されている、「伝統的生活空間（イオル）」の再生事業をはじめとするアイヌ文化の継承や振興に対して、泉靖一の調査資料が果たしうる貢献や役割を検討する。

研究代表者　大西秀之
班員（館内）大塚和義、河合洋尚、齋藤玲子
（館外）石村　智、貝澤太一、萱野公裕、木村弘美、佐々木史郎、長野　環、森岡健治、吉原秀喜

研究会
2020年11月27日（金）13：00～17：30（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）
沙流川流域資料の活用の可能性
泉アーカイブの再検討１
泉アーカイブの再検討２
2020年11月28日（土）９：30～15：00（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）
森岡健治（平取町立二風谷アイヌ文化博物館）「平取町内の考古学的調査による建物跡と墓――擦文～アイヌ文化期」

石村　智（東京文化財研究所音声映像記録研究室）「泉靖一の見た済州島とその後」
総合討論と次回計画
2021年３月14日（日）13：00～17：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）
大塚和義（国立民族学博物館）「アイヌ史から見る沙流川におけるアイヌ民族綜合調査の意義」
大西秀之（同志社女子大学）「イオル再生事業のための泉靖一による沙流川調査資料の活用」
総合討論と次回計画

成果

２年目となる2020年度は、新型コロナ感染症問題の影響を被り、本共同研究の計画の修正を迫られた。もっとも、研究報告に関しては、オンライン研究会を開催することにより、ほぼ計画通り実施し一定の成果を得ることができた。

具体的には、まず石村報告と大塚報告により、泉靖一が沙流川流域調査を行う前史として、済州島や大興安嶺での民族誌調査が果たした役割を明からにすることができた。また森岡報告では、沙流川流域の埋蔵文化財調査から得られた考古学的データとの比較検討を、大西報告では、現在推進されているアイヌ民族の伝統的生活空間の再生事業に対する泉調査の意義や活用法を、それぞれ議論することができた。

しかし、本共同研究の主目的は、あくまでも泉靖一アーカイブの資料を実見し検討することである。本年度は、社会的要請などにより対面での会合の機会を設けられなかったため、主目的と位置づけているアーカイブ資料の検討をほとんど推進することができなかった。複製などの館外検討ができない状況が続く場合、次年度も目的が達成できない状況が続くと危惧している。

「グローバル化時代における『観光化／脱－観光化』のダイナミズムに関する研究」

本研究は、多様化し拡大する観光現象を文化人類学的に捉え、新たな理論的転回を図ることを目的とする。

1980年代以降、文化人類学は観光という現象に着目するようになった。しかし、観光社会学ではJ.アーリやS.ラッシュらのグローバル論と関連付けながら新たな理論的展開を遂げたのに対し、人類学内部ではその現状をうまく捉えきれず、2000年代以降、観光研究は停滞しつつある。

そして現在、観光の形態はさらに多様化している。それは戦争など負の歴史を次世代へと伝え（ダークツーリズム）、移住を検討させ（移住観光）、自然と人間の共存を教育し（エコツーリズム）、アニメ作品などのファンと交流を図り（コンテンツツーリズム）、衰退した地域社会を再興させるものである（地域文化観光）。つまりこれまでまったく別々の文化現象だったものが、「観光」という文脈に包含されつつあるといえる。

他方、これまで観光の文脈で語られてきたものが、環境破壊や地域住民と観光客とのコンフリクトの増加などにより、制限され、文脈をずらされるという現象も起きている。本研究ではこれらの過程を「観光化」「脱－観光化」と概念化し、考察を深める。具体的には、①国内外の諸事例がいかにして「観光」の文脈に包含され／「観光」の文脈からずらされていったのか、その詳細を実証的に検討し、②グローバル化の議論を批判的に参照しつつ、人類学全体を見据えた新たな視座の構築を目指す。

研究代表者　東　賢太朗
班員（館内）奈良雅史
（館外）岡本　健、越智郁乃、紺屋あかり、鈴木佑記、中村香子、福井栄二郎、藤野陽平

研究会
2021年２月５日（金）14：30～18：00（ウェブ会議）
中村香子（東洋大学）「『マサイ』民族文化観光における『苦境』の観光資源化に関する一考察」
鈴木佑記（国士館大学）「海民村落比較研究事始――タイ領アンダマン海域における『観光化／脱観光化』」
全員「観光化と脱観光化とは？――発表２事例をふまえて」
2021年３月５日（金）14：30～18：00（ウェブ会議）
紺屋あかり（明治学院大学）「ポストコロニアル・ノスタルジア――パラオ老人会と日本人観光客との交流の場を事例に」
岡本　健（近畿大学）「コンテンツツーリズムから考える現実・情報・虚構空間と身体的・精神的な移動――アニメ聖地における旅行者の『リアリティ』を考える」
全員「ポスト・コロナの観光化と脱観光化――発表２事例をふまえて」

成果

２年目の2020年度は、新型コロナウィルスの完成拡大により当初６月に予定していた第１回の研究会を延期したのち、数回の対面での研究会を計画したがかなわず、2021年２月５日と３月５日に２度のウェブ会議を開催した。本年度は共同研究会の全メンバーが現地調査を行うことができなかったため、４つの発表の内容も新たな現地調査資料を含むものではなく、これまでの調査資料を振り返り、新たな視点を見い出すための試み的な内容であった。しかし、そのような限定された状況下においてもメンバーの多数がウェブ会議に参加し、活発な議論を行い、それぞれ新たな知見を獲得することができた。とくに現状進行している新型コロナウィルスの感染に対する観光地の対応と、それにともなう脱観光化、さらには次第に再開する観光地の再観光化の状況について、それぞれの調査地の状況を共有できたことは予想外の成果であった。次年度以降については、今後の調査地の状況をメンバー各自が把握しながら、当面可能な研究を継続することを確認した。

「食生活から考える持続可能な社会――『主食』の形成と展開」

本研究の目的は、人類の食生活を生態、文化、社会、歴史の観点から検証し、持続可能な社会を実現するための食生活のありかたを探究することである。そのための作業概念として「主食」を採用する。「主食」に相当する語彙や概念は普遍的ではなく、時代や地域によって多様であるが、「人を肉体的・精神的に養ううえで、中心的役割を果たす食べもの」という一定の定義を与えることで、具体的な食生活中の「主食」の諸相から、対象とする社会や集団における食のあり方とその背景をより端的に浮かび上がらせることが可能となる。

食生活とは、食品の生産、加工、流通、消費、調理、廃棄の過程であり、自然環境、価値観、教条、法律や制度、経済条件、身体的な欲求や生理的条件、個人的な嗜好などが、人間の営みを通して密接に関連しあっている。それらの関連性を「主食」という作業概念にそって整理し、考察することにより、地球規模で人間が引き起こしている食の問題を明らかにする。そのうえで、人類学を中心に、歴史学、調理学、体育学などの食生活を理解するうえで核となる諸分野による学際的な議論を通して、人類の食生活のあるべき姿を検証したい。

研究代表者　野林厚志

班員（館内）池谷和信、宇田川妙子、菅瀬晶子

（館外）梅崎昌裕、木内敦詞、佐藤廉也、中澤弥子、那須浩郎、濱田信吾

研究会

2020年７月31日（金）15：00～17：00（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）

大石侑香（国立民族学博物館）「ハンティの主食の取り入れ方」

質疑応答と全体討論

2020年９月14日（月）15：00～17：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

野林厚志（国立民族学博物館）「エスニシティから見た主食――台湾原住民族の事例」

質疑応答と全体討論

2020年10月２日（金）10：00～12：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

菅瀬晶子（国立民族学博物館）「中東における主食概念とアブラハム一神教――東地中海地域の事例を中心に」

質疑応答と全体討論

2020年11月５日（木）15：00～17：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

宇田川妙子（国立民族学博物館）「イタリアのパンと小麦から考える『主食』」

質疑応答と全体討論

2021年３月22日（月）15：30～17：00（ウェブ会議）

1. これまでのふりかえり
2. 来年度の研究会計画

成果

本年度は当初研究計画にもとづき、主として民族誌の事例から主食がどのような位置付けにあるかについての発表と議論を行なった。主食とは何かという課題において浮かび上がった１つの考え方として、ある特定の食物が食生活のなかで主食として位置づけられていく過程として、「１つの選択肢――主要な食べ物（主要食）主食」という３つの「食物地位」の段階をあげることができた。さらに、１つの選択肢には、自然資源から生態資源への導入が、主要な食べ物には、集団レベルでの生態学的な適応と文化的な組み込み、主食は、様々なレベルでの制度的な裏づ

けが、それぞれの背景に存在する可能性が想起されることになった。

本研究課題の主要な関心の１つである主食の形成には、この「食物地位」モデルが適用可能であり、もう１つの関心である主食の展開には、地位の拡大と縮小の両方が予想され、今後の研究会でも議論の課題にしたいと考えている。

「社会・文化人類学における中国研究の理論的定位――12のテーマをめぐる再検討と再評価」

中国社会を対象とする人類学的研究は20世紀前半より本格的にはじまり、日本、欧米、中国国内の研究者によりさまざまな研究が展開されてきた。早期には「未開」社会とは異なる複合社会の研究を推進する舞台として期待され、1960年代になるとアフリカ研究との比較の対象として民族誌が著された。ところが、その後の中国研究は「独自」の路線で議論を進めるようになったため、同じ東アジア研究ですら対話が難しくなり、人類学において半ば「孤立」した立ち位置に置かれるようになっている。だが、中国をめぐる人類学的研究を振り返ると、国家 - 社会関係論、ポリティカル・エコノミー論、個 - 全体論、存在論など、現代人類学の先駆けともいえる議論が早期から展開されてきたことに気づかされる。本研究は、中国研究で多くの蓄積がなされてきた12のテーマ（親族、ジェンダー、コミュニティ、エスニシティ、宗教、風水、生態、食、芸術、観光、メディア、都市）をとりあげ、その理論史を整理することで、人類学一般の理論と対話をなすことを目的とする。

研究代表者　河合洋尚
班員（館内）韓　敏、奈良雅史
（館外）阿部朋恒、磯部美里、稲澤　努、川口幸大、川瀬由高、小林宏至、櫻田涼子、清水拓野、周　星、田中孝枝、中生勝美、丹羽朋子、伏木香織、藤野陽平、堀江未央、横田浩一

研究会
2020年10月31日（土）14：00～18：30（国立民族学博物館　第４セミナー室　ウェブ会議併用）
趣旨説明＆新規自己紹介
稲澤　努（尚絅学院大学）「中国の『民族』とエスニックグループをめぐる研究動向」
コメンテーター：大石侑香（神戸大学）
川口幸大（東北大学）「親族」
コメンテーター：松尾瑞穂（国立民族学博物館）
2020年11月１日（日）10：00～16：00（国立民族学博物館　第４セミナー室　ウェブ会議併用）
奈良雅史（国立民族学博物館）「中国における宗教の人類学――成立宗教を中心とした研究動向」
コメンテーター：片岡　樹（京都大学）
横田浩一（国立民族学博物館）「中国民俗宗教研究の動向」
コメンテーター：片岡　樹（京都大学）
2020年12月12日（土）14：00～18：15（ウェブ会議）
周　星（神奈川大学）「中国の文化遺産に関する人類学的研究」
コメンテーター：黄　潔（愛知大学）
伏木香織（大正大学）「音楽人類学と民族音楽学」
2020年12月13日（日）10：00～15：30（ウェブ会議）
田中孝枝（多摩大学）「中国における観光の人類学の研究動向」
コメンテーター：山下晋司（東京大学名誉教授）
小林宏至（山口大学）「文化人類学と風水研究」
コメンテーター：中野麻衣子（東洋英和女学院大学）
総合討論

成果

2020年度は、中国を対象とする人類学的研究（以降、中国民族誌と表記）のうち、宗教、風水、観光、文化遺産、音楽という５つのトピックをとりあげ、その研究動向を示すとともに、それらの理論的意義について議論を展開した。５つのトピックのうち、宗教、風水、観光をめぐるレビューは、これまでも日本語、中国語または英語でなされている。ただし、発表担当者は、人類学理論一般との対話に焦点を当てることで、従来とは異なる角度からこれらの研究動向を再検討した。それに対して、文化遺産と音楽については、これまで断片的な紹介にとどまっており、

全体像が描かれることが少なかった。したがって、この２トピックの研究動向の整理は、それ自体が新しさをもつものであった。これらのトピックの紹介と再検討を通して、中国民族誌学は早くから歴史や政治経済を視野に入れた研究を展開していたことを、改めて確認することができた。また、国・地域によって研究姿勢に若干の違いがみられ、一部は応用人類学的な思考を強くもっていることも、再確認した。さらには、風水研究の一部に存在論人類学の先駆けと思われる議論があるなど、中国民族誌学の理論的意義を新たに見出すことができた。

「人類史における移動概念の再構築――『自由』と『不自由』の相克に注目して」

本研究は、人類史における移動概念を、特に「自由」と「不自由」の相克に注目して再検討し、移動研究の新たな地平を築こうとするものである。人が移動する要因には、迫害や紛争、あるいは天災など生存に関わる現象からの「避難」、特定の集団や個人に対する「強制」、自由意志が先立つ「移住」などさまざまな位相がある。このなかで「強制」については、とりわけ移動者の不自由性や被害的側面、悲劇性ばかりが強調され、移動者は主体性のない存在として理解されてきた。これに対して、本研究では、「強制」に含まれる移動現象（たとえば、奴隷貿易、強制移住、契約労働、政治難民）を軸に、時間軸と空間軸との結節点が異なる事例を研究対象として取り上げ、それぞれの事例において、不自由と自由がどのように相克しているのかを検討し、事例間の比較を試みながら、人類史における移動概念について再検討する。具体的には、移動を生じさせた政治的、宗教的、経済的、あるいは文化的、自然環境的な要因を踏まえながら、他方で、移動する人や集団の立場から移動現象を捉えなおす。このようにマクロな視点とミクロな視点とを交錯させ、「自由」と「不自由」の相克に着目しながら、コンテクストの異なる多様な移動を比較・連関させることで、人類史における移動研究の新たな展開に資する概念の再構築を目指す。

研究代表者　鈴木英明
班員（館内）池谷和信、新免光比呂、寺村裕史、三島禎子
（館外）小林和夫、左地亮子、薩摩真介、杉本　敦、園田節子、田中鉄也、馬場多聞、向　正樹

研究会
2020年11月28日（土） 12：30～18：30（国立民族学博物館　第４セミナー室　ウェブ会議併用）
鈴木英明（国立民族学博物館）「アデン湾両岸地域の可能性」
馬場多聞（立命館大学）「14世紀のイエメンの東アフリカ出身者」
石川博樹（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「エチオピアのオロモの移動――その歴史的意義と研究の困難さ」
池谷和信（国立民族学博物館）「ソマリランドにおける人の移動、ものの移動」
「先住民の宝」展見学
栗本英世（大阪大学）、三島禎子（国立民族学博物館）によるコメントと総合討論
2021年２月18日（木） 9：30～13：00（ウェブ会議）
今後の進め方について
小林和夫（早稲田大学）「19世紀ガンビア川流域の落花生栽培と移民労働者」
三島禎子（国立民族学博物館）「移動する人の諸相――時間軸と空間軸の接点からみるソニンケ商人」
田中鉄也（人間文化研究機構）コメント
総合討論
2021年３月26日（金） 9：30～13：30（ウェブ会議）
イントロダクション
左地亮子（東洋大学）「ヨーロッパにおけるジプシー／ロマの移動――フランスのマヌーシュとルーマニア・ロマ移民を事例に」
杉本　敦（国立民族学博物館）「トランシルヴァニアの小農経済――『豊か』になるための移動？」
新免光比呂（国立民族学博物館）コメント
総合討論

成果

本年度前半はコロナの状況を伺い、研究会の開催を延期したために開催実績はなかった。11月から３月までに３度の研究会を開催した。それぞれ、第１回研究会はアデン湾両岸地域、第２回はアフリカ大陸西部、第３回は東欧にそれぞれ焦点を当てた。このように地域別に研究会を組んだのは、本研究会が多様な専門分野の専門家から構成

されており、まず、それぞれの慣れ親しんだ空間枠組みでそれぞれの考えていることを出し合い、そこから新たな展開を構想したかったためである。したがって、次年度前半もこのような地域別の構成で研究会を組んでいく。

「島世界における葬送の人類学――東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較」――――――――――――――――

アフリカ大陸で誕生した私たち現生人類＝ホモ・サピエンスは、約５万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼域への移住を開始した。一方、人類による葬送行為も私たちホモ・サピエンス以降に活発化し、発展してきたと考えられている。その萌芽的な痕跡はアフリカ大陸や西アジアで確認されているが、アジア・オセアニアへの島世界へと移住した人類集団も、その初期から墓葬や埋葬行為を行っていた痕跡が、各地で発見されつつある。本研究の目的の一つは、人類史的には大陸部で誕生したと考えらえる葬送行為や墓葬文化が、島世界という独特な環境への移住後、どのように変容し現在に至るのかという時間軸による検討を行うことにある。ついで二つ目の目的は、アジア～オセアニアの島嶼域を大きく東南アジア・台湾・日本の南西諸島・オセアニアという４つの地域に分けたうえで、その地域性を人類の島嶼適応や移住といったテーマを軸とする人類史的な視点から検討することにある。また時間軸による検討では、アジア・オセアニアにおける現生人類の歴史と重なる５万年程度の幅の長期的な考古学的時間軸と同時代を含む約100年程度の幅の民族誌的時間軸を比較の準拠枠とする。本研究では、考古学と文化人類学を軸に分野横断的な比較検討を行うことで、島世界の葬送や墓葬にみられる普遍性、歴史性、地域性を明らかにしたい。

研究代表者　小野林太郎
班員（館内）印東道子、池谷和信、丹羽典生、野林厚志
（館外）秋道智彌、片岡　修、片桐千亜紀、後藤　明、新里貴之、鈴木朋美、角南聡一郎、竹中正巳、田中和彦、前田一舟

研究会
2020年８月１日（土）13：20～18：00（第３セミナー室　ウェブ会議併用）
小野林太郎（国立民族学博物館）「第三回研究会の趣旨説明と目的の紹介」
竹中正巳（鹿児島女子短期大学）「古人骨からみた南九州・奄美群島地域の地域の再葬」
新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）「琉球列島先史時代の葬墓制」
小野林太郎・片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）「ウォーレシアにおける初期金属器時代の再葬――比較の視点から」
総合討論
2020年11月28日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第７セミナー室　ウェブ会議併用）
小野林太郎（国立民族学博物館）「第４回研究会の趣旨説明と目的の紹介」
印東道子（国立民族学博物館）「ミクロネシア・ファイス島の埋葬遺跡と葬法の特徴」
丹羽典生（国立民族学博物館）「民族誌的資料からみるフィジーの葬儀の変化」
後藤　明（南山大学）「東南アジア・オセアニアの埋葬法と他界観――民族誌テキスト分析の新手法に触れて」
秋道智彌（総合地球環境学研究所）「海民の葬制――民族誌ノート」（コメンテーター）
総合討論
2021年３月６日（土）13：00～18：00（国立民族学博物館　第７セミナー室　ウェブ会議併用）
前田一舟（うるま市立海の文化資料館）「琉球における横穴の墓について」
竹中正巳（鹿児島女子短期大学）「南九州における横穴の墓について」
片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）「崖葬墓文化に関する考察」
小野林太郎（国立民族学博物館）「東インドネシアの複葬――民族考古学的視点から」
池谷和信（国立民族学博物館）「狩猟採集民による葬送とは――人類史的アプローチ」
討論――葬送の多様性・地域性と島世界との関係性

成果
今年度はコロナの影響を受け、完全に対面式での共同研究を開催できなかったが、オンライン上のウェブ会議を含めたハイブリッド形式にて計４回の共同研究を開催することができた。15名のメンバーのうち、実に10名が最低１回は発表を行うことができ、地域的にも琉球・南西列島、東南アジア島嶼部、オセアニアの全地域に関する事例報告がなされ、活発な議論を展開できた。時間軸においても、考古学データに基づく先史時代の事例から、民族誌

データに基づく近現代の事例まで広く検討を行った。これらの結果、島世界における葬送の一つの特徴として、二次葬や三次葬といった複葬がかなり広範囲に行われる傾向があることが明らかとなってきた。琉球列島で現代においても知られる風葬や、先史時代から近世期まで行われてきた崖葬墓などはまさにその一例と認識できる。同じく風葬や崖葬墓は、インドネシア東部やフィリピン諸島でも先史時代から近世期にかけて散見され、とくに離島域では主流となる傾向が確認された。一方、オセアニアでは水葬などやや異なる葬送も一般的だった可能性があり、こうした地域差の追究は次年度の共同研究でさらに検討を計画している。

「感性と制度のつながり――芸術をめぐる『喚起』と『評価』のプロセスから考える」

本共同研究は、制作や展示といった芸術実践において、モノゴトや制度などの非人間を含めた諸存在の働きにおける「喚起」と「評価」のあり方に注目し、感性と制度の不可分なありさまを検討していく。

芸術の人類学では1980年代後半から、美や芸術の普遍性を前提とすることが孕む権力性に基づき、地域の実践とグローバルな制度の関係が問題にされてきた。他方で、1990年代末以降は物質文化研究やエージェンシー論が隆盛し、人やモノゴトの働きの連鎖や相互生成のありさまが提示されてきている。しかし、後者で注目を浴びた「喚起」や「魅惑」と、前者で問題になっていた制度や審美的判断がどのように結びついているのかは、十分に検討されてこなかった。

そこで本共同研究は、世界各地の絵画や生活造形、音楽、古今東西の景観、パフォーマンスなどを含む芸術実践における「喚起」と「評価」の多様なあり方を明らかにしながら、感性と制度的領域が不可分に結びつくさまを検討していく。

研究代表者　緒方しらべ
班員（館内）寺村裕史
（館外）兼松芽永、竹久　侑、田中理恵子、登　久希子、橋本　梓、長谷川　新、光本　順、渡辺　文

研究会

2020年８月２日（日）13：30～16：00（ウェブ会議）
緒方しらべ（日本学術振興会）「アートを評価する――ナイジェリアの地方都市におけるアートの感覚的なものと制度的なもののつながり」
光本　順（岡山大学）「物質のネットワークと古墳づくり」
寺村裕史（国立民族学博物館）「考古学のデータ処理におけるアナログとデジタル――実測図から読み解く制度・身体・感性」

2020年10月11日（日）13：30～16：00（ウェブ会議）
竹久　侑（水戸芸術館）「制度を見直し、感性の発露をみる――『アートセンターをひらく』における『変身ワークショップ』を通して」
長谷川　新（インディペンデントキュレーター）「石器時代最後の夜――香川県鷲ノ山の石工と芸術家の邂逅を例に」
中間全体総合討論

2020年10月18日（日）13：30～15：30（ウェブ会議）
兼松芽永（女子美術大学）「中山間地における郷土美術教育と芸術祭」
中間全体総合討論

2021年１月24日（日）13：30～18：00（ウェブ会議）
橋本　梓（国立国際美術館）「形なき作品の収蔵は美術館をどう変えるか」
登　久希子（国立民族学博物館）「アートにかかわる『経験』の語りについての一考察」
全体討論：今年度の全体のまとめと総論、来年度の研究計画

2021年３月21日（日）13：30～18：00（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）
緒方しらべ（関西外国語大学）・兼松芽永（女子美術大学）「今年度の論点の整理と方向性」
登　久希子（国立民族学博物館）「The Institution of Institutionalism の概要と本研究の参照点」
長谷川　新（インディペンデントキュレーター）「『感情史とは何か』の概要と本研究の参照点」
全体討論と来年度の研究計画

成果

今年度の５回の研究会の成果として、以下２点が挙げられる。1)「制度」を批判の対象としてだけでも、利用の対象としてだけでもなく、創造的な「別物」として捉える可能性が見えてきたこと。また、これによって、従来の制度論と生成論の二項対立を乗り越える道が見えてきたということ。2)「制度」が創出されるプロセスに、「感性」が介入／発露していることが明らかになり、「感性」が「制度」の変容可能性の一つの鍵を握っていることがわかってきた。作家、キュレーター、鑑賞者、参加者、市民・地域住民、考古学者、過去を生きた人たちの感性（感覚、身体、感受、感情など）が既存の「制度」と接触したり、利用したり、それに反発したり、それと交わらなかったり、調和したりと、「制度」との何らかの絡みのなかでうごめく「感性」があり、それによって創出されうる／変容する（あるいはしない）「制度」がある、という状況が浮かび上がってきた。

「モビリティと物質性の人類学」

グローバル化の進展にともなって、人々の移動はますますその規模と多様性を増している。本研究の目的は、生業活動から観光まで、現代世界の人々が地球上を移動してゆく様々なあり方について知見を集積するとともに、人間の移動には不可避的に伴う物質的な側面を特に焦点化しながら比較分析することである。本研究ではまず、人々の移動を共通項として研究を続けているメンバーの事例をもとに、a. 身体、b. インフラストラクチャー、c. マテリアリティを鍵概念としてそれぞれの移動に固有の物質的側面を検討する。そのうえで事例間の共通性と差異を、①地域（アジア、ヨーロッパ等）、②移動背景（難民、観光等）、および③移動手段（徒歩、自動車等）の三つを軸に比較分析する。本研究では人々の移動を、人とモノと環境がその都度の状況に応じて個別的な関係を取り結ぶ実践として捉え、上記の作業を通じてそこに内在する様々な物質性（matelialities）の諸相を明らかにしてゆく。

研究代表者　古川不可知
班員（館内）八木百合子
（館外）左地亮子、高木　仁、土井清美、中野歩美、那木加甫、難波美芸、西尾善太、橋爪太作、片　雪蘭、村橋　勲

研究会

2020年７月18日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）
片雪　蘭（関西学院大学）「北インド・ダラムサラにおけるチベット難民の移動／滞留と物質性」
中野真備（京都大学）「インドネシア・バンガイ諸島におけるサマ／バジャウの海と道」
「全体討論と今後の進め方について」

2020年10月31日（土）14：00～18：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）
左地亮子（東洋大学）「『ジプシー巡礼祭』における身体・モビリティ・マテリアリティー――ストーリーを横切る『空間の偶然性』に着目して」
萩原卓也（京都大学）「走るたびに感じる身体の居場所――ケニアにおける自転車競技選手の浮遊と沈殿」
「全体討論と今後の進め方について」

2021年１月23日（土）13：30～16：00（ウェブ会議）
中野歩美（関西学院大学）「地続きの移動／定住――北西インドの移動民における野営の技術と物質性」
「全体討論と今後の進め方について」

成果

本年度は３回の研究会を開催し、５名のメンバーが発表をおこなった。上記の研究実施状況に示した事例を基に議論を重ね、世界各地の多様な移動実践について知見を深めた。さらに複数の事例を比較検討することを通して、いわゆるグローバル化に伴った移動様式の類似する変化や、移動を媒介するモノに応じた環境認識の差異、移動と住まうことの連続性といった、研究会全体に通底する複数のトピックも見出すことができた。さらに移動と滞留という区分自体がそもそも分析的な仮定に過ぎないのではといった、研究会の立脚点を再考し、深化させるような問いも提示された。また2021年３月にクロアチア（オンライン）で開催されたIUAES 2020ではMobilities and Materialitiesというパネルを組織し、関心を共有する海外の研究者と意見交換をおこなった。新型コロナウイルスの影響により、当初目標としていた発表回数は達成できず、外部講師の招聘も実現されない結果とはなったが、最終年度につながる成果は得られたものと考えている。

「海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み」

本共同研究の目的は、国外フィールドでの民族誌的経験を通して、文化人類学による日本社会／文化理解の新たな視角を提案することである。我が国における文化人類学は、戦後しばらくまでの時期を除けば、主に国外フィールドにもとづく異文化理解の学として発展してきた。異文化理解とは異文化を自文化と参照する営為であるため、それは必然的に一種の自文化論となる。ただしこの自文化論はほとんどの場合、研究者自身にとってもじゅうぶんに意識化されることはなく、あくまで民族誌の行間に埋め込まれている。しかし実際には、梅棹忠夫や佐々木高明、中根千枝の例が示すように、日本の人類学には、海外ですぐれた民族誌的研究を行ってきた人類学者が日本文化に関するユニークな仮説を提案するという良質な知的伝統が存在する。本共同研究では、そうした伝統を新たに継承すべく、国外での民族誌的研究の経験を重ねてきた研究者たちが、暗黙裡の参照項として措定してきた日本文化を対象化することで、国外フィールド発の日本研究の新たな可能性を提示したい。

研究代表者　片岡　樹
班員（館内）飯田　卓、平井　京之介
（館外）市野澤潤平、川瀬由高、川田牧人、桑山敬己、黄　潔、島村恭則、清水　展、中谷文美、中村昇平、平野美佐、松村圭一郎

研究会
2021年２月23日（火・祝）13：00〜18：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）
片岡　樹（京都大学）「全体趣旨」
清水　展（関西大学）「横須賀ネイティブの自文化＝自分化（？）グラフィーという企て」
片岡　樹（京都大学）「逆さ読みの日本論へ」
全体討論

成果
本年度は初年度ということもあり、２月23日に第一回のキックオフミーティングをハイブリッド形式で行った。同研究集会を通じ、メンバー間の問題意識の共有を行うことができたのは、次年度につながる成果ということができる。また当日の討論からは、海外フィールドを経由させた「自文化語り」や「民族誌の逆さ読み」が、海外フィールド経験者の視点からの日本論への切り口として一定の有効性があることが確認された。これらはいずれも、異文化のフィールドで日本との意外な共通点を発見することで、自文化に再び同一化を図るというベクトルによるアプローチである。それとは反対の極として、日本を異文化として発見し、異文化研究で培ったツールを適用するというアプローチもあり得るだろう。次年度以降は、この二つの極を念頭に、さらに討論を深めていく予定である。

「『描かれた動物』の人類学――動物×ヒトの生成変化に着目して」

人はなぜ「動物」に惹かれるのか？レヴィ＝ストロース（2001）が指摘するように、動物との直接的な関わりが希薄になった現代においても私たちはなぜ子供が生まれるとすぐ動物の絵本や玩具を与えるのか？これらの問いに生成変化としての「描かれた動物」が人と動物との「あいだ」の回路を開くとともにこれまでに知覚できなかったものを知覚させるものであるという可能性を検討することで迫るのが本研究の目的である。このためまず①動物をどのように知覚し、②何によって描写するのか、③なぜ描写するのか、④描写、あるいは描写された動物はどのような場で生成し、誰に必要とされるのかという４つの問いを具体的な事例を検討することによって、重なりや空白も含めた動的なものとして捉えなおす。さらにより深くこの問題に取り組むため、他者とともに「生成変化」する人類学の手法（インゴルド）によってドゥルーズ＆ガタリの提示した「動物との間に生じる生成変化によって新しい次元を開くもの」としての「動物描写」を検討する。具体的には描き手である人と、描かれる動物との間の動的な生成過程を再現し、「動物を／で／と／描く」という行為のなかで何が立ち現れるのかを身体経験や認知科学の知見を援用しながら明らかにすることでこれらの問いについて考察し新たな動物理解の地平を開拓することを目指す。

研究代表者　山口未花子
班員（館内）山中由里子
（館外）石倉敏明、大石侑香、小田　隆、COKER Caitlin、齋藤亜矢、管　啓次郎、菅原和孝、竹川大介、西澤真樹子、丹羽朋子、盛口　満、吉田ゆか子

研究会

2020年11月８日（日）10：00～18：00（国立民族学博物館　第３セミナー室　ウェブ会議併用）

特別展「先住民の宝」の見学（全員）

山口未花子（北海道大学）「趣旨説明――『描かれた動物』共同研究の目指すもの」

民博展示における「描かれた動物」の調査（全員）

各共同研究者のテーマ発表と研究会の展望についての全体討論（全員）

2021年３月９日（火）13：00～17：30（ウェブ会議）

山口未花子（北海道大学）「ドゥルーズ＆ガタリ著『千のプラトー』第十章における芸術・あいだ・動物と人類学」

番匠美玖（北海道大学）インガ・ボレイコ（北海道大学）、前田雄亮（北海道大学）、加賀田直子（北海道大学）、田中佑実（北海道大学）、ケイトリン・コーカー（北海道大学）「『千のプラトー』キーワード解説」

菅原和孝（京都大学名誉教授）「〈動物になること〉の触発――Ｄ坂の怪事件」

管 啓二郎（明治大学）「ドゥルーズ『と』ガタリの『と』とともに」

全体討論

次年度の計画についての打ち合わせ

成果

初年度である今年は、２回の共同研究会を実施した。第１回研究会では、趣旨説明とメンバーによる研究紹介を行い、今後の研究計画についての方針を定めた。

第２回研究会では、理論的支柱の一つとしてドゥルーズ＆ガタリの『千のプラトー』を読み、３つの点、1）今日の哲学や人類学における世界の見方の基盤となる“様々な存在とともに世界を作り続ける人間”という視点につながる脱領土化とリゾーム的なつながりの重要性、2）人間と人間以外の存在をつなぐ中間に動物がいるということ、3）動物との間の生成変化として芸術を取り上げることで具体的なイメージを共有することが可能になること、を確認した。また菅原は「人」や「動物」といったカテゴリの同一性を検討する必要を認めた上で、コミュニケーションの基盤を手放す危険な行為になりかねない点に留意する必要とともに、生成変化の生じる此性では未来における原因ではなく準＝原因となりうることを指摘した。これに続く討論ではテキストとの間を反復しながら研究会の議論を深めるという方向性が示された。

「月経をめぐる国際開発の影響の比較研究――ジェンダーおよび医療化の視点から」

月経への対処は、近年、国際開発の分野において女子の就学率の向上、ジェンダー平等、水・衛生環境の向上などの観点から重視されている。月経衛生対処（menstrual hygiene management）に関する政策が、各国で策定、実施されはじめている。また、紙使い捨てナプキンをはじめとした生理用品がグローバルな市場を通じて流通し、月経への対処に影響を及ぼしている。このように月経は、女性の身体に普遍的な現象として政治・経済の回路を通じて対処される。一方で、その捉えられ方や対処のされ方にはローカルな慣習がある。月経という生理現象を忌避する社会は世界各地に広くみられ、文化人類学においては、出産や死の不浄などともにケガレとして理論化されてきた。

本研究は、開発介入が世界各地の月経への対処や月経にまつわる文化に与える影響を、ジェンダーと月経の医療化という２つの視点から通文化比較を行うものである。月経への対処が国際開発の対象となったという同時代性から、月経をめぐる状況の通文化性と地域性を抽出することを目的とする。

研究代表者　新本万里子

班員（館内）丹羽典生、松尾瑞穂

（館外）秋保さやか、岡田千あき、小國和子、Karusigarira Ian、菅野美佐子、佐藤　峰、椎野若菜、杉田映理、波平恵美子、林　耕次、村上　薫

研究会

2020年11月21日（土）10：00～12：00（ウェブ会議）

新本万里子（広島大学）共同研究会の趣旨説明

出席者全員　自己紹介・共同研究に関する各自の関心の共有

2021年２月23日（火）10：00～12：30（ウェブ会議）

杉田映理（大阪大学）「生理ブーム？――月経をめぐる世界各地の新たな動きと開発支援」

波平恵美子（お茶の水女子大学）「月経におけるケガレ観（不浄性についての観念）と女性の生殖機能についての観念」

成果

初年度の2020年10月から2021年３月にかけて、２回の研究会を開催した。第１回は、代表者から研究会の趣旨を説明したほか、メンバー全員がこの研究会への関心を述べて、各自取り組む予定の課題を確認した。

第２回の研究会では、杉田が、月経衛生対処が開発アジェンダとなった経緯と月経をめぐる近年の産業界の動向を報告した。また波平が、月経のケガレに関わる文化人類学的研究の理論的展開を報告した。これら報告と全体討論を通じて、二つの報告を月経の可視化／不可視化という言葉でつなぐことができることを確認し、今後の議論のベースを作ることが出来た。

「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究――人類史的視点から」

環北太平洋沿岸地域（新旧両大陸の北太平洋沿岸地域）において先住民文化・社会の間に類似性や共通性が見られることは、100年以上前から知られていた。この類似性や共通性を解明するために、フランツ・ボアズ（Franz Boas）によるジェサップ北太平洋調査プロジェクト（1897年～1902年）など大小さまざまな調査・研究が試みられてきた。本研究の目的は、環北太平洋地域の先住民の諸言語・諸社会・諸文化の変化と現状、未来について、(1) 自律期、(2) 接触期、(3) 植民地期、(4) 国家による同化期、(5) 政治的自律化期、(6) 未来の６つの時期に分けて、(1) 歴史・考古学、(2) 言語学、(3) 文化人類学の視点から学際的に比較検証し、その異同の諸側面を総合的に解明するとともに、同地域の先住民社会の未来を構想することである。北太平洋の東西沿岸に分布する先住民社会の間にみられる文化的類似性と共通性をどのように考えるべきか、彼らの言語・社会・文化がどのように変化してきたか、現状はどのようであるか、そしてそれらは今後どのように変化していくか、を解明する。

研究代表者　岸上伸啓

班員（館内）齋藤玲子、島村一平

（館外）生田博子、大石侑香、大坂　拓、加藤博文、呉人　恵、近藤祉秋、関口由彦、高倉浩樹、高瀬克範、立川陽仁、野口泰弥、平澤　悠、堀　博文

研究会

2020年10月24日（土） 13：30～17：15（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

岸上伸啓（人間文化研究機構・国立民族学博物館）「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究――共同研究計画の提案を中心に」

全員「各自の研究紹介と研究計画の中での役割の検討」

2020年10月25日（日） 10：00～15：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）

齋藤玲子（国立民族学博物館）、岸上伸啓（人間文化研究機構・国立民族学博物館）「特別展「先住民の宝」におけるアイヌ展示と北西海岸先住民（カナダ）展示について」

齋藤玲子（国立民族学博物館）、岸上伸啓（人間文化研究機構・国立民族学博物館）「環北太平洋先住民関連フォーラム型情報ミュージアム（Data Base）の高度化について」

2020年12月５日（土） 13：00～17：00（北海道大学アイヌ・先住民研究センター／岸上伸啓（人間文化研究機構・国立民族学博物館）「趣旨説明」

高瀬克範（北海道大学）「千島アイヌの形成史に関する学説整理と研究動向」

平澤　悠（東亜大学）「北米移住仮説研究の動向とアラスカの位置付け」

全員　全体討論「環北太平洋の考古学の現状と課題」

2020年12月６日（日） 10：00～18：00（北海道大学アイヌ・先住民研究センター／国立アイヌ民族博物館　［ウェブ会議併用］）

高倉浩樹（東北大学）「環北太平洋民族誌にみられる狩猟採集社会の不平等化」

全員　全体討論

加藤博文（北海道大学）「国立アイヌ民族博物館における展示と研究」

2021年３月14日（日） 13：00～17：00（ウェブ会議）

趣旨および打ち合わせ

呉人　恵（富山大学）「北東アジア諸言語の系統と類型――北米との関係性を視野に」

堀　博文（静岡大学）「北米先住民諸言語の系統分類と歴史」
全体討論

成果

初年度は共同研究会を３回開催した。第１回共同研究会では、環北太平洋地域の先住民社会に関する文化人類学研究の研究史と成果を整理した。第２回共同研究会では、千島アイヌの形成史に関する学説整理と研究動向、旧大陸から北米への人類の移住に関する研究動向とアラスカの位置付け、環北太平洋地域の狩猟採集民社会における不平等の出現過程について検討を加えた。第３回共同研究会では、北米先住民諸言語および北東アジア先住民諸言語の系統分類の諸説と問題点、新旧大陸の言語間の関係などについて検討を加えた。これらの議論の結果、新旧両大陸の先住民諸文化の間にはサケや海獣に基づく生業活動、定住度の高さ、精神世界におけるワタリガラスの重要性などといった共通性や類似性が見られる一方、先住民諸言語の系統関係は、両大陸間のみならず、それぞれの地域内においても解明できていないことが判明した。先住民諸文化・諸言語間の類似性と差異の生成は、先住諸民族による類似した自然環境への適応過程、移動経路、交流や交易、戦争などの歴史的相互作用と複雑に絡み合っているため、それらを解明するためには考古学者や歴史学者、言語学者、文化人類学者、生物人類学者らが協働して学際的比較研究を行う必要があるという認識を共有するに至った。

「不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う――モノ、制度、身体のからみあい」

グローバル化がすすむ世界において、他者とのあいだはどのように媒介されるのか。本研究は、施設や建築物などのモノや制度と人間の身体がどのようにからみあい、そこでどのような調整がおこなわれているのかを、民族誌研究のアプローチから描き出す。たとえば移民や難民、老者や病者の身体を受け入れ／収容する制度や施設が創出されると、つくられた制度や施設は、人間の身体を介した相互行為に変更を迫り、周辺にいる人々や、そこにある別の制度や施設にも影響を与える。制度からはみ出そうとする身体があれば、さらなる制度の組み換えや新たな創出もおこる。こうして、目の前の他者との生身の身体を介したやりとりから、モノと制度と身体がおりなすセッティングの調整と再編がくりかえされることになる。ここでは身体性をともなう関係性を場所という視点からとらえていく。状況に応じて調整される場所のセッティングの先に、21世紀にあらわれつつある社会のあり方を見通そうとする。

研究代表者　森　明子
班員（館内）奈良雅史、松尾瑞穂、三尾　稔
（館外）猪瀬浩平、長坂　格、中村沙絵、難波美芸、浜田明範、古川不可知、松嶋　健

研究会

2020年11月14日（土）13：30～17：00（国立民族学博物館　第１演習室　ウェブ会議併用）
森　明子（国立民族学博物館）「共同研究の趣旨について」
全員「共同研究のテーマをめぐって」
2020年12月６日（日）13：30～17：00（ウェブ会議）
中村沙絵（京都大学）「コプルストン・ハウスから始まる物語――スリランカの老人施設にみる〈場所〉と異質なものたちがつくる世界」
全員　質疑応答
2021年１月30日（土）13：30～17：00（ウェブ会議）
猪瀬浩平（明治学院大学）「緊急事態宣言下でもやって来る人達――日本のグループ農園におけるモノ、制度、身体のからみあい」
全員　質疑応答
2021年２月20日（土）13：30～17：00（ウェブ会議）
松島　健（広島大学）「ケアの場所、場所のケア――イタリアにおける精神医療と精神保健」
全員　質疑応答

成果

初年度は、４回の研究会を開催した（初回はウェブ会議併用、それ以後はウェブ会議開催）。
第１回研究会では、本共同研究の目的および射程について、代表者（森　明子）が基調報告を行い、場所という

視座を共有して議論をスタートすることを提案した。次いで、共同研究会メンバー各々が、問題関心や研究主題について簡潔な報告を行い、相互批評のうえで総合討論を行った。第２回研究会では中村沙絵が、スリランカの老人施設について、場所、空間性、建築環境という視座から報告した。第３回研究会では、猪瀬浩平が、新型コロナウィルスがもたらすパンデミックの状況下の生のからまりについて、グループ農園という場所からとらえる報告を行った。第４回研究会では、松嶋健がイタリアの精神医療の脱施設化を、場所の履歴という視点から報告した。毎回の報告ののちに、生の諸側面のからまりやあらわれをどうとらえて記述するかについて、参加者全員が討論を行った。新型コロナウィルス対応のため、ほぼ毎月１回、１報告について全員で議論することを定型化して、初年度の研究会を運営した。

「戦争・帝国主義と食の変容：食と国家の関係を再考する」

現在の食の状況はきわめて複雑で激しい変化にさらされているが、そうした現状につながる重要な歴史的モメントの一つとして、戦争・帝国主義をあげることができる。

そもそも食は国力の基盤である。よって戦争・帝国主義は、国内の食に対してだけでなく、国や地域を越えて食を移動させ変容させる重要なモメントになりうる。本共同研究では、主として、帝国主義的な国家の拡大路線が強まった19世紀末から20世紀半ばの食の変化に着目し、戦争や帝国主義がそれぞれの国・地域の食にどんな変容をもたらし、現在の食のあり方にどう影響を与えているのかを、ヨーロッパとアジアの事例を中心に明らかにする。その変化には、国家だけでなく市民（階層・ジェンダー差等も考慮）、兵士、専門家、市場（闇も含む）、メディアなどの多様なレベルや立場・主体が関与している。ゆえに個々の事例をそれらに留意しながら比較検討することによって、より一般的な意味でも、食の変容メカニズムにかんする試論や論点を提示し、現代社会の食のあり方を再考する一助にしたい。

研究代表者　宇田川妙子
班員（館内）諸　昭喜、野林厚志
（館外）井坂理穂、石田　憲、小田なら、秦泉寺友紀、新田万里江、林　史樹、林淑美（太田美沙代）、藤原辰史、牧　みぎわ、劉　征宇

研究会
2020年11月14日（土） 13：30〜17：00（ウェブ会議）
宇田川妙子（国立民族学博物館）「『戦争と食』研究の趣旨説明」
全員・各自の研究構想
2020年11月28日（土） 10：00〜12：00（国立民族学博物館　第６セミナー室　ウェブ会議併用）
藤原辰史（京都大学）「第一次世界大戦期の飢餓体験とナチス／ドイツおよび帝国日本」
全体討議
2021年３月６日（土） 10：00〜12：00（国立民族学博物館　第２演習室　ウェブ会議併用）
劉　征宇（国立民族学博物館）「毛沢東時代の中国における戦争、統制経済と食生活――朝鮮戦争以降の天津都市部を事例に」

成果

１回目の研究会で、代表者による趣旨説明を行うとともに各メンバーが研究テーマ・対象を提示することによって、共同研究全体の問題意識の共有と戦争と食というテーマにかんして想定される論点について議論をおこなった。以降はメンバーの研究発表を２回開催し、ドイツと中国の事例にかんする議論を行った。前者は、世界大戦という規模も史的インパクトも大きな戦争について、しかも帝国ナチス・ドイツの側による食の統制や殖民等にかんする総括的な発表であり、食と戦争を一般的に考える上でのモデルの一つを提供するものとなった。後者は、打って変わって世界大戦後の冷戦期の中国に着目し、さらには都市部の生活をミクロな視点から叙述・分析した発表であり、戦争・帝国主義と食にかんする多様な事例の比較検討の必要性が浮き彫りになった。その一方で、食の生産や流通にかかわる具体的で詳細な視点の必要性（たとえば戦時における肥料などの輸出入など）、食の調理・消費にかかわる女性やジェンダーという視点の必要性、農学などの専門家や思想の影響、子どもの食への着目、戦争の記憶の影響など、共通して論じることのできる論点も具体的に出てきている。

「日本列島の鵜飼文化に関するＴ字型学際共同アプローチ――野生性と権力をめぐって」

本研究の目的は、日本列島の鵜飼文化に関わる新たな事例をＴ字型学際共同アプローチの方法論（後述）によって比較検討し、それらの事例を整理することで鵜飼文化の全体像を明らかにすることである。

ここでいうＴ字型学際共同アプローチとは、(1) 鵜飼に関わる埴輪造形や文献史料、絵画、俳句や短歌、美術、装束などの通時的な視点、(2) 各地の鵜飼に関わる民俗技術や知識、社会組織、物質文化などの共時的な視点、(3) ウ類（ウミウやカワウ）の生態、捕食される魚類の生態、鮎鮓の食品栄養に関わる自然科学的な視点から得られた成果を統合して分析する方法論である。これらの事例は代表者が鵜飼研究を続けるなかで確認したものであり、これまで統合的に議論されてこなかった。本研究ではこれら３つのアプローチをまとめて「Ｔ字型学際共同」とよぶ。

そのうえで、本研究では個別事例の比較検討および中国の鵜飼との対比を通して、日本列島の鵜飼文化の全体像と地域固有性を明らかにする。その際、本研究では野生性と権力を分析の切り口とする。それは、1300年以上の歴史をもつ日本の鵜飼においてこれまで野生のウ類がおもに利用されており、かつ鵜飼はときの権力者の庇護のもとで続けられてきた。こうした現象は中国の鵜飼においてみられない特徴だからである。

研究代表者　卯田宗平

班員（館外）井口恵一朗、石野律子、今石みぎわ、大塚清史、小川宏和、賀来孝代、筧　真理子、亀田佳代子、河合昌美、篠原　徹、瀬戸敦子、宅野幸徳、葉杖哲也、夫馬佳代子、堀　光代、松田敏幸、水野裕史、三戸信惠

研究会

2020年11月28日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館　大演習室　ウェブ会議併用）

卯田宗平（国立民族学博物館）「共同研究会『日本列島の鵜飼文化』で目指すもの」

共同研究メンバー全員による研究紹介と今後の予定

卯田宗平（国立民族学博物館）「比較対象としての中国の鵜飼の紹介およびディスカッション」

2021年２月27日（土）13：00～17：00（国立民族学博物館　大演習室　ウェブ会議併用）

卯田宗平（国立民族学博物館）「前回の研究会を踏まえて①」

特集：宇治川の鵜飼におけるウミウ産卵を問いなおす

沢木万理子（鵜匠、宇治市観光協会）「宇治川の鵜飼における鵜の人工ふ化について」

卯田宗平（国立民族学博物館）「ウミウの繁殖生態と鵜匠たちによる繁殖技術の収斂化――計５回の繁殖記録から考える」

亀田佳代子（滋賀県立琵琶湖博物館）「飼育環境下でのウミウ産卵に関する鳥類学からのコメント」

成果

2020年度は計２回の研究会を開催した。第１回目の研究会では代表者である卯田（民博）が日本列島の鵜飼文化に関わる問題意識と今後の研究方針を示した。具体的には、鵜飼に関わる造形や文献史料、絵画などを通時的な視点で捉えるアプローチ、各地の鵜飼に関わる民俗技術や知識、物質文化、観光化などを共時的な視点で捉えるアプローチ、ウ類の生態や捕食される魚類の行動特性などに関わる自然科学的なアプローチという三つのアプローチによって、日本の鵜飼文化を包括的に捉えていくことをメンバーのなかで共有した。第２回目の研究会では、「宇治川の鵜飼におけるウミウ産卵を問いなおす」と特集テーマとして、2014年５月にウミウが産卵した事例に関わる発表をおこなった。具体的には、ウミウの人工繁殖に当事者として関わった沢木万理子氏（鵜匠、宇治市観光協会）が当時の対応や繁殖技術を構築していく上での問題点、働きかけ、放ち鵜飼に向けた取り組みに関わる報告をした。それを踏まえて、卯田は過去５年間の繁殖作業の記録を手がかりに、飼育環境下におけるウミウの繁殖生態の変化を自然下のウミウとの対比から報告した。最後に、鳥類生態学が専門の亀田佳代子氏（滋賀県立琵琶湖博物館）が鳥類学の立場からのウミウ繁殖の要因に関わるコメントをした。この研究会を通して、日本の鵜飼史のなかで記録上初めてとなるウミウの人工繁殖と今後の課題をメンバー間で共有した。

「先住民と情報化する社会の関わり」

本研究の目的は、都市化・情報化が進行する現代社会の中で先住民の人々がどのように生活世界を構築しているかを比較研究の手法に基づいて明らかにすることである。世界各地の先住民社会で都市部への移住、もしくは伝統的生活圏の都市化が進行していることはよく知られている（青柳・松山『先住民と都市』青木書店、1999年）。しかし、近年、情報化社会の到来にともない、これまで論じられてきた「都市と先住民」の主題に加えて、「情報技術と

先住民」の関わりを考える必要が生じてきている。スマートフォン、SNSなどの通信技術が登場することで先住民の人々の生活はいかに変化したか。とりわけ伝統的生活圏と都市部の間で情報のやり取りが容易になったことは、どのような影響をもたらしているか。デジタル空間上で先住民自身による情報発信がなされるようになった一方で、先住民を含むマイノリティに対するヘイトスピーチが横行しているが、先住民の「デジタル主権」をどのように考えることが可能か。本研究はこれらの問いに貢献することを目指す。

研究代表者　近藤祉秋
班員（館内）伊藤敦規
　（館外）北原次郎太、栗田梨津子、土井冬樹、平野智佳子、額田有美、山越英嗣、渡辺浩平

研究会
2020年11月1日（日）13：00～17：00（国立民族学博物館　第6セミナー室　ウェブ会議併用）
　顔合わせ
　近藤祉秋（神戸大学）「趣旨説明」
　近藤祉秋（神戸大学）「デジタル民族誌の実践――社会的距離化時代の民族誌調査に向けて」
　平野智佳子（神戸大学）「オーストラリア中央砂漠の村――都市間を移動するアボリジニの携帯電話の使用方法」
　今後の研究活動に関する打ち合わせ
2021年1月23日（土）10：00～12：00（ウェブ会議）
　土井冬樹（神戸大学大学院）「デジタル化する集会――日本に移住したマオリによる文化・言語の学習機会」
　栗田梨津子（神奈川大学）「オーストラリア都市先住民の社会運動におけるSNSの活用――今後の研究に向けて」
2021年3月16日（火）10：00～12：00（ウェブ会議）
　額田有美（国立民族学博物館）「コロナ時代のコスタリカの先住民土地回復運動――リモートエスノグラフィーの実践に向けて」
　来年度の活動に向けての打ち合わせ

成果
　第1回目の研究会ではスマホやSNSの利用に関して、アボリジニとアラスカ先住民の事例報告がなされた。第2回の研究会では、マオリとアボリジニによるSNS利用に焦点が当てられ、先住民言語の再活性化や社会運動のための利用がなされていることが論じられた。第3回の研究会でも、コスタリカ先住民の事例からSNS利用が論じられ、SNSが土地回復運動で重要な役割を果たしていることが明らかになった。初年度の成果としては、先住民社会においてSNSが多岐にわたる目的で利用されているが、その中でも社会運動や抵抗運動との親和性が高いことが確認された。デジタル人類学の先行研究ではオンライン上での参与観察が盛んに論じられてきた（Horst & Miller 2012など）が、ネット接続が不安定な場合も少なくない先住民社会の研究においては文字情報による非同期型の調査方法を見直す必要性があることが示唆された。来年度はコロナ禍におけるデジタル人類学の方法論についてもより詳細に検討していく。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム
国際シンポジウム「東アジアの非営利組織をめぐる法・会計・文化――普遍性と個別性」
2020年8月2日　オンライン開催
代表者：出口正之

実施状況
　新型コロナウイルスの影響で直前まで実施が危ぶまれたが、オンラインによる開催に切り替えた。ところが直前になって、米国と中国との間でオンラインアプリに関する使用を巡って争点となり、直前に大幅にプログラムを見直し、二日間のプログラムを一日で実施せざるを得なくなった。当日は41名の参加があり、引き続きオンライン上での懇親会を実施した。内容面では、メルボルン大学の小川晃弘教授が「『政策の人類学』を展望する市民社会を分析レンズとして」と題する基調報告を行い、「政策の人類学」を、クリス・ショアとスーザン・ライトの二人が編集した*Anthropology of Policy: Critical Perspectives on Governance and Power*（Routledge 1997）にその起源をた

どりながら、数量分析の対抗軸として発展してきたナラティブ分析による質的な政策研究として、同教授が過去20年間にわたり進めてきた、市民社会研究から事例をひき、政策分析における民族誌的調査の重要性を主張した。また、本流の会計学者の尾上選哉・日本大学教授が、「企業会計の『特殊性』と『普遍性』」と題して、組織としては決して普遍性を有したものではない、特殊形態として企業から誕生した「会計学」が、果たして他の組織に対しても、「一般性」を持ちうるのか、という学問上きわめて重要な指摘を行った。さらに、外国人研究員の師穎新氏が、中国で導入されている付加価値税を、各仕入れ・販売ベースで証明している「インボイス」（証憑）に着目し、「インボイス」の操作による「虚偽取引」と、領収書での詐欺行為、さらにそれに伴う税収への影響の発表を行った。租税政策上、こうした文化的な作為は着目されてこなかったことであり、極めて新規性の強い発表があった。また、法学者の久保秀雄は、「コントロールと逸脱のダイナミクス」と題して、会計上の虚偽取引などの逸脱行為をどのようにコントロールするのかという点を、システム論を使って解明し、各パネリストと視聴者による斬新な議論が展開できた。なお、実施額はオンラインであり、謝金も予定していなかったことから、ゼロである。

成果

共同研究の成果発表シンポジウムであり、当該の共同研究については2021年１月に清水弘文堂から出口正之・藤井秀樹編『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』を出版予定。シンポジウムでの新規の内容については現在未定。本件については、*MINPAKU Anthropology Newsletter* で概略を紹介した上、本研究チームの WEB（https://i4cphil.com 現在作成中）に掲載予定。なお、録画があり、この取り扱いについては現在検討中である。

国際ワークショップ「グアテマラのマヤ民族衣装の現在」

開催中止

代表者：鈴木　紀

実施状況

2020年５月22日～５月25日の日程で本館にて開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行のため、グアテマラからシンポジウム参加者を招聘することが困難となったため、本プログラムの実施を中止した。

●国際研究集会への派遣

国際学会「International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC, 国際文化財保存学会）2020年大会」における研究発表

2020年11月２日～11月６日　オンライン開催

代表者：末森　薫

実施状況

国際文化財保存学会（IIC）は文化財の保存に関する権威のある国際学会であり、２年ごとに大会を開催している。2020年大会は、11月２～６日の日程で「歴史的建造物の保存における実践と挑戦（Practices and Challenges in Built Heritage Conservation）」をテーマとしエディンバラ（スコットランド）にて開催される予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、オンライン開催となった。オンライン開催となったため、エディンバラへ渡航はしていない。

申請者は、オンライン大会のセッション３において“Deterioration Caused by A New Support Layer Bonded with Epoxy Adhesive to the Mural Paintings at Fengguo Temple in Yixian, Liaoning, Chin Paintings at Fengguo Temple in Yixian, Liaoning, China”と題する研究発表を録画にておこなった。本発表は申請者が中国の共同研究者とともに、中国遼寧省義県にある奉国寺に描かれた壁画を対象として進めてきた研究の成果である。奉国寺は11世紀に築造された大型の木造建造物であり、内壁には大画面の壁画が残されている。1980年代におこなわれた部分解体を伴う修理事業によって、壁画の支持体にエポキシ樹脂およびグラスファイバーを用いた新たな層が設置されたが、それが原因となり新たな劣化現象が生じており、その調査・分析を進めてきた。本発表では、壁画の修復に使用された材料、建物・壁画の構造、そして環境に焦点を当て、これらの関係性より劣化要因を分析した結果を報告した。セッションの最後にはウェブ会議アプリを用いたライブ配信により、発表者およびモデレーターが参加するＱ＆Ａがおこなわれた。チャットに寄せられた質問に応えるとともに、モデレーターより提示された修復材料・技法に関するディスカッションに参加した。

成果

大会の発表をまとめたPreprintsの学会誌が発刊され、下記査読付論文として掲載された。“Deterioration Caused by a New Support Layer Bonded with Epoxy Adhesive to the Mural Paintings at Fengguo Temple in Yixian, Liaoning, China”, Lui C., K. Suemori, Q. Li, Y. He, F. Wang, H. Kang, *Current Practices and Challenges in Built Heritage Conservation, The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works*（*IIC*）*2020 Edinburgh Congress Preprints*（Studies in Conservation, Vol. 65, Supplement 1, 2020), pp.S187–S191.

館長リーダーシップ経費による事業・調査

みんぱく映画会の実施（特別展「先住民の宝」関連イベント）

実 施 日：2020年10月10日

代 表 者：園田直子

特別展「先住民の宝」の関連イベントとして、『斧は忘れても、木は覚えている』の映画会を開催した。

特別展では、マレーシアのオラン・アスリに関する展示コーナーがあり、ドキュメンタリー作品の上映を通じて、開発や森林伐採、土地権など、オラン・アスリが抱えている諸問題に関する理解を深めることにある。作品に描かれているオラン・アスリの惨状は、オラン・アスリ研究ばかりでなく、東南アジアに関する地域研究や先住民に関する人類学研究に対しても、研究上の貴重な資料を提供しており、作品の分析を通じて、さらなる研究の展開が期待できる。本作品の上映は、一般の方々にマレーシアやオラン・アスリのことを知っていただく機会を提供するだけでなく、マレーシアでは表面化されていない現象についても、映画というメディアを通じて、よりわかりやすい形で提供することができた。

なお、当日の参加者数は125名であった。

DIY 型画像データベースプラットフォームにおける情報登録支援システムの開発

実施期間：2020年10月 1 日～2021年 3 月31日

代 表 者：丸川雄三

「DIY 型画像データベースプラットフォーム」の実現に向けたシステム開発を実施し、利用者が手許のエクセルデータと画像ファイルを基に、人手を介さず独自に画像データベースを構築可能な「画像情報登録支援システム」を構築した。

システムの主な機能は次の 3 点である。すなわち、1) 画像ファイルの読み込みと変換、2) 登録用エクセルファイルの読み込み、3) データベース登録用セットの出力、である。これらの機能をウェブインタフェースを介して利用者が操作することにより、指定したネットワークドライブに配置した画像ファイルから、DiPLAS 型の画像データベースへ登録可能なデータセットを作成することが可能となった。またこれらの機能のほかに、画像ファイルから登録用エクセルファイルの雛形を出力する機能、画像ファイルのメタデータおよび登録情報から索引等を自動生成する機能、コンタクトシート pdf を自動生成する機能をあわせて備えている。DiPLAS の知見も活かし、データベースの利用を開始する時点で、登録した画像にある程度の整理がついている状態となるよう配慮した。その他、情報公開ポリシーにも対応可能な安全な運用を実施するための機能として、システムを操作するユーザを制限するための認証機能を実装した。2021年度は情報基盤事業として、引き続き本システムの実運用に向けた環境整備を実施する予定である。

創設50年史編纂事業

実施期間：2020年 9 月 1 日～2021年 3 月31日

代 表 者：新免光比呂

当該年度においては、2024年の「創設50周年史」刊行に向けての準備として、「創設10周年史」、「創設30周年史」、「年報」、「民博通信」、「中期計画報告書」、一般の社史などを熟覧すると同時に民博 HP 上のデータを精査した。その成果として、「創設50周年史」編集に備えて執筆対象となる事項をエクセルでリスト化し、今後の「創設50周年史」編集部会による編集作業の基礎とすることができた。

研究公演「阪神虎舞みんぱく公演」

実 施 日：2021年３月６日

代 表 者：日髙真吾

2018年11月に神戸で発足した阪神虎舞は、東日本大震災被災地の芸能を他の地域に広め、災害の記憶の風化を食い止めることを一つの目的として結成された。指導に当たったのは、特別展「復興を支える地域の文化――東日本大震災から10年」に展示協力をおこなっている岩手県大槌町の城山虎舞である。また、城山虎舞の神戸への移植を考え、プロデュースしたのは、東日本大震災後に民博内に設置された大規模災害復興支援委員会の協力者である橋本裕之氏（元追手門学院大学教授）である。

本公演では、阪神虎舞を実演するとともに、東日本大震災から10年の経過のなかで、東北と関西を結びつけた阪神虎舞結成の物語を紹介し、災害の記憶への向き合い方について参加者とともに考える場を設けた。ここでは、阪神虎舞のプロデューサーの橋本裕之氏と中川真氏（大阪市立大学）のほか、虎舞の指導をおこなった城山虎舞の菊池忠彦氏、金﨑亘氏と釜石市地域で郷土芸能の復興支援を主体的におこなっている笹山政幸氏を招へいし、議論を行い、有意義なディスカッションを展開することができた。本来は、前庭で一般公開の予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大によって緊急事態宣言が出され、やむを得ず、オンライン公開となった。ただし、すでに再生回数は1000回を超えており、社会への情報発信としては一定の効果を上げたと考えている。

創設50周年に関わる時代的証言のインタビュー映像記録

実施期間：2020年９月24日～2021年３月31日

代 表 者：飯田　卓

2021年１月22日に吉田憲司館長が聞き手となり、松原正毅名誉教授のインタビュー映像を収録し、２月22日には、野林厚志教授が聞き手となり、石毛直道名誉教授のインタビュー映像を収録した。

いずれのインタビュー映像も、民博館内のセミナー室などでおこなった。映像収録中は、感染症に配慮し、部屋への立ち入りを制限するとともに、話者のあいだにはアクリル板の仕切りを立てるなどの措置を講じた。記録映像の利用許諾は、民博がビデオテーク用映像の利用許諾を取るための書式を用いて、収録直後に取りつけた。収録された映像素材は専門業者によって編集された。

民博研究懇談会

第301回　2020年10月28日

諸　昭喜（チェソヒ）「産後の民俗病に関する人類学的研究――韓国のサヌプンを中心に」

第302回　2020年12月９日

岡田恵美 「共に歌う山の民ナガ――インド北東部ナガランド州の音楽文化にみる特殊性」

第303回　2021年１月14日

金　悠進 「異国趣味を超えて――“インドネシア（らしい）音楽”とは何か」

第304回　2021年２月４日

上畑　史 「ポピュラー音楽と民族的アイデンティティ――セルビアのターボフォークを例に」

2-2　外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2020年度科学研究費補助金　採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度
新規	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化B）	人類学における芸術研究の刷新：イメージ人類学の創成に向けた国際共同研究基盤の強化	吉田憲司	2020-2024
	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化B）	チベットの宗教基層におけるモノと聖性の動態に関する国際共同調査研究	長野泰彦	2020-2023
	基盤研究（A）一般	社会的記憶の観点からみたアンデス文明史の再構築	關　雄二	2020-2023
	基盤研究（B）一般	動物保護時代における文化システムとしての鵜飼の全面解明と「最適継承ルート」の共創	卯田宗平	2020-2024
	基盤研究（B）一般	装飾文化からみたアフリカ史の再構築に関する研究	池谷和信	2020-2022
	基盤研究（C）一般	20世紀前半ペルシア湾奴隷制に関する歴史民族誌的研究	鈴木英明	2020-2024
	基盤研究（C）一般	民族誌と統計解析の手法による博物館職員の働きがいと職業意欲の解明	太田心平	2020-2023
	基盤研究（C）一般	EU 農政下における家族制農業生産についての民族誌的研究	杉本　敦	2020-2022
	基盤研究（C）一般	ケアから見たベルリンのネイバーフッドに関する民族誌的研究	森　明子	2020-2023
	基盤研究（C）一般	「民族芸術」の生成過程——中国雲南省麗江におけるトンパ教文化の資源化と観光	高　茜	2020-2022
	基盤研究（C）一般	南アジアのポリフォニー民謡に関する音楽民族学研究：インド・マニプル州ナガを中心に	岡田恵美	2020-2023
	若手研究	近世近代移行期における教団未満の宗教者と新宗教をめぐる史的研究	石原　和	2020-2023
	若手研究	現代アンデスにおける寄進と宗教性に関する研究——奉納品と教会記録の分析を中心に	八木百合子	2020-2023
	若手研究	ヒマラヤ山間部における車道建設の人類学的研究	古川不可知	2020-2023
	若手研究	チリのマプーチェ先住民組織における民族医療に関する文化人類学的研究	工藤由美	2020-2023
	若手研究	日常を美学化する詩的オラリティの人類学——タイ文化圏の声と文字の文化の比較研究	伊藤　悟	2020-2023
	若手研究	医療と制度：南インド社会にとっての公的伝統医療と伝統的治療師の関係性	松岡佐知	2020-2022
	若手研究	中等教育脱落者の少年少女と社会参加——インド・スラムにおける仲介者の働きに着目して	茶谷智之	2020-2023
	挑戦的研究（開拓）	東南アジアへ拡散したオーストロネシア語族の土器・埋葬文化に関する学際的研究	小野林太郎	2020-2022
	研究活動スタート支援	インフラの時間性に関する人類学的研究：ラオスの流れ橋の事例から	難波美芸	2020-2021
	研究成果公開促進費学術図書	仏教モダニズムの遺産：アナガーリカ・ダルマパーラとナショナリズム	杉本良男	2020
	研究成果公開促進費データベース	服装・身装文化デジタルアーカイブ	高橋晴子	2020
	特別研究員奨励費	ミクロネシア——南琉球の比較分析による初期人類の島嶼適応戦略の解明	山極海嗣	2020-2022

新規	特別研究員奨励費	ネパールにおける近代医療の市場化 ――医療アクセス・薬剤・身体経験	中村友香	2020-2022
	特別研究員奨励費	災害遺構を巡る住民の語りをもとにした集合的記憶形成過程の分析	坂口奈央	2020-2022
	特別研究員奨励費	第二次世界大戦後のケニアにおける越境性動物疾病対策と国家統治の変容	楠　和樹	2020-2022
	特別研究員奨励費	ネワール低カースト女性の儀礼実践とその変容に関する宗教人類学的研究	工藤さくら	2020-2022
継続	新学術領域研究 （研究領域提案型）	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	野林厚志	2016-2020
	新学術領域研究 （研究領域提案型）	日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて	林　由華	2019-2020
	新学術領域研究 『学術研究支援基盤形成』	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化	吉田憲司	2016-2021
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化）	移民の身体ポリティクス： インド舞踊のグローバル化とエージェンシー	竹村嘉晃	2017-2020
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化B）	時空間を融合する： GISと数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ	菊澤律子	2018-2023
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化B）	オセアニアの人類移住と島嶼間ネットワークに関わる考古学的研究	小野林太郎	2018-2021
	国際共同研究加速基金 （国際共同研究強化A）	遺伝子化時代の社会集団のカテゴリー化と差異化 ――インドにおける血と遺伝子を中心に	松尾瑞穂	2018-2021
	基盤研究（A）一般	モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築	小長谷有紀	2017-2021
	基盤研究（A）一般	超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築	山中由里子	2018-2022
	基盤研究（A）一般	大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育	林　勲男	2018-2021
	基盤研究（A）一般	北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究	岸上伸啓	2019-2023
	基盤研究（A）海外	モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究	島村一平	2016-2020
	基盤研究（B）特設	中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化	西尾哲夫	2016-2020
	基盤研究（B）一般	シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究	西尾哲夫	2017-2021
	基盤研究（B）海外	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証	マシウス ピーター	2017-2020
	基盤研究（B）一般	教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存	日髙真吾	2018-2020
	基盤研究（B）一般	セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発	園田直子	2018-2020
	基盤研究（B）一般	文化遺産の「社会的ふるまい」に関する応用人類学的研究：東部アフリカを事例に	飯田　卓	2019-2021
	基盤研究（B）一般	バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究	上羽陽子	2019-2023
	基盤研究（B）一般	再現模写・仮想空間構築による敦煌莫高窟千仏図が有する規則的描写の複合的評価	末森　薫	2019-2021
	基盤研究（B）一般	シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する考古学的研究	寺村裕史	2019-2022
	基盤研究（B）一般	紛争後社会のレジリエンス：オセアニア少数民族の社会関係資本と移民ネットワーク分析	丹羽典生	2019-2022
	基盤研究（C）一般	カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究	藤本透子	2016-2020

継続	基盤研究（C）一般	触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究	廣瀬浩二郎	2018-2020
	基盤研究（C）一般	『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相	中道静香	2018-2022
	基盤研究（C）一般	アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究	川瀬　慈	2018-2021
	基盤研究（C）一般	島嶼社会における芸能伝承の課題 ――対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ	福岡正太	2018-2020
	基盤研究（C）一般	ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究	平井京之介	2018-2021
	基盤研究（C）一般	米国での認知症高齢者を師とする人生語り・記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開	鈴木七美	2018-2021
	基盤研究（C）一般	未発表原稿分析による J.-C. マルドリュスの執筆過程の解明	岡本尚子	2019-2023
	基盤研究（C）一般	中国――南太平洋島嶼国関係の変化と「オセアニアン・チャイニーズ」像の表出	河合洋尚	2019-2022
	基盤研究（C）一般	日本手話、台湾手話、韓国手話における語と意味の歴史変化の解明	相良啓子	2019-2022
	基盤研究（C）一般	インド・オディシャーにおける親密圏の変容： 恋愛・婚姻・家族をめぐる情動と経験	常田夕美子	2019-2021
	基盤研究（C）一般	世界遺産バンチェン遺跡の遺物の古美術品化とその価値づけをめぐる文化人類学的研究	中村真里絵	2019-2022
	基盤研究（C）一般	インド西部の地方都市における宗教実践とローカリティ形成に関する人類学的研究	三尾　稔	2019-2022
	基盤研究（C）一般	無形文化遺産の継承・変容と自然災害による影響の動態的把握：バヌアツ北部事例研究	野嶋洋子	2018-2020
	若手研究（A）	チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究	鈴木博之	2017-2020
	若手研究（B）	社会をつくる芸術： 「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究	登　久希子	2016-2020
	若手研究（B）	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	相島葉月	2017-2020
	若手研究	現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究	黒田賢治	2018-2020
	若手研究	アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究	彭　宇潔	2018-2020
	若手研究	近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷 ――伊勢大神楽と韓国農楽を中心に	神野知恵	2018-2021
	若手研究	肉食性動物のドメスティケーション： 毛皮産業近代化における人と動物の関係の変化	大石侑香	2019-2022
	若手研究	レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかんする人類学的研究	早川真悠	2019-2021
	若手研究	宗教と移動をめぐる人類学的研究： 現代中国の越境的ムスリム・ネットワーク	奈良雅史	2019-2022
	挑戦的研究（開拓）	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	出口正之	2017-2021
	挑戦的研究（萌芽）	新手話学の構成素の実証的検証研究	神田和幸	2018-2020
	挑戦的研究（萌芽）	日本手話言語の変質に関する研究	川口　聖	2018-2020
	研究活動スタート支援	アオウミガメを例にした稀少動物に対する人為空間の構造的理解に向けての比較研究	高木　仁	2019-2020
	研究活動スタート支援	社会変化と民俗特有の病いの変容： 韓国と台湾の産後の病いに対する比較研究	諸　昭喜	2019-2020

継続	研究成果公開促進費 データベース	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2018-2022
	特別研究員奨励費	琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明	林　由華	2017-2020
	特別研究員奨励費	高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割： 南インドの事例から	松岡佐知	2018-2020
	特別研究員奨励費	ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究：コスタリカを中心に	額田有美	2019-2021
	特別研究員奨励費	アフリカ内水面における「よそ者」に着目した持続的水産資源管理構築に関する研究	稲井啓之	2019-2021
	特別研究員奨励費	東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明	崎田誠志郎	2019-2021
延長	基盤研究（C）	生理用品の受容によるケガレ観の変容に関する文化人類学的研究	新本万里子	2017-2020
	基盤研究（C）	農の「EU 化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究	杉本　敦	2017-2020
	若手研究（B）	三線が引き出す社会関係、価値、感情 ――大衆楽器が人びとに与える効果の研究	栗山新也	2017-2020
	若手研究（B）	宮古語諸方言の言語記録のための基礎的研究とデータ収集	林　由華	2016-2020
	若手研究（B）	アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究 ――聖像の所有と継承に注目して	八木百合子	2017-2020
	挑戦的研究（萌芽）	被災後社会の総体的研究：被災後をより良く生きるための行動指針の開発	竹沢尚一郎	2018-2020
延長	研究活動スタート支援	食の認識体系とその変容――タイにおける MSG（グルタミン酸ナトリウム）の消費と拒絶	大澤由実	2019-2020
繰越	基盤研究（A）	アンデスにおける植民地的近代 ――副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤　晃	2015-2020
	基盤研究（A）	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	吉田憲司	2015-2020
	基盤研究（A）	モンゴル仏教のグローカル実践に関する学際・国際的地域研究	島村一平	2016-2020
	基盤研究（A）	モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築	小長谷有紀	2017-2021
	基盤研究（B）	バスケタリーをめぐる植物生態と民族技術の文化人類学的研究	上羽陽子	2019-2023
	基盤研究（B）	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証	マシウス ピーター	2017-2020
	基盤研究（B）	セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発	園田直子	2018-2020
	挑戦的研究（開拓）	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	出口正之	2017-2021
	特別研究員奨励費	ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究：コスタリカを中心に	額田有美	2019-2021
	特別研究員奨励費	東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明	崎田誠志郎	2019-2021

受託事業

日本財団助成手話言語学研究部門プロジェクト

委 託 者：公益財団法人　日本財団
担当教員：菊澤律子
実施期間：2020年４月１日～2021年３月31日

目的と概要

みんぱくの大学共同研究機関という性質をいかし、手話言語学研究の推進とアウトリーチ、学術手話通訳者の育成を二本の柱として、館内外の専門家と協力しながら研究事業を進める。国際研究集会の開催等を通じて、手話言語と音声言語を通モード的にとらえる視点からの研究を推進する基盤を提供すると同時に、言語学の基礎概念や海外の研究動向に触れる機会を国内の研究者や手話通訳者、一般社会に提供する。さらに、そのような場での参加者間のコミュニケーションがより効果的に進められるよう、学術手話通訳者の育成に取り組むと同時に、将来、学術界における通訳ニーズへの対応に結びつけるための基盤づくりに取り組む。

手話言語学部門の活動

国際シンポジウム「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2020／SSLL2020年」（2020年９月25日～10月４日）を開催し、手話言語学の最新動向に関する講演をおこない、議論の場を提供した。合わせて、国内向けに「手話言語学基礎講座」をおこなった。いずれも開催前一週間のオンデマンド配信およびオンタイムでのリモート開催の併用とした。

また、将来の学術界における通訳ニーズに対応するための基盤づくりとして、大阪大学全学教育「手話の世界と世界の手話言語☆入門」2020年度（後期開講）への講師派遣を行い、手話言語学の授業及び講演を実施した。講義の形態は、講師により、オンデマンドもしくはオンタイムのリモートとした。

学術手話通訳研修事業においては、学術手話通訳の習得・レベルアップを目的とする「国立民族学博物館学術手話通訳研修事業」（2020年４月～2021年３月）を実施した。

また、昨年度国立民族学博物館と大阪府が締結した協定に基づき、以下の５講座を実施した。

研修名	開催日数	場所
大阪府登録手話通訳者現任研修	12	大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
大阪府手話通訳者養成講座現任研修（ワークショップ）	4	大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
Late signer 講座	3	アットビジネスセンター大阪梅田
若手手話通訳者ブラッシュアップ講座	8	大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
若手手話通訳者養成トライアル講座	8	大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター

大阪府手話言語条例に基づく手話通訳者養成関連事業

委 託 者：大阪府
担当教員：飯泉菜穂子
実施期間：2020年８月６日～2021年３月31日

目的と概要

大阪府手話言語条例の趣旨に基づき国立民族学博物館と大阪府が協業体制をとり、以下の２点を含めた事業を実施することによって大阪府における質の高い手話通訳者養成を実現する。(1) 国立民族学博物館手話言語学研究部門（みんぱく手話部門）学術手話通訳研修事業が日本財団の助成を得て展開している諸講座を大阪府登録手話通訳者およびその指導者（養成講座講師）の現任研修講座として活用する。あるいは、大阪府登録手話通訳者およびそ

の指導者（養成講座講師）の現任研修講座をみんぱく手話部門学術手話通訳研修事業の一環として実施する。(2)若手手話通訳者の養成を目指した講座を実施する。

実施状況

新型コロナウィルス感染症拡大防止のためみんぱく手話部門が展開している諸講座を全て中止としたため、上記(1)相当事業として以下の３講座を少人数グループ・対面で実施した。

① 大阪府登録手話通訳者現任研修（６グループ×３講座：全18講座）
② 大阪府手話通訳者養成講習会講師現任研修（通訳実技指導基礎ワークショップ２グループ×２講座：全４講座）
③ NPO法人「こめっこ」スタッフ研修会（夏期集中講座として３講座）

また、上記(2)該当講座として、以下の２講座を少人数グループ・対面で実施した。

④ 若手手話通訳者ブラッシュアップ講座（大阪府登録手話通訳者のうちで手話通訳士資格を有する若手対象、８講座）
⑤ 若手手話通訳者養成トライアル講座（NPO法人「こめっこ」聴者スタッフで現に手話通訳を行っているあるいは手話通訳を目指す若手対象：８講座）

各実施事業（講座）の詳細（期日、回数、場所、内容、受講者数）は以下の通りである。

① 大阪府登録手話通訳者現任研修

日時：2020年９月１日、９月４日、９月８日、９月11日、９月15日、９月18日、９月23日、９月25日、９月30日、10月２日、10月14日、10月16日
回数・受講者数：各グループ３回ずつ、５名×６グループ計30名
場所：大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター、アットビジネスセンター大阪梅田
内容：聞き取り通訳、読み取り通訳技術検証（ワークショップと個別検証）

② 大阪府手話通訳者養成講習会講師現任研修

期日：2020年12月18日、12月21日、2021年１月８日、１月18日
回数・受講者数：各グループ２回ずつ、７名×２グループ計14名
場所：大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
内容：聞き取り通訳技術指導（検証方法）についてのワークショップと講義

③ Late signer講座

期日：2020年８月27日～29日
回数：３講座（１日１講座）
受講者数：８名（NPO法人「こめっこ」スタッフ）
場所：アットビジネスセンター大阪梅田
内容：手話言語学（講義）、身体表現論（ワークショップ）、学習者の手話習得（講義）

④ 若手手話通訳者ブラッシュアップ講座

期日：2020年10月２日、10月14日、10月16日、10月28日、10月30日、11月11日、11月13日、11月25日
回数：８回
受講者数：５名
場所：大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
内容：聞き取り通訳技術検証、読み取り通訳技術検証、通訳事前準備ワークショップ、模擬講演会読み取り通訳技術検証、手話言語学（講義）、手話通訳論（講義）

⑤ 若手手話通訳者養成トライアル講座

期日：2020年８月７日、８月12日、８月19日、８月21日、９月２日、９月４日、９月16日、９月18日
回数：８回
受講者数：６名

場所：大阪府立福祉情報コミュニケーションセンター
内容：聞き取り通訳技術検証、読み取り通訳技術検証、通訳事前準備ワークショップ、模擬講演会読み取り通訳技術検証、手話言語学（講義）、手話通訳論（講義）

講師
- 庄崎隆志氏（office 風の器主宰）：
  講座③：「身体表現論」
- 前川和美氏（関西学院大学手話言語研究センター）：
  講座④⑤：聞き取り通訳技術検証
  講座③④⑤：手話言語学（講義）
- 飯泉菜穂子（国立民族学博物館日本財団助成手話言語学研究部門）：
  全事業コーディネート
  講座①②：全講座
  講座③：学習者の手話習得（講義）
  講座④⑤：手話通訳論（講義）、聞き取りおよび読み取り通訳技術検証

その他（資料作成・配付）
前ページの実施状況(1)のうち大阪府手話通訳者養成講習会講師現任研修の「講義」に該当する内容として『みんぱくで手話言語学を学ぼう！2019』で実施した11講座の配布資料に解説文（ノート）を付与したものを受講者数分プリントして提供した。

民間などの研究助成金などによる研究活動

- 寄附金
  關雄二教授研究助成金（公益財団法人平和中島財団　2020（令和2）年度国際学術共同研究助成）
  ―――――――――――――――――――――――――――――――――――― 關雄二
  岡田恵美准教授研究助成金（公益財団法人平和中島財団　2020（令和2）年度国際学術共同研究助成）
  ―――――――――――――――――――――――――――――――――――― 岡田恵美
  順益台湾原住民博物館研究賛助金
  ―――――――――――――――――――――――――――――――――――― 順益台湾原住民博物館

2-3　文化資源関連事業・情報関連事業

文化資源関連事業

文化資源に関する主な開発研究や事業は、文化資源関連事業として運営される。そのねらいは、目的、計画、経費、責任を明確にし、それぞれの成果を的確に評価して、さらなるプロジェクトの発展を図ることにある。文化資源関連事業は、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」「情報管理施設の基盤業務」からなり、文化資源運営会議が毎年募集し、選定する。

また、「文化資源プロジェクト」「文化資源計画事業」は館内外の研究者の運営のもとで遂行されるが、情報管理施設の支援・協力を受けて、効率的かつ機動的に推進されている。

2020年度の文化資源関連事業の概要は以下のとおりである。

1．運営体制

文化資源関連事業

文化資源関連事業について、「文化資源プロジェクト」、「文化資源計画事業」、「情報管理施設の基盤業務」の３種類のカテゴリーによって実施した。また、文化資源共同研究員の制度を運用し、共同利用体制を推進した。さらに外部有識者による意見をプロジェクトの審査に反映させた。

2．文化資源プロジェクト

文化資源プロジェクト（以下「プロジェクト」）は、本館あるいは大学等関連機関が所有する学術資源の体系化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、本館専任教員の提案に基づき、期間として実施する研究プロジェクトである。

プロジェクトは、４つの分野（調査・収集、資料管理、展示、博物館社会連携）に関わる研究開発、または研究成果の前記４分野への展開を目的とするもので、その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元ができるものであることを前提とする。

１）調査・収集分野

該当するプロジェクトなし。

２）資料管理分野

該当するプロジェクトなし。

３）展示分野

特別展「先住民の宝」

提案者：信田敏宏

世界各地の先住民が大切にしている「宝」をキーワードに、写真や動画、絵画や漫画などのメディアも活用しながら、それぞれの地域の先住民の暮らしや現状を紹介した。「宝」には、狩猟具、装身具、儀礼具、その他の生活用具などの具体物だけではなく、伝統的な生活、森や海などの自然環境、言語、信仰、芸能なども含まれる。先住民運動や文化復興運動などが隆盛し、民族アイデンティティが活性化している状況にも配慮しながら、展示全体のストーリーを構成した。

特別展「ユニバーサル・ミュージアム――さわる！“触”の大博覧会」

提案者：廣瀬浩二郎

2021年秋の特別展実施に向けて準備を進めた。具体的には以下の３点について取り組んだ。

① 協力アーティストを確定し、各自の出展作品の数、内容に関して打ち合わせを行なった。

② 図録の目次案を固め、執筆予定者に原稿依頼状を送付した。

③ 展示場全体のレイアウトについて展示デザイナーと議論を重ね、設計図面を完成させた。

特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」

提案者：日髙真吾

未曽有の被害をもたらした東日本大震災。2021年はこの震災から10年目を迎える。東日本大震災では、復興過程において、被災地の地域文化の果たす役割が大きな注目を集めた。本展示では、東日本大震災からの10年の復興過程のなかでの地域文化の動向を紹介し、ミュージアムの視点から地域文化の防災・減災を考えるものであり、特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」として、３月４日に開幕した。

特別展「*Homō loquēns*『しゃべるヒト』――ことばの不思議を科学する」の準備

提案者：菊澤律子

言語に関する展示会を、言語学の諸分野および言語に関連する他の分野の共同の研究成果公開の場として、2022年秋に民博の特別展示場において開催するための準備を進めた。展示の実施に向けて、会期変更に伴うスケジュールおよび予算の見直し、コンテンツの内容提供の依頼、具体的なコンテンツの大枠の決定および平面図概要の確定、展示関連出版物の内容の見直しなどを行った。

特別展「邂逅する写真たち――モンゴルの100年前と今」

提案者：島村一平

およそ100年前、多くの探検家たちが中央アジアを目指し、モンゴルに到達した。探検家たちは多くの写真を残し現在に伝えている。一方、研究者はもちろん現代のモンゴルの写真家たちも自らの社会を見つめ、写真で表現するようになった。100年前の欧米の探検家たちが残した「辺境」としてのモンゴルに対するまなざしと現代の研究者のまなざし。そして現代モンゴル人の自らの社会に対するまなざし。本展示は、こうした写真をめぐ

る100年の時空を越えた邂逅をテーマに展示するものである。以上のような内容の展示を企画するための準備を行った。

梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」

提案者：飯田　卓

2019年４月に採択された文化資源プロジェクト「企画展「梅棹忠夫生誕100年」（仮称）準備」を受けて、標記プロジェクト名に示した展示名で企画展を開催した。当初、会期は2020年４月23日から６月23日までの予定だったが、新型コロナウィルス感染症の流行第２波のために延期され、同年９月３日から10月20日に変更された。また、開幕後、この企画展をもとにした内容の展示を京都大学総合博物館に巡回させることを予定していたところ、先方の会期が延期されたため、民博では最終的に12月１日まで会期を延長して開催した。

2021年度企画展「躍動するインド世界の布」

提案者：上羽陽子

南アジア社会における布（着衣や儀礼用布など）の使途の多様性や、布が人や神に作用する機能などに注目した企画展を2021年11月４日～2022年２月15日（予定）に国立民族学博物館本館・企画展示場にて実施するための準備をおこなった。

巡回展「驚異と怪異――モンスターたちは告げる」

提案者：山中由里子

ヨーロッパや中東においては、犬頭人、一角獣といった不可思議ではあるが実在するかもしれない「驚異」は、神の偉大な力を示すものととらえられ、自然に関する知識の一部として伝えられた。また、東アジアにおいては、流星や異形の生き物の誕生など、通常とは異なる現象は、天や神仏からの警告である「怪異」としてとらえられ、歴史書のなかに記録された。本展では、国立民族学博物館所蔵の民族資料を中心に、人魚、竜、怪鳥、一角獣など、さまざまな世界の想像上の生き物について紹介するとともに、警告・凶兆（モンストルム）を語源とする怪物（モンスター）の文化史的な意味について考えた。

巡回展「子ども／おもちゃの博覧会」

提案者：笹原亮二

2019年３～５月に本館で開催した特別展「子ども／おもちゃの博覧会」を、島根県立古代出雲歴史博物館（島根県出雲市）において、巡回展として開催するための準備を行った。展示は、大人とは異なる存在としての近代日本における「子ども」の誕生を、子どもに関する玩具を始めとした様々な生活用品などのモノの展示を通して明らかにすることを目的とする。近代以降に商品化された子どもの生活に関する多種多様なモノは、現在、民博所蔵のビッグバン旧蔵資料を始め、各地の博物館・資料館や旧家に大規模コレクションとして残されている。展示では、これらの資料をとおして、近代以降、質量ともに充実する子どもに関するモノと、子どもの社会やそれを取り巻く社会全体との関係を検証し、モノに映しだされたその時代の生活意識や社会意識を読み解くことで、近代日本の子ども観の形成過程を実証的に提示する。本展はこれまでの文献や絵画資料などを中心とした子ども像の探求とは異なる視点から、近代日本の子ども観の形成過程を広く一般に展示公開するものである。

巡回展「ビーズ アイヌモシリから世界へ」

提案者：池谷和信

本計画では、民博所蔵の標本資料を中心に活用して、世界における多様な素材で作られたビーズや社会的役割を持つビーズを北海道の国立アイヌ民族博物館にて展示する。そして、これらをとおして、私たち人類ホモ・サピエンスの文化の特質を理解する機会にする。つまり今回の展示は、特定の地域の文化に焦点を当てたものではなく、地球上に普遍的にみられるビーズというものをとおして、「人類とは何か」という人類学の基本課題を正面から追求するものである。

共催展「佐々木高明のみた焼き畑――五木村から世界へ」

提案者：池谷和信

本館の元館長・佐々木高明は、焼畑研究の第一人者として知られている。これまで本館では、佐々木の撮影し

た写真を整理してデータベースとして公開してきた。同時に、佐々木の研究の出発点となった熊本県五木村にて氏の撮影した写真を紹介することから、現地の方々との研究交流会を進めてきた。そこで、本展示では、国立民族学博物館・五木村ヒストリアテラス五木谷との共同開催において（2020年10月３日～12月13日）、氏の撮影した五木村での焼畑の写真や道具を中心にして国内外での焼畑文化を紹介することが目的であった。同時に本展示は、五木村の事例から日本や世界の食と農の未来のあり方を考える試みでもあった。

共催展「梅棹忠夫生誕100年記念　知的生産のフロンティア」

提案者：飯田　卓

国立民族学博物館で2020年秋に実施した企画展をもとにした展示を京都大学において開催する。提案時には展示名や実施形態に不明な点があったが、最終的には京都大学総合博物館において2021年１月13日から３月14日まで、特別展「梅棹忠夫生誕100年記念――知的生産のフロンティア」という展示名のもとに開催された。新型コロナウィルス感染症の対策のため、会期の変更や入場制限などがおこなわれたものの、約1,300名の入場者を得て閉幕した。

４）博物館社会連携分野

知的障害者の博物館活用に関する実践的研究

提案者：信田敏宏

知的障害者を対象とした試行的ワークショップ「みんぱくSama-Sama塾」を開催した。知的障害者にとっても分かりやすく、楽しめる博物館の活用モデルを目指し、知的障害者が博物館を活用する際に必要とされる支援や改善点などを検討しながら実施した。

博物館社会連携事業強化プロジェクト

提案者：吉岡　乾

本館の博物館社会連携事業を、既存プログラムの改良と新プログラムの研究開発により強化することを目的に、下記６つの事業の実用化と運用、および新たな事業の研究開発を行った。

1. 2019年度に企画・実施したアウトリーチプログラムの検証と実用化
2. ワークシートの改良と種類の増加
3. 近隣公共施設との連携事業の実施と実用化
4. 2019年度に作成した子どもパンフレットの試行と校正
5. 高校、大学生に対する教育プログラムの企画立案、実施
6. 館内ワークショップの企画立案、実施

３．文化資源計画事業

文化資源計画事業は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、継続性の高い事業、または計画的に実施する事業で、３つの分野（資料関連、展示、博物館社会連携）に分けられる。

１）資料関連分野

標本資料の撮影等業務

本事業は、標本資料を研究、展示、情報提供等に有効利用するために、標本資料の撮影、計測、及びそれらに付随する業務をおこなうものである。標本資料の正確かつ詳細な画像情報を記録し、標本資料を有効に活用するための基礎的データの蓄積を目的としており、大学共同利用機関として資料に付随する情報の公開等に供するデータを作成する基盤的な事業である。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【標本資料関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関する情報サービス、展示準備・展示運営のための資料管理及び情報の作成・管理等を行うものである。

研究資料整理・情報化及び利用管理業務【データベース関連】

本事業は、本館が所蔵する標本資料に関する情報の作成及び資料の整理等を行うとともに、当該資料に関するデータベース掲載情報の作成、更新作業及び「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」に係るデータ整理業務を行うものである。

標本資料の整理・利用 データベース整理ワーキングに係るDBシステム要件の精査

現在、公開している標本資料関連データベース「標本資料詳細情報DB」「標本資料目録情報DB」「標本資料記事索引DB」の運用について、2019年に「データベース整理ワーキング」を立ち上げ、今後の戦略の検討を始めた。本事業は、タスクフォースの設置とデータベースの整理及び統合に向けた検討作業を円滑に進めるため、専従で従事するプロジェクト研究員1名を雇用し、データベースの現状確認と基礎情報整理を実施する事業である。

有形文化資源の保存・管理システム構築

本事業は、本館所蔵資料の保存と活用の両立を目的に、その保存・管理システムを緊急度に応じて構築することを目的にしている。2020年度は、①有形文化資源の保存対策立案としては、総合的有害生物管理（IPM）の考えのもと、生物被害の防除・殺虫対策に関わる資料管理活動を企画、統括した。②資料管理のための方法論策定では、博物館環境および博物館資料の調査、解析、総括をおこなうとともに、収蔵庫再編成に関わる活動を立案し、助言した。③資料の科学的調査法の推進では、本館の資料調査および他機関との共同利用を念頭に、物理的・化学的・光学的の各種調査の実施と拡充をはかった。

トーテムポールの新規製作

開館時に収集され本館前庭に屋外展示しているトーテムポールが、経年により劣化が進み、2017・2018年度の台風により両翼が破損したことから、新たなトーテムポールを制作することとした。制作をカナダ先住民族クワクワカワクゥのアーティストに依頼し、2020年4月に本館に搬入された。その後、6月にトーテムポール設置工事を行い、その様子をYouTubeでライブ配信した。さらに、11月にはトーテムポール新規制作のクラウドファンディングで寄附いただいた方を招いてトーテムポールの解説等の案内ツアーを実施した。

標本資料「ロシアの椀、匙、イースターエッグ」の寄贈受入

本館の中央・北アジア展示を充実させるため、旧ソ連の特別商店ベリョースカ（Beryozka）で1973年に購入されたホフロマ塗りの椀と匙、イースターエッグ型の民芸品の寄贈を受け入れた。ベリョースカはソ連邦対外経済関係省の管轄下にあった全ソ貿易公団が経営するチェーン店で、外国人向けに国産の民芸品、書籍、酒、食料品、衣料、電化製品など多様な商品が販売され、外貨をもつ一部の旧ソ連市民も利用した。寄贈資料は、こうしたソ連時代の制度及び生活の一端を示すものである。

標本資料「ネパール高地の酒器およびマニ車」寄贈受入

本事業は、1959年から70年代にかけてネパール高地で収集された轆轤引きの木製酒器6点とマニ車、油容器、盃、水煙草（4パーツ）の計10点を民博に寄贈受け入れし、南アジア資料の充実を図る目的で実施された。酒器はランタン谷、ダウラギリ山系ミャグディ・コーラ流域などヒマラヤ山麓の村で使われていたもので、保存状態が極めてよく酒器の表面装飾のヴァリエーションも確認できるなど、貴重な資料を所蔵することができた。

標本資料「新作タマサイ（アイヌの首飾り）」の寄贈受入

神戸市在住のガラス（とんぼ玉）作家が古式に模して製作したタマサイ（アイヌの女性が宝物としてきたガラス玉を中心とした首飾り）の寄贈を受け入れた。製作には技術と時間を要する貴重なもので、本館には同様の収蔵品はなく、今後の博物館活動に利用できる資料であるため、受け入れることとした。

標本資料「中国関連のバッジ、キーホルダー、護符等資料」の寄贈受入

中国に関連する標本資料、13件を受け入れた。中国社会の特色ある風習、観光土産、お守り、毛沢東や孫文など近代社会の指導者に関する資料等を受け入れることにより、中国地域の標本資料の充実を図るものである。

標本資料「ベトナムのバッジ（胡志明）」の寄贈受入

ベトナムに関する標本資料の寄贈を受け入れた。今回、寄贈された資料は、ベトナム革命を指導した建国の父である胡志明（ホー・チ・ミン）のバッジである。2004年8月～9月にベトナムのハノイで調査した時に購入したものである。バッジの表には、ベトナム、胡志明の肖像、彼の名前、生まれた年と、死亡した年（1890–1969）などが刻まれている。ベトナム地域の標本資料充実を図るものである。

標本資料「中国雲南省ナシ族女性の前掛け」の寄贈受入

中国雲南省西北部の少数民族であるナシ族の女性が着用するプリーツのついた前掛けを本館で収蔵した。研究ならびに展示、教育普及活動に活用する。この前掛けはナシ族の中で主流派といえる麗江地区のナシ族女性の民族衣装の中でも重要な位置を占めるもので、現地で他のナシ族女性のために前掛けを製作し、その技術に定評を得ている麗江地区のナシ族女性が、昔ながらの製法で2018年に製作したものである。資料的価値が極めて高い。

標本資料「パプアニューギニアの竹笛」の寄贈受入

京都市立芸術大学教授・山田陽一氏が、パプアニューギニアにおいて儀礼における音楽的表現の調査中に収

集した竹笛等の寄贈を受け入れた。

標本資料「パプアニューギニアの斧及びカレンダー資料」の寄贈受入

多賀俊介氏が1978年11月28日から12月５日にかけて、現地を旅行で訪れた際に購入した斧及びカレンダーの寄贈を受け入れた。別途寄贈された音響映像資料とともに独立期のパプアニューギニアに関する資料を充実させた。

標本資料「フィリピン、チボリの民族衣装資料」の寄贈受入

本事業は、東南アジア関連資料、とりわけ民族衣装資料をさらに充実させるため、フィリピンの山岳少数民族チボリの民族衣装を受け入れ、東南アジアの民族衣装に関する研究活動や博物館活動等において活用するものである。

標本資料「民俗芸能衣装資料」の勘定科目替え

本事業は、申請者である日髙真吾が、2021年３月に開催される特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」の準備の一環および研究資料として購入した物品（南部藩壽松院年行司支配太神楽衣装一式（岩手県）、城山虎舞衣装一式（岩手県）、友禅振袖（新潟県））を、標本資料へ勘定科目替えすることを目的とするものである。

２）展示分野

該当するプロジェクトなし。

３）博物館社会連携分野

ボランティア活動支援

国立民族学博物館におけるボランティア活動者の受入要項に基づき、登録したボランティア団体であるみんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）の活動支援をおこなった。

ワークショップの実施ならびにワークシートの運用

特別展関連ワークショップを４回実施した。講師による講義、展示観覧および講師による展示解説、制作等の体験をとおして、参加者が特別展のテーマに関する理解を深める内容とした。ワークシートについては、ホームページに掲載し使用希望者が自由にダウンロードしていただけるように運用し、また展示場の状況にあわせて適宜内容を変更した。社会連携事業検討ワーキングにおいて作成した新規ワークシートは、学校団体にむけて試行調査を行い、改良案を検討した。

音楽の祭日2020 in みんぱく

社会連携活動の一環として、出演者が講堂およびエントランスホールにて演奏する音楽イベントを開催する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、今年度の実施は中止した。

カムイノミ及び「アイヌ古式舞踊」演舞の実施

当館が所蔵するアイヌの標本資料に対して、安全な保管と後世への確実な伝承を目的に、祈りの儀式（カムイノミ）をおこなう予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、今年度の実施は中止した。

みんぱっくの改訂版制作（モンゴル――草原のかおりをたのしむ）

学校機関や各種社会教育施設を対象に貸出を行う学習キット「みんぱっく」は、パック制作後10年を耐用年数とし、また、時代に即した内容にするためにも改訂を行う必要がある。2020年度は「モンゴル――草原のかおりをたのしむ（2011年度製作）」の内容物確認と改訂後の内容物の検討を行った。

情報関連事業

情報関連事業は、2016年度まで文化資源関連事業として実施してきた事業のうち、映像音響資料・研究アーカイブズ資料および情報化にかかわるものを再編し、2017年度から実施している事業である。映像音響資料・研究アーカイブズ資料の蓄積や公開、学術資源の情報化等を通して、文化人類学・民族学及び関連諸分野における共同利用の基盤を整備し、利用を促進することを目的としている。2020年度の情報関連事業の概要は以下のとおりである。

１．情報プロジェクト

情報プロジェクトは、映像音響資料の収集・制作・公開、学術情報のデータベース化等を進める研究プロジェクトである。本館専任教員の提案に基づき、館外の有識者の意見を聴取した上で、情報運営会議の審査により採択し、

提案者の責任において実施する。その成果は共同利用に供するとともに、社会への還元を前提としている。

1）取材・収集分野

●映像民族誌「コロナ状況下の伊勢大神楽――山本源太夫社中の活動記録（仮題）」

提案者：山中由里子

伊勢大神楽は西日本各地で厄払いの獅子舞を演じる職能芸能者のことを指す。本プロジェクトでは、コロナ禍においても巡行を続ける山本源太夫社中を取材した。

●マルチメディア番組「東南アジアの人形芝居（仮）」の制作

提案者：福岡正太

これまで民博が取材および制作した映像素材を基に、東南アジアの人形芝居を概観するマルチメディア番組「東南アジアの人形芝居」を制作した。

●マルチメディア番組「徳之島の歌と踊りと祭り」の制作

提案者：笹原亮二

人間文化研究機構連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」等で作成したマルチメディアコンテンツを基に、ビデオテークにて公開することを目的としてマルチメディア番組「徳之島の歌と踊りと祭り」を制作した。

2．情報計画事業

情報計画事業は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、計画的に実施する事業である。所掌事務又は本館専任教員からの提案を基に、情報運営会議で実施の可否を審議する。ビデオテークやみんぱく電子ガイドで提供する映像の制作、展示等の記録映像の制作、映像音響資料・研究アーカイブズ資料等の寄贈受入などが含まれる。

1）特別展・企画展・コレクション展示パノラマ映像制作

●特別展「先住民の宝」

●梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」

2）ビデオテーク番組制作

●「ウズベキスタンの美味しい羊料理――プロフ・ショルバ」

制作監修：寺村裕史

●「タンディルでパンを焼く」

制作監修：寺村裕史

●「ウズベキスタンの結婚式」

制作監修：寺村裕史

●「みんぱく村に神楽がやって来る！――伊勢大神楽ワークショップの記録」

制作監修：山中由里子

2-4　人間文化研究機構　基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構　基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センターは、2016年度より6ヵ年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。基幹研究プロジェクトは、(Ⅰ)機関拠点型、(Ⅱ)広領域連携型、(Ⅲ)ネットワーク型（地域研究および、日本関連在外資料調査研究・活用）の、3類型から構成され、その研究成果については、出版、データベース、映像および展示の制作等を通じて、学界や社会に広く発信するとともに、大学における新たな教育プログラムとして活用をはかる計画である。

本館が担当しているプロジェクトは以下のとおりである。

●広領域連携型

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

みんぱくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」

代表者：日髙真吾

1．プロジェクト概要

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできた。一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせている。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状がある。

そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにする。また、これらの動向に人間文化研究がいかに貢献しうるのかを考察し、現在（いま）への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指す。

具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という三つの視点から研究を展開する。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって地域文化を有意義な形で表象するためのシステムを構築する。

2．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

国立民族学博物館ユニットでは、本研究課題の成果公開の取りまとめとして、特別展を開催するとともに、2018年度に京都造形芸術大学と連携して実施したリレー講義「民俗文化財の保存・活用入門」を軸とした出版物を刊行する。また、2019年度の国際フォーラムの成果報告としてブックレットを刊行する。

3．年次計画の進捗状況

国立民族学博物館ユニットでは、本研究課題の成果公開の取りまとめとして、2021年３月４日より、特別展「復興を支える地域の文化――3.11から10年」を開催した。本特別展では、2011年の東日本大震災で、復興の原動力として大きな注目がよせられた「地域文化」に注目し、災害からの復興を支える地域文化をめぐる活動を紹介した。また、豊かな社会の礎となる地域文化の大切さとその継承について考える場を提供した。臨川書店より刊行した日髙真吾編『継承される地域の文化――災害復興から社会創発へ』では、地域文化の保存と活用を両立させることを目指した実践研究の成果を取りまとめた。また、ブックレット『地域文化を活用する――地域振興、地域活性に果たす役割』では、台湾と日本における地域文化の活用事例を比較検証し、市民参加型の博物館活動の在り方について考察を進めた。

●広領域連携型

アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

みんぱくユニット「文明社会における食の布置」

代表者：野林厚志

1．プロジェクト概要

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することである。

食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきた。一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っている。

こうした現代社会の食に関わる諸問題を超域的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いである。

なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける『エコヘルス』の新展開」の一つのユニット研究として実施する。「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究し

ようとする新たな研究の視座である。

２．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

本年度は、当初の基本計画にしたがい (1) 定例研究会（若手研究者支援セミナーを含める）、(2) アジア諸地域における基盤調査、(3) アジア地域外での比較調査 (4) 一般公開講演会、(5) 成果刊行論集の編集計画の立案、を中心に進めるとともに、研究成果の公開を国内外で積極的に進める。

３．年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

２回の全体研究会合を行い、プロジェクトで実施した調査の報告、公開した成果の内容を報告し参加者間での議論、意見交換を行った。若手研究者を中心とした食事調査文献資料の渉猟プロジェクトを新規にたちあげ実施した。これは、東アジア・東南アジアにおける食生活の調査記録を集成し、複数の地域間での比較研究を可能とするデータベースの構築を主目的とするものである。同時に、COVID-19による新型肺炎の国内外での流行のために、国内外の調査を実施することができなくなった大学院生、ポスドク研究員の研究活動の活性化も目的とした。計５回の研究会を実施し、基礎データを集成するとともに若手研究者の育成につとめた。

COVID-19による新型肺炎の国内外での感染状況に鑑み、基本的には海外調査は中止もしくは延期をした。これに対応するために予定していた海外旅費を調査地の衛星写真購入費にきりかえ、リモートセンシングによる調査を実施した。また、移動可能な国内調査地における継続調査、予備調査を実施した。

研究成果の公開については、査読付き論文を８本（国際誌５本、国内誌３本）を公刊し、プロジェクト参加者を中心に編集を行った『世界の食文化百科事典』（丸善出版社2021）を刊行するとともに、一般公開講演会は延期とし、次年度開催の準備を行った。具体的にはSDGsと食との関係についての連続講演会を産学連携で実施する計画を立案した。

今後のプロジェクト推進方策

2019年にひきつづき、COVID-19による新型肺炎の感染拡大状況に鑑み、海外調査を含めた野外調査を見直すとともに、昨年度に代替措置としてとったリモートセンシング調査を適宜導入しながら対応していく予定である。また、持ち越しとなった刊行物の出版にむけた編集作業を進める。全体の成果のとりまとめについては、代表ユニットである地球研ユニットのリーダーシップのもとで進めていく。

●ネットワーク型：北東アジア地域研究

北東アジアにおける地域構造の変容――越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化・文明の構造」

代表者：池谷和信

１．プロジェクト概要

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、民博内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、および連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成される。また、北東アジアを研究対象にして、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指している。

ここでの北東アジア地域とは、国・地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としている。従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきたが、これらの国・地域を横断的に捉える新たな試みである。

なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進している。

２．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

国立民族学博物館・北東アジア地域研究拠点では、初年度より行っている館内研究会を継続して開催し、連携拠点である国立歴史民俗博物館との研究交流や館外の研究者との交流を行う。また、国際公開セミナーを開催し、研究情報の収集に努めるとともに、海外の研究者との連携を図る。こうした研究活動を通して構成員各自のテーマか

ら全体のテーマへの議論を深め、最終年度における成果出版を見据えつつ北東アジア地域像の解明に努める。

3．年次計画の進捗状況

本年度は、新型ウイルスの感染症拡大に伴う影響により、当初の計画通りに遂行することは困難となったが、オンラインによるリモートを併用しながら館内研究会（計２回）、国際ワークショップ “Social and Religious Dynamics of the Central Eurasian Steppe: Anthropological and Historical Approaches” を開催した。また、熊本県五木村での企画展「佐々木高明の見た焼畑−五木村から世界へ」、およびそれに伴う研究講演会「なぜ、いま、焼畑なのか『佐々木高明の見た焼畑−五木村から世界へ』展から考える」（計４回）、「焼畑からみた地球の未来」を開催した。このほかにも、第38回大会比較文明学会シンポジウムにおけるパネル「生き物をめぐって現代文明を考える」の組織および季刊民族学における特集の刊行（2021年１月）、国立民族学博物館特別展示「先住民の宝」（2020年10月１日〜12月15日）におけるアイヌに関するコーナーへの協力を行った。

●ネットワーク型：南アジア地域研究

グローバル化する南アジアの構造変動――持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究

副中心拠点「南アジアの文化と社会」

代表者：三尾　稔

1．プロジェクト概要

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変りつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではない。本事業は、人文・社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域的一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進している。このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学（中心拠点）、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の６拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っている。

民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献する。また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、アジアにおける南アジア研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っている。

2．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

本拠点の重点テーマは「南アジアの文化と社会」である。調査研究活動は、「南アジアにおける社会的レジリエンス」を扱う研究ユニット１（「移動・移民」研究班と「社会変動と親密圏」研究班）、「環流する南アジア」を扱う研究ユニット２（「音楽・芸能」研究班と「布」研究班）、そして両ユニットを橋渡しする「宗教」研究班という研究体制を軸に、南アジアの文化と社会の動態の長期的・総合的観点からの解明に取り組んでいる。また副中心拠点として、国際シンポジウム主催や開催支援、事業の研究成果の英文叢書等刊行支援、国際学術交流協定関係の拡大、国際南アジア研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業の国際化の推進を行っている。

【調査研究活動】

南アジアをはじめ海外の各地に拠点メンバーを派遣し、南アジア発の文化の動態やグローバル化の中で維持される南アジア社会のレジリエンスの実態を調査する。調査成果は、拠点独自で編集する成果論文集の刊行を念頭に、昨年度同様、「移民・移動」、「音楽・芸能」、「社会変動と親密圏」、「宗教」、「布」の５つのテーマ別研究会を年に数回開催するほか、拠点全体でユニット２のテーマ「環流する南アジア」に関する合同研究会を１回開催して議論を深め、メンバー間で知見の共有を図る。また、外国人研究者を招聘したMINDAS-South Asia国際セミナーを複数回開催する。さらに、研究交流協定を結んでいるエジンバラ大学との研究協同を推進するため、拠点メンバーを派遣して研究発表の機会を提供し、今後の共同的研究の発展に関して意見交換を行う。

国際的な南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指して2016年度に発足させた「アジアにおける南アジア地域研究コンソーシアム」（以下、ACSAS）の第４回国際シンポジウムをベトナムの研究機関と共催（11月）し、日本から研究者を派遣して研究発表の機会を提供するとともに、シンポジウム後に行う運営会議で今後の共同的研究ネットワークの発展に関して意見交換を行う。また12月には、東京大学、広島大学および京都大学の各拠点との共催による第12回INDAS全体国際シンポジウムの開催準備を支援する。

【研究成果の公開・可視化】

⑴　報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

①　第１回 ACSAS 国際シンポジウム（2017年度）、第２回会議（2018年度）、第３回会議（2019年度）に関する成果論文集のとりまとめと編集作業を引き続き支援する（韓国外国語大学南アジア研究センター発行の学術雑誌 Journal of South Asian Studies の特集号として刊行予定）。

②　2018年１月にネパール・カトマンズで開催した INDAS-South Asia/Martin Chautari 共催の国際シンポジウム（第９回 INDAS 全体国際シンポジウム）に関する成果論集の取りまとめ・編集作業を引き続き支援し、年度内に Routledge 社からの刊行を目指す。また2018年12月に東京外国語大学で開催した国際シンポジウム（第10回 INDAS 全体国際シンポジウム）、2019年12月に龍谷大学で開催した国際シンポジウム（第11回 INDAS 全体国際シンポジウム）に関する成果論集の取りまとめ・編集作業を引き続き支援する。

③　INDAS-South Asia 全体および各拠点が中心となった英文の研究成果に対して校閲の補助を行う。

⑵　教育プログラム等

①　国立民族学博物館と大学の連携に向け、主に関西圏の大学で拠点メンバーがそれぞれ担当する授業等において、同館の活用方法および南アジア展示に関する解説を行い、南アジア地域の理解を促していく。

②　社会人向けセミナー等への出講を積極的に行い、南アジア地域に関する研究成果の普及に努めていく。

⑶　展示等

①　国立民族学博物館の南アジア展示コーナーに関して、「躍動する南アジア」の現在を念頭に置きつつ、随時展示替えや一部改修を行う。

②　本拠点「布」班を中心として企画を進めている、2021年度開催予定の企画展開催の準備を支援していく。

③　同館に寄贈されたネパールのガンダルバ映像音響資料のデータベース化を支援し、南アジアの文化と社会に関する映像音響資料の更なる充実を図る。

【研究プロセスの国内外に向けた情報発信】

拠点が運営するホームページからの情報発信を積極的に進めるとともに、本プロジェクトの国際化をさらに推進すべく、英文情報ページの充実を図る。

【若手研究者の人材育成の取組み】

拠点が主催する個別・合同研究会等で博士後期課程・PD レベルの若手研究者に研究発表の機会を積極的に与え、研究ネットワークの拡充を図る。また若手研究者のフィールドや国際学会への派遣に努め、調査・研究活動を支援する。これらを通じて若手研究者の研究能力の育成に取り組んでいく。

３．年次計画の進捗状況

【調査研究活動】

新型コロナウィルス感染症の流行による海外渡航制限の発令をうけ、今年度計画していた本拠点メンバーの海外派遣が困難となり、南アジア発の文化の動態やグローバル化の中で維持される南アジア社会の実態について、個別の事例を比較検討するための現地調査を行うことはできなかった。しかしながらコロナ禍においても、オンラインによる研究会や国際セミナーを実施することで海外との研究交流を可能とし、最終年度の成果発信に向けて、各々の研究の進展に貢献した。また国際ネットワークの維持構築にも貢献した。

昨年度に引き続き、研究ユニット１「南アジア社会におけるレジリエンス」を「社会変動と親密圏」「宗教」「布」、研究ユニット２「環流する南アジア」を「音楽・芸能」「移民・移動」という各班にわけ、具体的なテーマに絞った個別の研究会を計６回（計88名が参加）、国際セミナーを１回（オンライン開催、計34名が参加）、現代中東地域研究国立民族学博物館拠点との連携研究会を１回（オンライン開催、計23名が参加）開催し、本拠点独自の成果論文集の出版（2021年度刊行予定）に向けた問題意識の共有と議論をさらに深めた。拠点全体としての研究活動の一体性が増す効果が得られた。

本プロジェクトの国際化を担う当拠点の活動として、国際的な（特にアジア圏）南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指して、2016年度に発足させた ACSAS の第４回国際シンポジウムをベトナムのインド・南西アジア研究所と共催で開催する予定であったが（ベトナム・ハノイ、11月11～12日）、新型コロナウィルス感染症の流行をうけて開催を１年延期した（ベトナム・ハノイ、2021年11月18～19日予定）。当シンポジウム延期に伴う代替措置として、第１回 Asian Consortium for South Asian Studies（ACSAS）ウェビナーを ACSAS と共催で開催し（オンライン開催、12月５日、計56名が参加）、プロジェクト内から１名が研究発表、１名がコメントを行った。

また、ウェビナー後に開いたコンソーシアム運営会議において、ウェビナーの講評を行うとともに、研究成果の刊行や共同的研究ネットワークのさらなる発展に関して意見交換を行った。

南アジアのグローバルな重要性が高まるなかで、アジア諸国には南アジア（またはインド）研究センターが次々に設立されつつあるが、各研究センター間を横断した連携は皆無に等しかった。本コンソーシアムは南アジア研究の厚い蓄積を有する日本を基軸として、アジアにおける南アジア研究の連携を図り、欧米によるコロニアル / ポストコロニアルな枠組みとは異なる関係を育んできたアジア諸国の歴史的経験に立脚した南アジアへの視点を新たに確立することで、南アジア研究の国際的な活性化を狙う特色がある。運営面では、第１期事業以来ネットワーク型地域研究の経験を積み重ねてきた本研究プロジェクトが主導し、とくに本プロジェクトの国際化を担う国立民族学博物館拠点がハブとしての役割を果たし、参加各国持ち回りでのシンポジウムの開催やその成果論文集の編集、さらにはメーリングリストを通じた情報共有などを行って、アジア圏を中心に本プロジェクトの存在を広く海外に発信することに貢献している。

英国・エジンバラ大学南アジア研究センターとは第１期事業以来研究交流協定を結び、研究者を相互に派遣して国際セミナー等を開催してきたが、2020年５月に協定の期限を迎えた。そこで先方の代表と交渉して協定をさらに３年間継続することで合意した。また、コロナ禍における来年度本拠点の構成員の派遣に伴う共同的研究の実施についても意見交換を行った。

くわえて、東京大学拠点、広島大学拠点および京都大学拠点主催の第12回 INDAS 全体国際シンポジウム（オンライン開催、12月19～20日、計82名が参加）の開催準備を支援し、拠点メンバーが企画・運営にあたるとともに、メンバーの中から１名が発表を行った。全体集会の企画・運営・成果において、拠点も一定の貢献を果たすことができた。

【研究成果の公開・可視化】

⑴　報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

「報告書・成果論集」

2018年１月にネパール・カトマンズで開催した第９回 INDAS 全体国際シンポジウムに関する成果論集を Routledge 社から刊行した。また、2018年12月に東京外国語大学で開催した第10回、2019年12月に龍谷大学で開催した第11回の INDAS 全体国際シンポジウムの英文での成果論集を Routledge 社から刊行する予定であり、編集作業を進めた。同出版社は海外の大学・研究機関でも高く評価されており、研究成果の国際的な発信に大いに貢献できるものである。

2017年11月にタイ・バンコクで開催した ACSAS 第１回、2018年11月に韓国・ソウルで開催した第２回、および2019年11月にシンガポールで開催した第３回国際シンポジウムの成果論集について、Journal of Indian and Asian Studies からの刊行を目指して編集作業を進めた。同雑誌は韓国外国語大学インド研究所と World Scientific 社（シンガポール）が共同発行する査読誌で、研究成果のグローバルな発信が期待される。

⑵　教育プログラム等

①　国立民族学博物館と大学間の連携促進にむけ、本拠点メンバーが関西圏の大学で担当する南アジア関連の授業において、同館が収蔵する文献・映像資料の活用方法や南アジア展示に関する解説を行い、学生にとって馴染みのない南アジア地域に対する理解を促した。また、同館にて受講学生（日本人および外国人留学生）を対象とした博物館実習を予定していたが、新型コロナウィルスの感染拡大に伴う博物館の休館措置をうけて実施が困難になったことから、関連授業において同館が収蔵する様々なモノを紹介し、南アジア社会の暮らしをモノから理解する機会を提供することで、南アジア地域をより身近に感じさせることに貢献した。

②　同館が定期的に開催するウィークエンドサロンおよび公開講演会にて本拠点のメンバーが講義を行い、南アジア地域の文化について参加者の理解を図った。

⑶　展示等

①　国立民族学博物館の南アジア展示コーナーに関して、「躍動する南アジア」の現在を念頭に置きつつ、展示品の収集作業を支援し、展示コーナーの改修に貢献した。

②　本拠点「布」班の研究成果の一端を国立民族学博物館の企画展として2021年度に開催する計画を立て、本拠点「布」班を中心に企画を進めた。最終年度の企画展にむけて、準備は順調に進んだ。

③　同館に寄贈されたネパールのガンダルバ映像音響資料のデータベース化に向けて、同資料の研究を支援し、将来的な社会的発信に貢献した。

【研究プロセスの国内外に向けた情報発信】

本拠点が運営するホームページをリニューアルし、より分かりやすく、魅力的な掲載方法を検討するなどして、研究情報の国内外への発信をより一層強化した。

【若手研究者の人材育成の取組み】

本拠点メンバーや他大学のPD、助教、講師、准教授レベルの若手研究者に対して、本拠点が主催する班別および連携研究会での発表機会（のべ３名）を提供し、学際的な視点をふまえた研究能力の育成に務め、ワーキングペーパーや論文などの研究成果に結びつくよう働きかけた。また、これまでの人材育成の取り組みが実を結び始め、メンバーの１人がインドのシヴ・ナダー大学とオーストラリアのモナッシュ大学が共同開催した国際シンポジウム（オンライン開催、2021年３月11～２日）に招聘され、研究発表を行った。ACSAS第４回国際シンポジウム（ベトナム・11月11～12日）では発表者の研究発表に伴う旅費の支援を行う予定だったが、新型コロナウィルス感染症の流行をうけて開催が１年延期された（ベトナム・2021年11月18～19日予定）。国際的な学術交流の機会を提供することに取り組んできた。

●ネットワーク型：現代中東地域研究

地球規模の変動下における中東の人間と文化――多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化」

代表者：西尾哲夫

１．プロジェクト概要

現代中東地域研究では、国立民族学博物館拠点を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めている。端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会（共同体）のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究である。

本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知識の資源化プロセスに着目して研究している。中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成・構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っている。流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構想する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となる。そこで(1)「個」から世界への視点による他者観と、(2)社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施している。

２．研究概要（研究目的、基本計画における当該年度の目的）

中東地域の現代的動態について、資源をめぐる問題系として①文化資源（文化遺産、個人と世界観、宗教とマテリアリティなどの問題群）、②自然資源（生態系と生活空間、環境問題と人間、資源と環境ガバナンスなどの問題群）③知的資源（情報環境、コミュニケーションと社会空間、伝統知と教養などの問題群）④人的資源（高齢化、障害者、女性・子ども・若者、経済的弱者やマイノリティ、難民などの問題群）として整理し、それぞれの問題群の検討を通じて、人間文化や人類の普遍性への地平を拓く新たな価値創出を目指す。

国立民族学博物館現代中東地域研究拠点（担当分野：文化資源）では、「個人空間の再世界化」をテーマとし、文化知識の資源化に焦点をあててきた。

プロジェクト５年目の本年度においては、基本計画に則り最終的な研究到達目標の達成と成果公開準備に向け四つの事業計画を中心に研究活動を推進していくことを計画した。(1)前年度までに再帰的に実施してきた調査研究の補足調査実施、(2)各拠点での研究成果の公刊を随時進めるとともに、プロジェクト全体での研究成果公刊にむけた編集作業の加速、(3)漸次実施してきた若手研究者の育成のための公募型共同研究の推進、(4)各拠点の分担課題到達にむけた深度の高いテーマ設定による国際的な研究集会の開催である。しかしながら(1)および(2)に関しては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によって変更を余儀なくされた。

３．年次計画の進捗状況及び今後のプロジェクトの推進方策

年次計画の進捗状況

国際的な人的移動の制限や施設利用制限などにより研究活動にも制約があったなかで、遠隔での研究環境の整備などを行いつつ、これまでの研究活動によって培ってきた人的ネットワークを活用した研究活動を推進しながら、

前年度までの成果を統合した成果発信を行った。

初年度から実施してきた日本語・英語でのレクチャーシリーズを５月上旬からオンラインならびにハイブリッド形式で継続的に実施することで、国内外からより多くの研究者の参加を促した。また昨年度４月に民博拠点・AA研拠点で開催したマギル大学のサルヴァトーレ・アルマンド氏の主編著 *Wiley Blackwell History of Islam* の合評会の成果が、歴史学分野におけるトップジャーナルである *American Historical Review* の126巻１号（2021年３月刊行）に AHR Review Roundtable として掲載された。またプロジェクト初年度にパリで開催した中東における個と世界をめぐる国際シンポジウムの成果を Dominique Casajus, Tetsuo Nishio, François Pouillon, et Tsuyoshi Saito eds. 2021. *Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées*（Senri Ethnological Reports 152）. Suita: National Museum of Ethnology. として刊行した。加えて現代中東地域研究拠点から刊行している Resources for Modern Middle East Studies Series に、プロジェクト二年目に開催したアラブ詩の国際シンポジウムの成果として Akiko Sumi and Tetsuo Nishio eds. 2021. *The Personal and the Public in Literary Works of the Arab Regions.* およびマグリブの博物館資料として Takumi Yamaguchi ed. *Research Source Guide for Museums in the Middle East II: Maghreb.* を刊行した。

さらに秋田大学拠点と協力しながら一昨年度に開催した企画展示「サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年――『みられる私』より『みる私』」を総括しながら過去の研究者による調査データの継承する方法的課題について、第36回日本中東学会年次大会（2020年８月29日）および英国王立人類学協会主催の国際研究集会（2020年９月18日）でパネル報告を行うとともに、次年度における成果刊行に向けた準備を進めた。

今後のプロジェクト推進方策

各拠点で深めてきたそれぞれの各分担テーマを統合し、現代中東地域研究全体での研究成果の発信を進めていきながら、プロジェクトで当初から設定してきた人類や人間文化という普遍的な価値を提供することが可能であるようなグローバル化時代の中東地域研究へと議論を高次に発展させていく。

国立民族学博物館拠点においては、年度前半においては統合的な研究成果の発信に向けた準備を重ねつつ、京都大学拠点と協力しながら編集作業をすすめてきた日本語での現代中東地域研究全体での研究叢書を刊行する。また年度後半には、本研究プロジェクトの総括となる内容の研究成果の発信を行う。

なお新型コロナウイルス感染症の世界的な流行が長期化し、感染状況について予断を許さない状況が続いていることから、新たな生活行動様式を取り入れながら研究活動の推進ならびに成果発信に務める。

2–5　研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

45巻１号（2020年８月31日発行）

- 論文

旧ユーゴスラヴィア時代における鵜飼い漁の技術とその存立条件――北マケドニア共和国ドイラン湖におけるマンドゥラ（Mandra）漁の事例から ―――― 卯田宗平

- 研究ノート

フードスケープ――「食の景観」をめぐる動向研究 ―――― 河合洋尚

- 資料

International Symposium “Future of the Museum: An Anthropological Perspective”
―――― James Clifford, Atsunori Ito, Reiko Saito, Kenji Yoshida, Isao Hayashi, Taku Iida

45巻２号（2020年10月30日発行）

- 論文

ベトナムにおける黒タイ文字の創成について ―――― 樫永真佐夫

- 特集「協働／プロセスの人類学――同時代のアートをめぐる省察から」

序 ―――― 登　久希子・兼松芽永

アート作品の譲渡不可能性――参加型アートとその制作プロセス ―――― 登　久希子

芸術家と非芸術家の関係から生じる「アート」――《Self Select: Nairobian in Tokyo》の実践から ―― 西尾美也

窓花を〈うつす〉窓花展――人類学的表現実践としての映像と展示制作 ―――― 丹羽朋子
アートによる「生活空間の脱植民地化」をめざして――オアハカの民衆聖像崇拝とアクチュアリティの共鳴 ―――― 山越英嗣
アートプロジェクトの図地転換――田んぼの「棚田化／アート化」から考える ―――― 兼松芽永

45巻 3 号（2021年 1 月28日発行）

• 論文
Nominal Echo Formations in Kati: In the Context of Languages of Northern Pakistan ― Noboru Yoshioka
個人の移住歴からみる定住化した狩猟採集民の居住形態――カメルーン東南部のバカを事例に ―――― 彭　宇潔
過程の中の竹製パンパイプと間に合わせのレコーディング・スタジオ――ソロモン諸島アレアレの在来楽器をめぐる音楽的媒介 ―――― 佐本英規

• 研究ノート
モンゴルで撮影された写真の歴史（1880–1930）――学術調査隊による写真コレクションを中心に ―――― 小長谷有紀

45巻 4 号（2021年 3 月12日発行）

• 論文
考証館運動の生成――水俣病運動界の変容と相思社 ―――― 平井京之介

• 資料
国立民族学博物館のビル・ヘンダーソン制作のトーテムポールについて ―――― 岸上伸啓

●Senri Ethnological Studies

No. 103（2020年11月24日発行）
Atsushi Nobayashi and Scott Simon（eds.）*Environmental Teachings for the Anthropocene: Indigenous Peoples and Museums in the Western Pacific*

No. 104（2021年 3 月 1 日発行）
Nobuhiro Kishigami（ed.）*World Whaling: Historical and Contemporary Studies*

No. 105（2021年 3 月12日発行）
Ursula Hemetek, Inna Naroditskaya, and Terada Yoshitaka（eds.）*Music and Marginalisation: Beyond the Minority-Majority Paradigm*

No. 106（2021年 3 月22日発行）
Kazunobu Ikeya and Yoshihiro Nishiaki（eds.）*Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present*

●Senri Ethnological Reports（国立民族学博物館調査報告）

No.151（2021年 3 月12日発行）
Составители Юки Конагая, Наталия Симукова (eds.) Исследователь Монголии А. Д. Симуков: Письма, Дневники, документы

No.152（2021年 3 月12日発行）
Sous la direction de Dominique Casajus, Tetsuo Nishio, François Pouillon, et Tsuyoshi Saito（dir.）*Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient: Approches franco-japonaises croisées*

●民博通信 Online

No.2（2020年 9 月30日発行、旧『民博通信』通巻166号）
1980年代のサーランギ音楽の共有化 ―――― 南 真木人
「死」と「死にゆくこと」の人類学――「看取り文化」の新たな地平に向けて ―――― 浮ヶ谷幸代
沙漠社会に見る適応と移動――アラビア半島の衣装と住居から考える ―――― 縄田浩志

など

No.3（2021年３月31日発行、旧『民博通信』通巻167号）

戦争と食の多様な関係 ―――― 宇田川妙子

北太平洋先住民社会に関する比較研究構想 ―――― 岸上伸啓

月経衛生対処という開発介入とローカルな月経観、女性の身体 ―――― 新本万里子

など

●TRAJECTORIA

No.2（2021年３月31日発行）

・Special Theme

Confronting Museums: Collaboration, Reception, and Experiment in “Tabuluja（Wake Up!）” and “New York, just another city”

Introduction ―――― Mihai Andrei Leaha

Tabuluja（Wake Up!）―――― Rose Satiko Gitirana Hikiji, Jasper Chalcraft, and Shambuyi Wetu

New York, just another city ―――― André Lopes and Joana Brandão

Discussion: Dialogues over Time

―――― Mihai Andrei Leaha, Rose Satiko Gitirana Hikiji, Jasper Chalcraft, André Lopes, and Joana Brandão

・Film

Muakai’s Wedding ―――― Su Hung-En

Lives and Deaths between Ebbs and Flows ―――― Futuru C. L. Tsai

・Article

The Taiwan International Ethnographic Film Festival and the Rise of Indigenous People Documentaries in Taiwan ―――― Hu Tai-Li

・Carte Blanche

The Museum of Mental Furniture

―――― An van. Dienderen, Rosine Mbakam and Thomas Bellinck with a first guest contribution by Hugo DeBlock

●研究年報2018（2020年10月19日発行）

研究年報2019（2021年３月16日発行）

●外部出版

川田牧人・白川千尋・飯田　卓編『現代世界の呪術――文化人類学的探究』春風社（2020年５月30日刊行）

岸上伸啓編『捕鯨と反捕鯨のあいだに――世界の現場と政治・倫理的問題』臨川書店（2020年11月30日刊行）

丹羽典生著『応援の人類学』青弓社（2020年12月23日刊行）

松川恭子・寺田吉孝編『世界を環流する〈インド〉――グローバリゼーションのなかで変容する南アジア芸能の人類学的研究』青弓社（2021年１月22日刊行）

出口正之・藤井秀樹編『会計学と人類学のトランスフォーマティブ研究』清水弘文堂書房（2021年２月26日刊行）

長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編『宗教性の人類学――近代の果てに、人は何を願うのか』法藏館（2021年３月30日刊行）

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんぱくリポジトリ」は、2010年１月12日に一般公開され、11年が経過した。2020年度は、館内出版物『国立民族学博物館研究報告』、『国立民族学博物館調査報告（Senri Ethnological Reports）』『民博通信』電子ジャーナル「TRAJECTORIA」の登録を行った。

2020年度新たに登録したコンテンツは116件で、2020年度末のコンテンツ登録数は5,757件となった。コンテンツのダウンロード数は、年間508,012件に達している。

学術講演会

「ファンタジーの挑戦――もうひとつの世界を想像しよう」

実施日　2020年11月6日（金）
場　所　日本経済新聞社大阪本社 カンファレンスルーム（大阪）
共　催　日本経済新聞社
後　援　岩波書店
参加者　619名（会場参加者114名、ウェブ中継視聴者504名）
講演会趣旨　世の中が乱れると、ファンタジーブームが起きると言われている。フランス革命勃発後、人びとはファンタジーに夢中になったし、関東大震災のあともファンタジーが読まれた。ボッカチオの『デカメロン』はペスト禍のときに書かれたし、『千一夜』最古の写本が成立したとされる14世紀前後は、中東地域でペストが猛威をふるった時期だった。

「みんな今を生きているって、想像しよう」とジョン・レノンは言った。いま一人ひとりが、これからどう生きよう、世の中はどうなるのだろうと不安にかられているかもしれない。ファンタジーは、その問いかけに即答するようなものではない。その役割とは、もうひとつの世界を想像してみること、その可能性の中で日々を生きていくかけがえのなさを見つめることなのである。ファンタジーに思いを寄せることは、広い意味での想像力、創造力という人間に備わった能力の一部である。

人間は、10万年ほど前に言葉を獲得したとされている。おそらくは時を同じくして、さまざまな生存戦略の一部として「虚構の世界を創る」能力も獲得したのである。この能力は他者をあざむくためだけでなく、他者とつながるためでもあっただろう。自分ではどうにもならない事象を前にしてそれを理解し超えていく、たとえ超えられなくても見知らぬものをそばに置き直して楽しむために想像の世界を広げていったのではないだろうか。

ファンタジーという文学ジャンルが広く認められるようになったのは、比較的新しい時代のことである。しかしファンタジーそのものは、人類が言葉を獲得してからずっと人間の営みの一部だった。言葉で世界を発見していく文学行為としてのファンタジーについて、その創造の現場で考えてみた。

プログラム
基調講演　「アラジンはなぜ世界を魅了するのか？――ファンタジーの文明誌」
講　師　西尾哲夫（国立民族学博物館・教授）
対　談　「妄想が世界を創る！」
森見登美彦（作家）×西尾哲夫（聞き手）

「グローバル化する武道と中東」

実施日　2021年3月19日（金）
場　所　オーバルホール（大阪）
共　催　毎日新聞社
参加者　301名（会場参加者140名、Webライブ中継視聴者161名）
講演会趣旨　2021年夏に開催予定の東京オリンピックでは、二つの武道が公式種目となった。柔道と空手道である。本講演会は空手を中心とした武道の中東地域への広がりから、スポーツ文化のグローバル化について探求した。

武道は、もはや日本だけにとどまることなく、そのあり方を変えながら、世界中で親しまれている。一方で、武道が中東地域で人気を集めていることは、日本では意外と知られていない。特に空手は、イスラエル、トルコ、イランなどで広く普及しており、エジプトでは国民的なスポーツになって久しい。一般的に空手は、日本の伝統文化として世界的に知られている。しかし多くのエジプト人空手家は、空手が日本発祥の格闘技であることを深く意識せず、グローバルな世界とつながる手段として稽

古に取り組んでいる。

では、誰が、どのような経緯で、中東に武道を広めていったのだろうか。中東にはどのような社会的、文化的価値があり、武道が受け入れられていくことになったのだろうか。また、武道の何が中東の人々のハートをつかんだのだろうか。武道のグローバルスポーツとしての展開について、中東の事例から考えた。

プログラム

講 演 1　「カラテから考えるエジプトのスポーツと社会」

講　　師　相島葉月（国立民族学博物館・准教授）

講 演 2　「岡本秀樹による中東での空手の普及――日本人の視点より」

講　　師　小倉孝保（毎日新聞社・論説委員）

パネルディスカッション

司 会 進 行：河合洋尚（国立民族学博物館・准教授）

コ メ ン ト：アレキサンダー・ベネット（関西大学・教授）

パネリスト：相島葉月×小倉孝保×アレキサンダー・ベネット

2-6　学会開催

学会開催

2020年11月21日～23日　比較文明学会 第38回大会

開催場所：国立民族学博物館。

2-7　若手研究者奨励セミナー開催

若手研究者奨励セミナー開催

国内の大学院博士課程在籍者及びPD（ポストドクター）などの若手研究者を対象として、2009年度から「みんぱく若手研究者奨励セミナー」の名称のもと、本館教員の講演の後、参加者が特定のテーマで研究発表を行うセミナーを行っている。2017年度からは、研究部改組に伴い、新しく再編された各研究部のミッションに沿った形で当該研究部が年度毎に本プログラムを担当する体制を整えた。2020年度は人類文明誌研究部が担当し、「危機対応をめぐる文化のデザイン――人類の知と技を問いなおす」というテーマが設定され、国立大学の大学院生を含む若手研究者８名が参加した。教員による講演に続き、参加者による研究発表と各コメンテーターを中心に質疑応答が行われ、優秀発表者に「みんぱく若手研究者奨励セミナー賞」が授与された。同時に、図書室、収蔵庫、展示場などの施設見学を実施した。

2-8　研究員制度

外来研究員

BAIFUYING　白　福英（ハク　フクエイ）中国

研究課題：中国・内モンゴルにおける漢民族の牧畜活動に関する研究――オラド後旗の事例から

BIAN Qingyin　辺　清音（ヘン　セイオン）中国　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了

研究課題：新華僑と神戸南京町の相互作用に関する人類学的研究

CHIU Chunni　邱　君妮（チョウ　チュンニ）台湾　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了

研究課題：台湾における地域文化遺産の保存・活用に関する博物館学的研究

De Antoni Andrea（デ・アントーニ　アンドレア）イタリア　立命館大学国際関係研究科 准教授

研究課題：現代日本とイタリアにおける憑依と除霊の体験――宗教・生物医療を感じる身体とジェンダー

GAO Qian　高　茜（カオ　チエン）中国　神戸市外国語大学　非常勤講師／雲南芸術学院デザイン学部 教授
研究課題：中国南西部の少数民族地域における芸術・文化の変容に関する研究

HOFER Theresia（ホーファー　テレジア）オーストリア　Department of Anthropology and Archaeology, University of Bristol Senior Lecturer
研究課題：人類学におけるユニバーサル・ミュージアム・デザイン

HUANG Jie　黄　潔（コウ　ケツ）中国　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任研究員
研究課題：現代タイの都市部における「クニの柱」信仰の集合現象の解明

JIA Yulong　賈　玉龍（ジャ　ユーロン）中国　大阪大学人間科学研究科　博士後期課程修了
研究課題：中国漢族の「親族関係」をめぐる人類学的研究――「つながり」概念を手掛かりに

LIU Zhengyu　劉　征宇（リュウ　セイウ）中国　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了
研究課題：社会主義制度下の食文化と日常生活に関する研究――中国北部の都市を事例として――

LU YIPING　呂　怡屏（ロ　イーピン）台湾　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学
研究課題：文化復興による民族アイデンティティ形成に関する人類學的研究――台湾のシラヤ族の事例

PYEON Seollan　片　雪蘭（ピョン　ソラン）韓国　関西学院大学先端社会研究所 専任研究員
研究課題：チベット難民の越境と第３国への再移住に関する人類学的研究

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante（サウセド　セガミ　ダニエル　ダンテ）ペルー　立命館大学政策科学部 准教授
研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する研究

XIE Li　謝　黎（シャ　レイ）中国　東北芸術工科大学芸術学部 准教授
研究課題：現代中国における「民族服」をめぐる交渉・競争・闘い――「民族服」事象に関する理論的構築に向けて

Yimin　伊敏（イミン）中国
研究課題：中国における少数民族言語地名の漢字表記にみる歴史と文化
――内モンゴル地域におけるモンゴル語と満洲語の地名を中心に

ZHAO Furong　趙　芙蓉（チョウ　フヨウ）中国
研究課題：チベット仏教とモンゴル・シャマニズムの関係性に関する研究――モンゴル地域の土地神信仰をめぐって

ZONG Xiaolian　宗　暁蓮（ソウ　ギョウレン）中国　西南大学国際文化学部 非常勤講師
研究課題：日中相互間における社会イメージの形成および社会記憶の構造に関する研究
――訪日旅行者のインタラクティブな文化交流と相互理解への影響を事例として

秋保　さやか（アキホ　サヤカ）日本
研究課題：内戦後のカンボジア農村開発に関する民族誌的研究

荒田　恵（アラタ　メグミ）日本　天理大学附属天理参考館 学芸員
研究課題：器の中のアンデス世界を体験するメディア展示

伊藤　悟（イトウ　サトル）日本
研究課題：中国西南・東南アジアのタイ系民族における詩的オラリティの継承と創造的実践に関する研究

伊藤　渚（イトウ　ナギサ）日本
　研究課題：布と人の関わりを通じた身体観の変遷に関する人類学的研究
　　――ラオス北部タイ系民族の女性の織る布と紋様に注目して

稲井　啓之（イナイ　ヒロユキ）日本　日本学術振興会 特別研究員／京都大学アジアアフリカ地域研究資料センター 特任研究員
　研究課題：アフリカ内水面における「よそ者」に着目した持続的水産資源管理構築に関する研究

井家　晴子（イノイエ　ハルコ）日本
　研究課題：妊娠・出産の異常とその対処法に関する文化間比較研究

井上　航（イノウエ　コウ）日本
　研究課題：音・声・言葉をつなぐ身体――ブラウクルン語の表出性からの接近

今井　彬暁（イマイ　アキトシ）日本
　研究課題：ベトナムのモン社会における死者のエージェンシーの研究

内田　修一（ウチダ　シュウイチ）日本
　研究課題：都市環境におけるソンガイの精霊憑依の実践の研究

緒方　しらべ（オガタ　シラベ）日本　大阪大学 非常勤講師
　研究課題：感性と制度のつながり――芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える

岡本　尚子（オカモト　ナオコ）日本　洗足学園音楽大学音楽学部 非常勤講師／実践女子大学 非常勤講師
　研究課題：「J.-C. マルドリュス遺贈コレクション」中の『詞華集』研究

風間　計博（カザマ　カズヒロ）日本　京都大学大学院人間・環境学研究科 教授
　研究課題：オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究

川口　聖（カワグチ　キヨシ）日本
　研究課題：日本における手話の言語変化に関する研究

神田　和幸（カンダ　カズユキ）日本　中京大学名誉教授／NPO 手話技能検定協会理事長
　研究課題：新手話学の構成素の実証的検証研究

楠　和樹（クスノキ　カズキ）日本　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任助教
　研究課題：第二次世界大戦後のケニアにおける越境性動物疾病対策と国家統治の変容

工藤　さくら（クドウ　サクラ）日本　東北大学 学術研究員
　研究課題：ネワール低カースト女性の儀礼実践とその変容に関する宗教人類学的研究

工藤　由美（クドウ　ユミ）日本　東邦大学看護学部 非常勤講師／慶應義塾大学法学部 非常勤講師／江戸川大学社会学部 非常勤講師／明海大学外国語学部 非常勤講師
　研究課題：チリ先住民マプーチェの民族医療の都市的展開に関する人類学的研究

栗山　新也（クリヤマ　シンヤ）日本　沖縄県立芸術大学付属研究所共同研究員
　研究課題：三線が引き出す社会関係、価値、感情――大衆楽器が人びとに与える効果の研究

児玉　徹（コダマ　トオル）日本　筑波大学准教授（筑波会議・TGSW 推進ユニット ユニット長兼務）／一般財団法人国際貿易投資研究所 客員研究員

研究課題：産官学民連携のもとで文化ツーリズム推進策の人類学的な分析
——ワインツーリズム推進政策の国際比較を中心に

近藤　祉秋（コンドウ　シアキ）日本　神戸大学大学院国際文化研究科 講師
研究課題：先住民と情報化する社会の関わり

坂口　奈央（サカグチ　ナオ）日本　東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了
研究課題：災害遺構を巡る住民の語りをもとにした集合的記憶形成過程の研究

佐川　徹（サガワ　トオル）日本　慶応義塾大学文学部 准教授
研究課題：統治のフロンティア空間をめぐる人類学——国家・資本・住民の関係を考察する

崎田　誠志郎（サキタ　セイシロウ）日本　日本学術振興会 特別研究員
研究課題：東地中海域における小規模漁業の漁場利用生態と漁場管理制度の統合的解明

櫻井　想（サクライ　ソウ）日本　龍谷大学大学院国際文化研究科 研究生／龍谷大学グローバルアフェアーズ研究センター リサーチアシスタント
研究課題：中国都市部における古物の攤販市場をめぐる＜空間＞と＜場所＞の民族誌
——天津の「鬼市」を事例として

佐藤　浩司（サトウ　コウジ）日本
研究課題：オーストロネシア語族の建築に関する比較研究

佐藤　吉文（サトウ　ヨシフミ）日本　神戸市外国語大学 非常勤講師
研究課題：先スペイン期のアンデスにおいて禿頭とは何か——「第三のジェンダー」に関する考古学的研究に向けて

荘司　一歩（ショウジ　カズホ）日本　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学
研究課題：先史アンデスにおける公共建造物の出現と生態資源利用

新本　万里子（シンモト　マリコ）日本　広島大学アクセシビリティセンター 教育研究推進員
研究課題：出産をめぐる保険・医療事業の影響に関する文化人類学的研究

杉本　敦（スギモト　アツシ）日本　東北学院大学文学部・法学部 非常勤講師／東北大学文学部 非常勤講師
研究課題：小規模農家支援をめぐる貧困概念の文化人類学的研究——EU 農政下のルーマニアを例に

次下　利春人（ズグスタ　リチャード）日本
研究課題：西部ボルネオ島のダヤク系民族に関する歴史人類学研究

鈴木　博之（スズキ　ヒロユキ）日本
研究課題：チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究

高木　仁（タカギ　ヒトシ）日本
研究課題：人とウミガメの民族誌(2)

髙野　哲司（タカノ　サトシ）日本　総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位取得退学
研究課題：近現代の日本の都市における庶民の庭の植物利用

高橋　晴子（タカハシ　ハルコ）日本
研究課題：服装・身装文化デジタルアーカイブの国際化および標準化の検討と実践

高屋　雅彦（タカヤ　マサヒコ）日本　近畿大学医学部精神神経科学教室 講師／滋賀刑務所 医務課長
　研究課題：精神科医療の比較制度分析――人類学的アプローチの可能性について

竹村　嘉晃（タケムラ　ヨシアキ）日本
　研究課題：移民の身体ポリティクス――インド舞踊のグローバル化とエージェンシー

田沼　幸子（タヌマ　サチコ）日本　東京都立大学大学院人文科学研究科 准教授
　研究課題：ネオリベラリズムの中のモラリティ

田村　卓也（タムラ　タクヤ）日本
　研究課題：東アフリカ沿岸部の小規模漁業者による水域環境の利用に関する研究

辻本　香子（ツジモト　キョウコ）日本　大阪芸術大学 非常勤講師／京都精華大学 非常勤講師／近畿大学 非常勤講師／大阪府立大学 非常勤講師
　研究課題：都市における芸能を主としたイベントの構築にみる音環境の研究

常田　夕美子（トキタ　ユミコ）日本　大阪大学人間科学部　非常勤講師／京都女子大学大学院現代社会研究科 非常勤講師
　研究課題：インド・オディシャーにおける親密圏の変容――恋愛・婚姻・家族をめぐる情動と経験

内藤　直樹（ナイトウ　ナオキ）日本　徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学学域 准教授
　研究課題：カネとチカラの民族誌――公共性の生態学にむけて

仲尾　友貴恵（ナカオ　ユキエ）日本　京都大学大学院文学研究科 非常勤講師
　研究課題：タンザニア・ダルエスサラームにおける身体障害者の生活基盤

中川　敏（ナカガワ　サトシ）日本　大阪大学大学院人間科学研究科 教授
　研究課題：文化人類学を自然化する

中川　渚（ナカガワ　ナギサ）日本
　研究課題：先史アンデス形成期における社会動態

永田　貴聖（ナガタ　アツマサ）日本　宮城学院女子大学 准教授
　研究課題：複数エスニシティ・ナショナリティ関係の文化人類学研究

中田　梓音（ナカタ　シオン）日本
　研究課題：対人関係の構築過程における言語コミュニケーション研究

中谷　文美（ナカタニ　アヤミ）日本　岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授
　研究課題：伝統染織品の生産と消費――文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐって

中野　歩美（ナカノ　アユミ）日本　関西学院大学先端社会研究 専任研究員
　研究課題：インド北西部に暮らす移動民の住まい方に関する研究

中道　静香（ナカミチ　シズカ）日本　大阪大学 非常勤講師／天理大学 非常勤講師
　研究課題：『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相

中村　真里絵（ナカムラ　マリエ）日本　園田学園女子大学シニア専修コース 非常勤講師／大谷大学文学部 非常勤講師 / 大阪国際大学国際教養学部 非常勤講師／神戸女子大学 非常勤講師／桃山学院大学 非常勤講師／龍谷大学 非常勤講師

研究課題：世界文化遺産バンチェン遺跡の遺物の古美術品化とその価値づけをめぐる文化人類学的研究

中村　友香（ナカムラ　ユカ）日本　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科博士後期課程修了
研究課題：ネパールにおける近代医療の市場化――医療アクセス・薬剤・身体経験

難波　美芸（ナンバ　ミキ）日本　一橋大学社会学研究科博士後期課程単位取得退学
研究課題：インフラストラクチャーが作る多時間性――ラオス北部ルアンナムター県の事例

二階堂　祐子（ニカイドウ　ユウコ）日本　奈良先端科学技術大学院大学 特命准教授
研究課題：出生前検査の「対象となる妊婦」に関する人類学的研究――サブスタンスの地域性と動態

西　真如（ニシ　マコト）日本　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特定准教授
研究課題：心配と係り合いについての人類学的探求

額田　有美（ヌカダ　ユミ）日本　日本学術振興会 特別研究員／同志社大学グローバル地域文化学部 非常勤講師／大阪大学人間科学部 非常勤講師
研究課題：ラテンアメリカ地域における「先住民性」についての民族誌的研究――コスタリカを中心に

野嶋　洋子（ノジマ　ヨウコ）日本
研究課題：無形文化遺産の継承・変容と自然災害による影響の動態的把握――バヌアツ北部事例研究

登　久希子（ノボリ　クキコ）日本
研究課題：社会をつくる芸術――「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究

早川　真悠（ハヤカワ　マユ）日本　摂南大学外国語学部 非常勤講師／神戸女学院大学文学部 非常勤講師／関西大学社会学部 非常勤講師／久米田看護専門学校 非常勤講師
研究課題：レソトにおけるジンバブエ移民行商人の会計方法にかんする人類学的研究

林　由華（ハヤシ　ユカ）日本　甲南大学 非常勤講師／大阪大学 非常勤講師
研究課題：日琉諸語における情報構造標示システムの変遷について

深海　菊絵（フカミ　キクエ）日本
研究課題：家族と倫理――米国ポリファミリーを事例として

福間　真央（フクマ　マオ）日本　北部国境大学院大学 ポスドク研究員
研究課題：境界域の先住民――モビリティ、記憶、境界

藤井　真一（フジイ　シンイチ）日本　天理大学国際学部 非常勤講師
研究課題：贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究――ソロモン諸島の事例から

藤田　瑞穂（フジタ　ミズホ）日本　京都市立芸術大学 学芸員
研究課題：拡張された場における映像実験プロジェクト

古川　不可知（フルカワ　フカチ）日本　九州大学大学院比較社会文化研究院 講師
研究課題：モビリティと物質性の人類学

松岡　佐知（マツオカ　サチ）日本　日本学術振興会 特別研究員／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任研究員
研究課題：高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割――南インドの事例から

松岡　とも子（マツオカ　トモコ）日本　総合研究大学院大学人文科学研究科博士後期課程単位取得退学
　研究課題：韓国近現代画家金煥基が描いた朝鮮文化を象徴するモチーフ――1950年代の作品から

松田　有紀子（マツダ　ユキコ）日本
　研究課題：花街の担い手コミュニティによる「伝統」継承をめぐる歴史人類学的研究

盛　恵子（モリ　ケイコ）日本　京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 特任研究員
　研究課題：セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張

山　泰幸（ヤマ　ヨシユキ）日本　関西学院大学人間福祉学部 教授
　研究課題：グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス

山極　海嗣（ヤマギワ　カイシ）日本　日本学術振興会 特別研究員
　研究課題：ミクロネシア――南琉球の比較分析による初期人類の島嶼適応戦略の解明

山本　文子（ヤマモト　アヤコ）日本　和歌山県立医科大学保健看護学部 非常勤講師
　研究課題：ミャンマー都市部における民間信仰の文化人類学的研究

山本　泰則（ヤマモト　ヤスノリ）日本
　研究課題：文化資源情報の構造的記述と活用に関する研究

横田　浩一（ヨコタ　コウイチ）日本　亜細亜大学国際関係学部 非常勤講師／聖心女子大学文学部 非常勤講師／川村学園女子大学 非常勤講師／東洋大学生命科学部 非常勤講師
　研究課題：潮州系華人の宗教領域における統治と放縦に関する研究

吉直　佳奈子（ヨシナオ　カナコ）日本　高崎経済大学 非常勤講師
　研究課題：生殖の知識・認識・経験――日本における生殖補助医療の受容／拒否についての人類学的考察

渡辺　浩平（ワタナベ　コウヘイ）日本　立教大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学
　研究課題：アメリカ先住民ナヴァホ指定居留地における共歓の人類学的研究

渡辺　裕木（ワタナベ　ユキ）日本　フェリス女学院大学 非常勤講師（スペイン語）
　研究課題：メキシコ先スペイン期の遺跡に与えられた自国のアイデンティティー形成に果たす役割

特別共同利用研究員

　本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。
　特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけではなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。
　2020年度は、国立大学１人、私立大学１人、計２人の大学院生を受け入れた。

2-9　データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

●標本資料および映像取材地域

●標本資料の収集・利用状況

・2021年３月31日現在の収蔵資料数（未登録資料含む）

海外資料／179,264点（未登録資料含む）　国内資料／165,879点（未登録資料含む）　総点数／345,143点（未登録資料含む）

・大学・博物館等への貸し出し

総点数／157点

●映像音響資料の収集・利用状況

・取材

山中由里子　日本、伊勢大神楽の映像音響資料収集

2020年９月、10月、11月、12月、2021年１月

・2021年３月現在の収蔵資料数

映像資料／8,277点　音響資料／64,421点　総点数／72,698点

・資料の利用

利用総件数／72件（内、大学20件）　資料利用総点数　404点（内、大学112点）

館内利用など

利用件数／30件　資料利用点数／204点

特別利用（館外での上映・試聴など）

利用件数／41件　資料利用点数／203点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2020年度図書室の活動

１．利用者サービス

利用者支援の一環として、若手研究者奨励セミナーの際に、図書室案内を行った。

２．資料整備関連

1）遡及入力事業として、国立情報学研究所NACSIS-CAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2020年度はマイクロ資料について図書2,562件、新聞雑誌４タイトル（125件）の遡及入力を行った。

2）資料整備関連事業として、書庫・探究ひろばの約22万冊の蔵書点検を行った。

●2020年度新規受入数

日本語図書	1,852点	外国語図書	1,566点		
AV資料他	92点	製本雑誌	704点	合計	4,214点

●2021年３月末現在の収蔵図書数

日本語図書	270,428点	外国語図書	415,855点	合計	686,283点
日本語雑誌	10,162種	外国語雑誌	7,070種	合計	17,232種

●利用状況（2020年度）

入室者	全体	6,051人
	館外者	803人
時間外入室者		125人
うち日曜、祝日		27人
貸出	図書	9,373冊
	雑誌	207冊
うち館外貸出図書		1,220冊
HRAF　利用受付		6件 （カウンター受付件数）

文献複写	受付	国内（うち謝絶）	1,559（118）件
		国外（うち謝絶）	9　（9）件
		来室	2,146　件
	依頼	国内	174（13）件
		国外	0　（0）件
現物貸借	受付	国内	542（32）件
	依頼	国内	249（21）件
		国外	0　（0）件
事項調査		受付	7　件

民族学資料共同利用窓口

2006年度に、本館が所蔵する民族学資料の利用に関する問合せ窓口として「民族学資料共同利用窓口」を設置した。本館の民族学資料が、館内外における各分野の研究・教育において有効利用され、社会に還元されることを目的に、問合せ窓口を一本化したものである。

2020年度の問合せ件数は、156件であった。

問い合わせ者別	（件）
教員（大学）	21
大学院生	8
大学生	4
教員（小・中・高）	1
学生（小・中・高）	1
博物館・美術館関係	15
図書館	4
教育・研究機関	3
マスコミ関係	0
会社・団体	29
一般	29
民博教職員	41
計	156

問い合わせ者の所属機関別		（件）
公的機関	大学・大学図書館	32
	博物館・美術館	31
	小・中・高	3
	その他教育機関	0
	研究機関	2
	公共図書館	3
	地方公共団体	2
	各種団体	0
民間	研究機関	0
	会社	22
	団体	6
個人	館外	29
	館内	26
	不明	0
計		156

資料の利用目的		（件）
調査・研究	研究*1	43
	論文作成	8
	学習*2	1
	図書館から	3
	授業で利用	19
	その他	8
	小計	82
館内利用	刊行物作成	3
	館の事業	15
	参考資料	1
	資料の複製	0
	小計	19
業務用	展示用	16
	番組制作	1
	出版物作製	24
	参考資料	4
	入手方法	2
	その他	4
	小計	51
その他	寄贈申出	3
	その他	1
	小計	4
合計		156

注）*1 大学生以上の調査を「研究」とする
　　*2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築事業

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、石毛直道、泉靖一、岩本公夫、内田勣、梅棹忠夫、江口一久、大内青琥、沖守弘、桂米之助、鹿野忠雄、木内信敬、菊沢季生、栗田靖之・別府春海、小林保祥、篠田統、杉浦健一、西北ネパール学術探検隊1958年データカード、土方久功、馬渕東一、丸谷彰、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブの資料目録の作成等を行い、その成果を順次公開している。

2020年度は、昨年度に引き続き資料の整理作業を行い「杉浦健一アーカイブ」、「菊沢季生アーカイブ」、「岩本公夫アーカイブ」の資料追加寄贈を受入れた。また、アーカイブズ文書資料の特殊性に鑑み、複写にあたっては申請者の研究内容との関連性等を総合的に判断した上で許可することや、複写の申請は原則として来館時に限ること等を明記することとして、規程の改正を行った。さらに、近年国外からの来館者の利用申請が増加傾向にあることを踏まえ、利用申請書及び同意書の英語版を作成した。加えて、本館が大学共同利用機関として資料を適切に利用させるために、資料の利用方法について著作権者と確認する様式の検討を行った。

目録を公開し、利用に供しているアーカイブは22件である。2020年度の利用状況は閲覧・視聴が21件、特別利用が13件、事業利用が１件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

・標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2019年度までの作成件数	286,431
2020年度の作成件数	76
2020年度のアクセス件数	140,933

・標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2019年度までの作成件数	77,259
2020年度の作成件数	3,419
2020年度のアクセス件数	10,088

・標本資料記事索引

本館関連出版物に掲載された所蔵標本資料の解説について、その書誌事項を標本資料別に整理したデータベース。

2019年度までの作成件数	69,264
2020年度の作成件数	6,775
2020年度のアクセス件数	5,441

・韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2019年度までの作成件数	7,827
2020年度の作成件数	0

2020年度のアクセス件数　3,490

• ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　2,992
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　2,417

• チベット宗教図像（白描画）

本館が所蔵する「チベット仏画コレクション」に含まれる木版の白描宗教図像およびチベット仏教古派とポン教の魔除け・厄除けの護符に関する基本情報を収録（画像あり）。

2019年度までの作成件数　——
2020年度の作成件数　1,439
2020年度のアクセス件数　——

• 映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVD など映像資料の情報。

2019年度までの作成件数　8,223
2020年度の作成件数　54
2020年度のアクセス件数　2,894

• ビデオテーク

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。

2019年度までの作成件数　775
2020年度の作成件数　49
2020年度のアクセス件数　15,007

• 音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1 曲または 1 テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2019年度までの作成件数　849
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　445

• 松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　170
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　1,220

• 京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　22,361
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　1,749

• 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料――大島襄二写真コレクション

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数	7,889
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	753

• アフリカ　カメルーン民族誌写真集――端信行コレクション

端信行本館名誉教授が1969年から90年代初頭にかけて行った、おもにアフリカのカメルーン共和国での民族学的調査のなかで撮影した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数	6,530
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	2,107

• 沖守弘インド写真（日本語版、英語版）

写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり。）

2019年度までの作成件数	21,971
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	6,595

• ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数	3,879
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	2,423

• 焼畑の世界――佐々木高明のまなざし

佐々木高明（本館元館長）が、調査で撮影・記録した写真の中から、特に日本の焼畑に関するものを収録（画像あり）。

2019年度までの作成件数	454
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	3,493

• 音響資料目録

本館が所蔵するレコード、ＣＤ、テープなど音響資料の情報。

2019年度までの作成件数	62,651
2020年度の作成件数	1,770
2020年度のアクセス件数	5,227

• 音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。

2019年度までの作成件数	351,802
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	13,089

• 図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。

2019年度までの作成件数	650,610
2020年度の作成件数	3,411

2020年度のアクセス件数　1,740,150

• 梅棹忠夫著作目録（1934〜）

著書・論文をはじめ本の帯の推薦文にいたるまで、梅棹忠夫本館初代館長のあらゆる著作を網羅した目録情報。

2019年度までの作成件数　6,911
2020年度の作成件数　63
2020年度のアクセス件数　3,192

• 中西コレクション――世界の文字資料

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2019年度までの作成件数　2,729
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　67,813

• 吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2019年度までの作成件数　33,450語（40,596頁）
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　548

• Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok（ボントック語音声画像辞書）

Lawrence A. Reid氏（ハワイ大学名誉教授）が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナアン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2019年度までの作成件数　7,717
2020年度の作成件数　3,503
2020年度のアクセス件数　1,744

• 日本昔話資料（稲田浩二コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。音声は館内限定公開。

2019年度までの作成件数　3,696
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　2,110

• rGyalrongic Languages（ギャロン系諸語）［英語、中国語］

長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース（音声あり）。83の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200の文例を収録している。

2019年度までの作成件数　41,078語（文例：15,706件）
2020年度の作成件数　0語（文例：0件）
2020年度のアクセス件数　12,871

• 衣服・アクセサリー

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　31,696
2020年度の作成件数　589

2020年度のアクセス件数　20,914

• 身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事（カレント）、2) 服装関連日本語雑誌記事（戦前編）、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2019年度までの作成件数　181,770
2020年度の作成件数　1,846
2020年度のアクセス件数　7,817

• 近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日常に定着していなかった1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2019年度までの作成件数　11,905
2020年度の作成件数　2,609
2020年度のアクセス件数　1,694

• 身装画像――近代日本の身装文化

和装と洋装が拮抗していた1868年（明治元年）から1945年（昭和20年）までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。

2019年度までの作成件数　6,741
2020年度の作成件数　23
2020年度のアクセス件数　22,991

• 3 次元 CG で見せる建築――東南アジア島嶼部の木造民家

佐藤浩司本館准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。民家の 3 次元 CG から作成した gif アニメーションにより建築物内外を巡回して見ることができる。

2019年度までの作成件数　36 地点　57棟
2020年度の作成件数　2 地点　4棟
2020年度のアクセス件数　346

• 津波の記憶を刻む文化遺産――寺社・石碑データベース

日本の沿岸部に残されている、地震や津波災害の記憶を伝える寺社や石碑、銘板などの情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　440
2020年度の作成件数　30
2020年度のアクセス件数　50,553

• 平成の百工比照コレクション

金沢市と金沢美術工芸大学が、全国各地の工芸品について、工程・技法がわかる見本や製品見本、製作道具、材料を収集整理して作成した標本集「平成の百工比照」に関する情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数　553
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　528

●館内で利用できるデータベース

• 標本資料詳細情報（館内専用）

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2019年度までの作成件数　278,397

2020年度の作成件数　8,155
2020年度のアクセス件数　32,494

• カナダ先住民版画
本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち――カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。
2019年度までの作成件数　158
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　27

• 音楽・芸能の映像
本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。
2019年度までの作成件数　849
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　119

• 京都大学学術調査隊写真コレクション
「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。
2019年度までの作成件数　42,195
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　376

• 梅棹忠夫写真コレクション
梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。
2019年度までの作成件数　35,481
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　6,742

• オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真
小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。
2019年度までの作成件数　7,999
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　100

• 朝枝利男コレクション
朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。
2019年度までの作成件数　3,966
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　53

• 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料――大島襄二写真コレクション
大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。
2019年度までの作成件数　8,842
2020年度の作成件数　0
2020年度のアクセス件数　14

• 沖守弘インド写真（日本語版）

写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数	22,120
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	19

• 西北ネパール及びマナスル写真

「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2019年度までの作成件数	620
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	21

• タイ民族誌映像――精霊ダンス

田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2019年度までの作成件数	写真：10,082　調査報告：41
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	10

• 東南アジア稲作民族文化綜合調査団写真

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。

2019年度までの作成件数	4,393
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	551

• 日本昔話資料（稲田コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。

2019年度までの作成件数	3,696
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	208

• 国内資料調査報告集

日本国内における、1）民具などの標本資料類の所在、2）伝統技術伝承者の所在、3）民族・民俗映像記録の所在、4）民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2019年度までの作成件数	21,373
2020年度の作成件数	0
2020年度のアクセス件数	78

●2020年度に館外公開されたデータベース

• チベット宗教図像（白描画）（2021年３月29日公開）

2-10　みんぱく施設の利用

博物館施設の利用状況

●本館展示場を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

大阪大学(37)、大阪学院大学(8)、大阪芸術大学(16)、大阪工業大学(10)、大阪商業大学(13)、大阪成蹊大学(32)、大阪人間科学大学(14)、華頂短期大学(20)、関西大学(40)、岐阜大学(8)、京都女子大学(8)、京都橘大学(23)、近畿大学(43)、神戸大学(16)、神戸女子大学(36)、国際ファッション専門職大学(46)、滋賀大学(5)、成安造形大学(21)、摂南大学(25)、千里金蘭大学(4)、中央大学(18)、同志社大学(15)、同志社女子大学(5)、富山大学(6)、阪南大学(14)、桃山学院大学(5)、立命館大学(3)、龍谷大学(9)

＊注　利用申請手続をおこなった大学・研究機関等

□来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

- 学生に様々な民族や文化に触れて欲しいため
- 学生が食生活や衣食住に関する実物資料を観察し、食生活や染織文化に関する理解を深めるため
- 新型コロナウイルス感染症対策が実施されており、安心して演習できると判断したため
- 学生が卒論研究などで博物館での展示やイベントを利用するための予備知識を獲得するため
- 異文化に触れることは、ファッション業界で生きていくために、これからますます必要になるのではないかと考えたため
- 国立博物館として有数の規模を誇り、充実した展示がおこなわれているため
- 東洋史・西洋史を専攻する史学科の学生の参加が多く、関心に沿うと思われたため
- 展示や第一線で活躍している研究者の話を聞くことで国際協力及び日本語教育を軸に世界の言語・文化に係る諸問題を扱っているゼミでの学びを深めるため
- 展示が質量ともに豊富であり、授業の目的である社会科教育との関連性が高く、博物館への関心を高めることができる施設であるため
- 日本の博物館の中でも最大級の規模を持ち、設立の理念と経緯、研究・教育・展示の各方面における現在に至るまでの様々な取組など、国内の博物館のありようを学習するうえで必ず見学しておくべきと考えたため
- ゼミの導入教育で「世界の民族文化を知る」ため
- 博物館を見学調査する学びのため
- 学生に民博の存在と展示物の圧倒的な種類と数を知らせるため
- 博物館実習の一環として展示と研究の関係を学習するため
- みんぱくの研究者の講演を聴くため
- 太陽の塔内部見学と組み合わせて見ることができるため

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、同志社大学［文化情報学部・文化情報学研究科］、千里金蘭大学、学校法人立命館［立命館大学］、学校法人塚本学院［大阪芸術大学・大阪芸術短期大学・大阪芸術大学付属大阪美術専門学校※通信課程含む］、京都大学、同志社大学［グローバル地域文化学部］（1,644）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1）既存施設・設備の有効活用への取組状況

- 施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を2020年度は9回開催した。

2）施設の維持管理の取組状況

- 講堂の舞台を延長し客席と一体的な空間を創出することを目的とした講堂舞台改修工事を行った。
- 感染症対策として適正な換気量を確保するため事務室等の換気設備改修工事、演習室、食堂等の網戸設置工事

を行った。

- 自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。
- 安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の状況調査を行い、防災管理点検、安全巡視点検の結果と照合し、危険箇所の改善を行った。

※館内害虫駆除については、調達係へご確認ください。

3）省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- 昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。

2–11　受賞・特許

受賞

●2020年度の職員受賞者

鈴木英明	2020年７月22日	第35回大同生命地域研究奨励賞
伊藤敦規	2020年11月21日	地域研究コンソーシアム研究企画賞
關　雄二	2020年12月17日	2020年度文化庁長官表彰

●2020年度の当館受賞

国立民族学博物館 九州大学 山口大学	2020年10月１日	2020年度グッドデザイン賞（受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］）
国立民族学博物館 九州大学 山口大学	2020年12月18日	IAUD国際デザイン賞2020銀賞（公共空間デザイン部門）（受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］）
国立民族学博物館 九州大学 山口大学	2021年３月15日	UNIVERSAL DESIGN expert 2021（専門家賞）（受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］）
国立民族学博物館 九州大学 山口大学	2021年３月15日	UNIVERSAL DESIGN consumer 2021（消費者賞）（受賞対象：デジタル触地図［国立民族学博物館触知案内板］）

知的財産形成・特許出願など

2020年度　出願、特許査定なし